



フューチャー・トレーディング

前橋梨乃

公開版

for Smart Phone

Contents

- 第1話 商品
- 第2話 取引
- 第3話 契約
- 第4話 から売り
- 第5話 証拠金
- 第6話 レバレッジ
- 第7話 成り行き
- 第8話 逆ざや
- 第9話 乱高下
- 第10話 一巡
- 第11話 限月
- 第12話 リスクヘッジ
- 第13話 差金決済

★タップすれば各章へジャンプします

第1話 商品

∴∴走った。

ただ、やみくもに走っていた。

その、得体の知れないなにかから逃げるために。

やつらはもう、すぐ後ろまで迫っている。

それは、わざわざ振り向かなくても肌で感じ取れた。耳障りな気管音がすぐそばで聞こえる。腐臭に満ちた息が首筋にかかるほどだ。

湿っぽい暗闇の中をずっと逃げつづけているというのに、僕には、自分がどつちに逃げているのか、どつちに逃げたいのかさえ、よくわかっていない。

それでも、やつらは、確実に近づいてくる。

立ち向かう……？

そんなこと、できるわけがない。

僕にはそんな力なんてない。今はただ、逃げるしかないのだ。

……でも、どうしてこんなことになってしまったのか？

前は、こんなではなかった。

快適とは言えないまでも、この世界は、なんとなく

幸せだった。

それが、いつの間にか、やつらは、僕のまわりで大きくなっていた。知らないうちに、やつらに取り囲まれていた。

それに気がついた時から、ずっと逃げつづけているのに、やつらはまるで、僕の逃げて行く方向を知ってでもいるかのように迫ってくる。

つかまれば、たぶん食い殺されるのだらう。食いつ

くされ、骨までしゃぶられ、そして今度は、やつらの一部になって、誰か次の犠牲者を食う側にまわるのだ。いやだ。そんなの、絶対にいやだ。

どうしたらいいんだ。どこかに逃げ道はないのか？ やつらから、永遠に逃げきれような、そんな、違う世界への出口は……。

ん？ ……光？

ドアだ。あのドアから光が漏れてくるのだ。

向こうは、ずいぶん明るそうだ。

あのドアの向こうへ行けば、やつらは追ってこられないだろう。

急げ、向こうの世界へ行くのだ。この闇の世界から抜け出して。

あつ：：。

やつらが、その肉のただれた手で、服の後ろをつか

んでくる。

はなせ。僕は、行くんだ。

くそつ。服などいらぬ。こんな服など、くれてやる。

僕は、向こうの世界で、もう一度生まれ変わるのだ。

そうだ。そのドアノブをつかめ。そして、ドアを：

：

：：ん?!

：：まぶしい!

なんというまぶしさだ……

寝返りを打った大沢拓也は、ベッドの上の陽の当たっている部分に顔を入れてしまい、目をつむっていてもまぶしかつたのだらう。眠ったまま、顔をしかめた。

そのあと、何かから身を振り払うとでもいうように、手足をばたつかせ、着ていた布団をはねのけた。

そして今度は、ブリーフひとつの体を、膝を抱くよ

うに縮こまらせた。もう十二月、エアコンの暖房がきいているとはいえ、裸ではやはり寒いのだ。

まるで子供がむずかるような声をあげたあと、拓也は目を覚ました。

すぐに、カーテンが開いたままの窓から射し込む陽に手をかざし、不機嫌そうな顔でまた寝返りを打った。

その光から逃れ、全体としては薄暗い室内に目が慣れると、やっと拓也のまわりに現実感が戻ってきた。

つけっぱなしのテレビから、恐ろしげな音楽がくり返し流れていた。画面では、主人公の男が、部屋のドアノブに手をかけたところで凍りついたように停まっている。

そうだ。ゆうべは、このホラーゲームをやっていたのだ。

このステージのボスキャラと戦う寸前でパワーがなくなり、迫ってくるゾンビたちから逃げまわっている

うちに眠くなつた。それで、ベッドにもぐりこんだらしい。

拓也は、身を起こし、ベッドの下に落ちた布団を拾い上げると、それを裸の肩に羽織り、ベッドの上にあぐらをかいた。

この窓から陽が射し込んでいるということ、もう昼近くだ。アパートの裏に、間近に迫る距離でマンションが新築されて以来、部屋に日光が入る時間は限ら

れ、おまけに窓際のベッドにしか当たらなくなっ
てしまった。そして、部屋の中は極端に薄暗くな
った。

まあ、そのおかげで、日照権の補償として新し
いエアコンもつけてもらえたのだ。今後何十年も
ここに住んでいくわけではない拓也にとって、マ
ンションが建ったことは、むしろ、ありがたいと
言ってもいいくらいなのだ。

「そうか、今日は日曜か……」

机の上の目覚まし時計に目をやってから、拓也は独り言を言った。

もちろん大学に行く必要はないが、他にどこか行くあてもない。かといって、昼日中から卒論のつづきを書く気にもならなかった。

以前なら、こんな時は、まず暇そうな友達に電話して、「どっか行かない？」となったのだが、今は誘う友人もいない。

いや、拓也以上に暇を持てあましている友人はたくさんいるだろうが、拓也の側から彼らに声をかける気にならないのだ。

だって、やつらは、「もう決まってる」んだから。

いまさらじたばたしても、後の祭りと言ってよかったです。

みんな、自分が悪いんだ。

早いやつは、三年のうち、去年の夏頃から就職活動を始めていたという。四年になる頃には、みんな、あの程度の目星をつけていたらしい。

単位はきちんと取れていたこともあって、拓也はバイトと遊びに日々を費やし、三年の後期からはあまり大学へも行かず、そんな状況を知らなかった。

いや、まったく知らなかったわけでもない。テレビニュースなどでは、不況にからめて、就職戦線の厳し

さを伝えるニュースが頻繁に流れていたし、拓也のも
とへも、就職情報の出版社から、まるで電話帳のよう
にぶ厚い情報誌が送られてきていた。でも、それが、
自分に差し迫った問題とは感じられなかったのだ。

「そのうち、どうにかなるだろう……」

これまでだってそうだった。高校へ入る時も、大学
受験の時も——もちろん受験勉強はそれなりにしたけ
れど——、行くべき先は、みんな、進路指導の先生や

親が決めてくれた。というか、自分の偏差値ならこれくらい、と、ちゃんとワクが決まっていた。だから、「仕事に就く」というのも、そんなものだろうと思っていたのだ。

そんなふうに行っているうちに、夏休みに入り、一週間ほど岐阜の実家に帰った以外は、ずっと、あるレスランで長期のバイトをやっていた。

で、休みが明けて大学へ行ってみると、友人たちの

目つきが変わっていたのだ。

話している内容も、誰々は内定が出たとか、あの業界はまだ余地があるらしいとか、そんな話題ばかりになっっていた。

拓也は、そこではじめて、自分がのんきすぎたことを悟ったというわけだ。

親しい友だちに「えっ、お前、なんにもしてないの？」とあきれられながら、就職活動の方法を聞き、

あわてて、テレビのコマーシャルなどで名前を知っている会社に、資料を送ってくれと電話をかけた。でも、そんな会社は、その時点では遅いことは明白で、「一度訪ねてみてくれ」と答えてくれたのは一社だけ。あとはみんな、遠回しに、もう決まっていることを伝えられた。

それでもまだ、拓也には、自分のやっていることが現実味のあるものに思えていなかった。

就職活動に実感が持てないというより、「会社に入る」ということがピンとこないのだ。

もちろん、バイトもあれこれやってきたわけだから、働かなければ暮らしていけないことはわかっている。

でも、自分が、どこかの会社に所属して、そこで何十年も同じ仕事をすると実感が持てないのだった。

いや、そんなふうに考えると憂鬱になってくるのである。

拓也はいくつかのバイト先で、「社員」と呼ばれる人たちに接してきた。そして、その人たちは、たいいてい死んだ目をしていた。

多かれ少なかれ「上」にばかり気を遣い、仕事そのものはすこしも楽しそうじゃない。中には、やたら張り切っている「社員」もいるにはいたが、そういうやつはたいいてい、どこかでバイトを見下し、うまく使うことしか考えていないような「いやなやつ」だった。

どこかの会社の社員になるということは、拓也にとつて、自分もその仲間に入るということだ。

はつきり言つて、そんなのは、いやだ。

そんな気持ちがあつたから、秋になつてもまだ、なんとなく本気になれないまま、でも、とりあえずリクルートスーツだけは買って、いくつかの会社をまわつた。

入社試験のようなものを受けさせてくれたところ

も、何社かはあった。しかし、社内を見て、少しはましかなと思えた会社からは、すべて断りの知らせが入った。

そうこうするうちに、友人たちのほとんどは内定をもらってしまい、拓也ひとりを取り残される格好になったというわけだ。

そんなこの一年を思い出し、また憂鬱な気分になっ

ているとき、唐突に、背後に違和感を感じた。

いつもはない、なにかの気配がしたのだ。

布団を羽織ってベッドに座ったまま、顔だけで振り向いてみて、その理由がわかった。

窓の向こうのマンションの、いつも閉められたままだった磨りガラスの窓が開いていた。そして、その中で、何かが動いていた。なにか、ダンスのようなものが移動し、壁のそばに据えられたのだ。動かしている

男は、引っ越し業者らしい。

「ふーん、誰か入ったんだ」

拓也はまた、独り言を言った。

夏前に建ったこの賃貸マンションの、二階より上の部屋はすぐに入居者が決まったようだ。だが、一階はなかなか埋まらなかった。通りに面した玄関側は別に、して、あと三方がまわりの建物と接近しすぎ、部屋に、まともに陽も入らないからだ。

特に、拓也の部屋に面しているこの部屋はひどい。

設計者はなにを考えたか知らないが、裏のアパートの部屋と、手を伸ばせばさわれる位置に、ぴったりと窓が重なっているようなところに、誰が住みたいと思うものか？

後から建った向こうの窓は磨りガラスだったから、閉めておけば見えないにしても、開ければ、こちらの部屋から丸見えだ。両方が窓を開ければ、空間的にも

つながって、まるでひとつの部屋のようにさえなってしまう。プライバシーもなににもあったものではない。

だから拓也も、まず入居者はいないだろうと安心していたのだ。

ところが、どうやら、そういうことを気にしない変なやつが現れたらしい。

「こりゃ、ちよつと、やばいな……」

拓也はそうつぶやきながら、窓に背中を向けたまま、

向こうの部屋をちらちらとうかがった。

と、ダンスを運んでいた引越し業者が、その1D
Kの部屋の突き当たりにあるドアから出ていくのが見
えた。

それで、よくないことだとは思ったが、ベッドの上
に立て膝になり、窓に近づいて、ガラス越しに向こう
の部屋をのぞいた。

その「変なやつ」が、どんなやつなのか知りたかつ

たのだ。

と、その時だった。

向かいの部屋の窓に、脇の見えない部分からすつと人影が現れ、こちらを向いて立ったのだ。

拓也とその人物は、一メートルほどの間隔で、お互い、真正面から顔を見合わせる形になってしまった。

二人とも、一瞬呆気にとられたような顔になった。

拓也の方は、誰もいないと思つてのぞき込んだ部屋

に人がいたことに驚いたからだし、相手の側は、窓側の壁にもたれるかなにかして、振り向いて外を見た。たとたん、目の前に人がいたからだろう。

相手は、女だった。

グレーのトレーナーにジーンズ。真ん中から分けたストレートヘアを、両方の耳の後ろでゴムどめしている。

拓也の方がベッドの上に立て膝をしているし、向こ

うの部屋の床の高さがもうひとつつかめなかったの
で、よくはわからないが、けっこう大柄なようだ。年
は、拓也と同じくらいか、少し上という感じだ。

彼女は驚きの表情から醒めると、一瞬、拓也に笑い
かけようとし、そして、そのあと、視線を下に動かし、
また驚いた表情に戻った。

（「.:.:あっ」）

拓也の側の透明ガラスの窓が閉まっているので声は

聞こえなかつたが、彼女の口が明らかにそう動いた。

彼女のその反応の意味がすぐにわかり、拓也も、同じように声をあげていた。

肩から布団を羽織った拓也の、その下の格好は、ブリーフ一枚の裸。前は布団がはだけ、真正面から見れば、その姿がもろに見える。

一瞬後、女はちよつと目を泳がせ、すぐに懽然とした表情に変わり、あわてて磨りガラスの窓を閉めた。

サッシがぶつかる音がこちらの部屋にも響くほど、力
いっぱいの閉め方だった。

「……あっちゃー、最悪！」

ひとり取り残された格好になった拓也は、両腕で頭
を抱え、崩れ落ちるようにベッドの上にうずくまった。

同じアパートの隣の部屋より、お互いのプライバシ
ーを知りうる立場の人物との初対面だというのに、な
んてことだ。

もちろん拓也の側には悪気も下心もなかったのだが、これではまるで、のぞき趣味の露出狂である。

どうやら、相手がそういう印象を持ったのはまちがいない。あの窓の閉め方を見ればわかる。

しかも相手は、同じ年頃の女の子なのだ。彼女ももちろん動転していたから、かわいかったかどうかはよくわからないが、なんだか、目鼻立ちはすっきりしていた印象がある。

これ以上ないほどの、せつかくのチャンスとシチュエーションを、自分の方からつぶしてしまったのかも
しれない。

いや、そんなことより、これから毎日、どうやって
暮らしていけばいいんだ。

彼女はきつと、二度とあの窓を開けようとしな
いだろう。僕は彼女に、異常者かなにかと思われながら、
日々を送るのだ。

拓也は、頭を抱えたその格好のまま、ベッドの上を芋虫のように這いまわった。

まったく、ついてないときは、とことんついてないことが重なるものだ。

なんか、今日もついてなさそうだな、と、岡崎琴美はトレンチコートの襟を立てながら思った。

地下街の出口の階段を上がっていくと、街路樹の落

ち葉といっしよに木枯らしが猛烈な勢いで吹き降りてきたのだ。

今年シベリア寒気団の勢いが強いとかで、まだ十二月になつたばかりだというのに、連日、最低気温記録を更新している。ことに今日は、日中の気温も十度に達しないだろうと、天気予報は言っていた。

なんでこんな日に、スカートなんかはかなきやならないんだらう。特にこのスーツではなおさらだ。

琴美は、今年、就職活動のためにスーツを二着買った。一着は、春秋物。もう一着は、夏休みに会社訪問するための夏物だ。まさか、こんな時期まで就職先が決まらないとは思っていなかったから、冬物は買っていない。それで今日も、ウール地ではあっても薄手の、春秋物のスーツを着ているのだ。

地下街の出口を出た琴美は、寒さに肩をすぼめながら、そこで立ち止まり、シヨルダーバッグから手帳を

出した。今日の会場は、このあたりのはずだ。

しかし、メモを確かめるまでもなく、目的のビルはすぐに見つかった。一階の入り口付近に、「合同企業説明会」という立て看板が出ていたのだ。

その看板の文字の下には、就職情報出版社の社名が入り、その会社が出す三つの雑誌のタイトルロゴが並んでいた。ひとつは、宅配されてくる——この一年間、琴美が見飽きるほど目にしてきた——新卒用情報誌の

もの。あとのふたつは、中途採用向けの市販情報誌のものだ。

こういう出版社とかがやる「企業セミナー」や「合同企業説明会」は、春先から何度もあるが、最初の頃は、新卒用の情報誌が単独で主催している。ところが、この時期になると、新卒対象だけでは参加企業が集まらず、転職者募集をも兼ねたものになるのだ。それで、転職情報誌のロゴも並んでいるわけである。

琴美は、その看板に近づきながら、こんな時期の説
明会に参加しなければならぬ自分にため息をひとつ
つき、そしてさらに、二つの転職情報誌のロゴを見て、
もっと大きなため息をついた。

この二誌は、ふつう、世の中では男性向きと女性向
きとされている。でも、じつは、表紙や誌面のどこ
にも、そうは明記されていない。いうまでもなく、そ
んなことをはっきりと書けば、男女雇用機会均等法に

抵触するからだ。だから、中に載っている求人広告の「資格」欄にも、「男」とか「女」とかはいつさい限定されていない。どんな仕事にしろ、建前はあくまで「男女同時募集」なのである。限定したら、その企業は、法律違反になるのだ。

しかし、そのぶんを、二誌の編集方針やテレビコマースシャルのイメージを変えることで色分けしている。明らかに男性誌と女性誌という色彩を打ち出して読者

を分けることで、事実上の男女の限定をしているわけだ。当然、広告を出している企業にしても、そのつもりで使い分けている。

：：この民主国家日本では、男も女も、仕事を選ぶ権利は平等に保証されてるのよ。ほら、憲法にだってそう書いてあるじゃない。みんなそれをちゃんと守ってるわ。でもやっぱり、現実には、男と女の役割って、ちがうでしょ。

：：要するに、本音と建前というやつだ。

「もう、ほんとにみんな、インチキでうそばっかりな
んだから」

琴美は、口の中でぶつぶつ言いながら、その看板の脇を通り、ビルの中に入った。

あの不動産屋だって、きつと、女の子だと見くびつて、だましたのだ：：。

ロビーでエレベーターを待ちながら、琴美は、昨日

の引っ越しのことを思い出していた。

就職活動が長期戦になることを覚悟した十月終わり、その効率をもっとよくするために——それに、勤めた後のことも考えて——、琴美は、大学のある埼玉から都内への引っ越しを決意した。

親から仕送りを受ける身で、保証金や引っ越し費用を捻出するのはつらかったが、幸い、この二年間、遊

びと勉強を兼ねて細々とやっていた株のネット取引で、それくらいの蓄えはできていた。

それで、会社訪問の傍ら、都内の不動産屋をまわり、独身者向けの賃貸マンションを探した。そして、ある不動産屋で掘り出し物の物件を見つけたのだ。

まだ新築のマンションだというのに、保証金も家賃も大幅に値引きしてくれるという。

不動産屋の案内で物件を見に行ったら、1DKの部

屋はきれいで、使いやすそうでもあった。

ただ、値引きの理由は、すぐわかった。裏のアパートとびったりくつついている。窓までまったく重なって、同じ位置にあった。

「これはちよつと……」

このせいで入居者がいないに違いないと思い、窓を開けた琴美がつぶやくと、不動産屋が慌てて言った。

「裏の部屋は、同い年ぐらいの感じのいい子ですから」

——そう言われれば、ふつう、女の子だと思っただろう。

部屋の中をのぞかれているみたいなのはやっぱりイヤだったけれど、窓に引かれたパステルオレンジのカーテンはきれいに洗濯されているようだったので、不動産屋の言うのもまんざらうそではないのだろうと感じた。

それで琴美は、イニシャルコストの安さの方をとつ

たのだった。

利益を得るには、リスクはつきもの。多少のがまんはしかたない。

ところが……。

昨日の引っ越しで、窓越しに見たその部屋の住人は、なんと男だったのだ。しかも、ブリーフひとつで人の部屋をのぞくようなやつだ。妙に色白でやせこけた、なんだかオタクっぽいストーリーカーという感じだった。

下見の時の不動産屋のあわてぶりから見て、それを知っていて、琴美をだまそうという意図があったに違いない。

裁判を起こすと脅しでもすれば、賃貸契約を白紙に戻し、お金を取り返すことくらいはできるかも知れない。

しかし、今の自分には、そんなことをやっているゆとりはない。だいいち、前のアパートは引き払ってし

まったのだから、住むところすらなくなってしまう。
けつきよくは、泣き寝入りするしかないのだ。

「リスク・マネジメントがなっていないってことよね」
最終的には自分のうかつさを恥じ、口の中でそうつぶやきながらエレベーターを降りた琴美は、「会社説明会」の会場に入りかけたところで、なにかに気づいたように立ち止まった。

そして、きよろきよろと周りを見回したあと、階段の女子トイレに入った。

トイレのシンクの前に立ち、鏡に顔を映した琴美は、バッグから口紅を出して塗り直した。

「ふー、なんでこんなこと、しなきゃなんないの」
ふだん琴美は、化粧などほとんどしない。大学でも、ずっとすっぴんで通してきた。化粧などに頼らず、中身を充実させようと考えてきたからだ。

しかし、就職の面接ともなれば、そうも言っていない。 「清潔感を感じさせる化粧は必須」と、面接のノウハウ本にも書いてあった。

納得はいかなかったが、現実の問題としては、琴美にもその理由はわかる。

人事担当者や面接官は、たいてい男なのである。

男は馬鹿だから、化粧なんかにすぐだまされるのだ。

「しかし、まったく……」

琴美は、口紅をバツクにしまいながら、舌打ちした。それでも気を取り直し、もう一度鏡を見て、塗ったばかりの唇の端を上げるようにする。

（「素直でかわいい女の子」）

そんな言葉を、心の中で三回となえ、表情をつくつた。

そして、その笑顔を崩さないように気をつけながら、トイレを出た。

この企業説明会、どうやら、主催者側の思惑は大きくはずれたようだ。

会場に入っただけで、琴美はそう感じた。

けっこう広い会場をとってあるにもかかわらず、参加企業は二十社ほどしかない。業種ごとに分けた企業のブースは、なんだか寒々しいほど間を空けて室内に点在していた。反対に、やって来ている求職者の数

は、最盛期の説明会と変わらないほど多い。しかも、みんな、どこか切羽詰まった空気を漂わせているのだ。ちよつとうんざりしたように首を振りながら——それでも、さつきつくった笑顔を壊さないように注意して——、琴美は会場内を歩き、企業ブースの社名プレートを見てまわった。

メーカー、商社、流通、情報サービス……。有名企業など来ていないのはわかっていたが、それにしても、

社名からではなにをやっているのかよくわからないよ
うな会社ばかりだ。

琴美は、「金融・証券」と区分けされたコーナーに
立ち止まり、そこにある四つほどのブースを眺めた。

四つのうち三つはどうやら消費者金融、要するにサラ
金らしい。

あと一社の社名プレートには、「グローバル貿易株
式会社」とある。これもわけのわからない名前だ。本

当に貿易業務を社業としてしているなら、「商社」のコーナーになければならない。「金融・証券」に分類されているところを見ると、たぶん商品先物だろう。琴美はそう思った。

証券会社や銀行はいないまでも、せめて信用金庫とか信販会社くらいは来ているだろうと思っていた琴美の思惑も、完全にはずれたわけだ。

かすかにため息をついた琴美は、それでも気を取り

直して、その「グローバル貿易」のブースに近づいた。

会議用テーブルに布をかけてしつらえてある受付カウンターのの上には、会社案内パンフレットが積み上げられ、その向こうに、背広姿の男が座っている。男はうつむいて、手に持ったなにかの書類にチェックを入れている。

琴美がパンフレットに手を伸ばすと、男はそれに気づいて、目を上げた。

目が合い、琴美が例の笑顔で会釈すると、男もまた、営業的な笑顔を返してきた。でも、それ以上、声をかけてくることはない。

手に取ったパンフレットを開くと、そこには、「21世紀のグローバルビジネスのために」とか、「新時代のトータル・ファイナンシャル・サービスをめざして」とか、これもわけのわからないコピーが並んでいた。思った通り、商品先物の会社であることはまちが

いないようだった。

「あの……」

人事担当の男がなにも言っていないので、琴美の方から声をかけた。

「いいですか？」

カウンターの前に置かれた二脚の椅子にちらりと目をやりながら琴美が言うと、男は営業笑いをことさらに強めて、大きくうなずいた。そのオーバーアクション

が、かえって、琴美のことをそんなに歓迎していない心情を表している。

「S 大学経済学部 の岡崎と申します」

就職活動のために作った名刺を差し出しながら琴美が名乗ると、男はちよつと驚いた顔をした。

「ほお、S 大。じゃ、もちろん、一般職じゃないよね」
ほら来た。琴美はそう思ったが、笑顔を崩さずに言
った。

「ええ、総合職を探しています」

「うん、だろうね。でも、S大の経済で、なんでうちなんかに興味を持ったわけ？」

そりゃ、女子の総合職志望で、入れてくれるところがないからに決まってるだろ。

また琴美はそう思ったが、この男も、そんなことは百も承知の上でできているにちがいないと考え、さらになにっこりと笑って答えた。

「はい、金融自由化が進めば、当然、その主役はデリバティブです。そうなれば、今後は日本でも、資産運用の有効な手段として、商品取引が見直されていくことになると思います。商品取引所法の改正以来、業界の近代化も進んでいるようですし、将来性は大きいと考えました。それに、今の日本で、現実には個人向け資産運用のビジネスノウハウを身につけられるのは、御社のような会社だと思いますから」

「ふふ、そこまで言われちゃ、こっちは言うことなくなっっちゃうな」

人事担当の男は、琴美の言葉に、頭をかくようにして言った。そして、さつきよりちよつと真顔になって、しかし、どこか同情するような感じで話を別の方向に向けた。

「ということとは、君、この時期になっても、金融とか証券だけに業界を絞ってるわけ？」

「ええ。ゼミは金融工学を専攻してますから」

「そっか。そりゃ、たいへんだ。流通とかだったら、まだ潜り込める余地はあるだろうにね」

その言葉に、琴美はちよつとむつとした。それじゃあ、最初から「うちで採るつもりはない」ということではないか。

あんた、いったい、何のためにここに座ってるんだ。そう言ってやりたかったが、ぐつとこらえ、さらに

つづけた。

「最近の金融の考え方については、ずいぶん勉強してきたつもりです。でも、まだ、しよせん学校での勉強にすぎません。将来はファイナンシャル・プランナーとして仕事をしていきたいと思っっていますので、ぜひ御社で、外務員としての生々しい現場経験を積みたいんです」

「うーん、もったいないな。そこまでわかってる子は

なかなかいないのに」

人事担当の男は、腕組みして、ちよつと考えるようにした。

「あのさ、一般職で受けない？ それなら、私も上に無理言つて、押し込めると思うんだ」

「え？ ええ……、でも……」

「一・二年、外務員のアシスタントとして勤めてさ、そこでやる気を示せば、総合職に転換するチャンスも

ないわけじゃない。前例はないけど」

どうやら男は、琴美の懸命さに、ちよつと心を動かされたようだ。彼なりに、採用の方途を考えてくれようとしていた。

この人、そんなに悪いやつじゃないのかも知れないな、と、琴美は感じた。

もちろん、「お茶くみ仕事」で回り道をするのはいやだが、この男の言う方法が、現実的なのかも知れな

い。

ところが、琴美がそんなことを考えてちよつと迷っているうちに、こちらを見ていた男の視線が急に脇に泳いだ。

その視線を追って、琴美がちらりと見ると、わざとらしいほど真新しい紺のスーツの手が、カウンターの上のパンフレットをめくっていた。

「あ、君、もしよかったら、志望とか聞かせてくれな

い？」

人事担当の男は、先刻の琴美の時とは打って変わった対応で、その男子学生を呼び止めた。

「さあ、ここ座って」

「はあ……」

男に言われ、その男子学生は、琴美の横に腰掛けた。

「大学、どこ？」

人事の男が、さっそくきいた。

「H大です」

「そう、学部は？」

「はあ、いちおう、経営ですけど……」

そういうことは、自分から名乗るものだ。

しかたなく、ふたたびパンフレットを見るふりをしてしながら、琴美は、二人のやりとりを聞いて、そう思った。それにしても、「いちおう」はないだろう。

「うちみたいな業界に、興味があるの？」

人事の男は、もう、琴美のことなど眼中にないように、その男子学生に向かっていた。

「はい、これからは国際化の時代ですから、グローバルな舞台で仕事したいと思って……」

なにをとんちんかんなことを言っているんだろう。

こいつ、社名だけを見て、完全に勘違いしてる。

琴美がそう思っていると、人事の男も、ちよつと苦笑するようにしたが、さらにつづけた。

「うん、まあ、やってもらいたい仕事は、そういう、国際的っていうのとは、ちよつとちがうんだけどね」

「あ、いえ、べつに僕、外国行きたいってわけじゃないです。でも、中学時代から、英語とか、わりと得意だったから……」

そこまで笑顔を崩さないように努めてきた琴美も、その言葉に、さすがにうんざりした顔をした。

馬鹿じゃないの、こいつ。その上、話し方も、妙に

甘ったるいし。これで、就職しようってつもり？

ところが、人事の男は、話を打ち切ろうとはしなかつた。

「まあ、仕事については、おいおいわかってくると思うから、とりあえず、エントリーしてみる？」

：：え、あんたは、こんなやつでもいいんかい。

「はい」

男子学生は、うれしそうに答えた。

琴美は、この男子学生にも、そして、人事の男にも、無性にいらいらしてきた。

「じゃあ、来週の水曜に、試験と面接やるから、一度会社まで来てくれるかな」

琴美は、思わず、人事の男の顔をうかがった。

私にはあんなことを言っておいて、こいつには、無条件で試験受けさせるのか。

それは、要するに、こいつが男だからということだ

けが理由なのだ。

先刻、この人事担当のことを、多少なりとも好意的に見た自分が情けなかった。

「はい、行きます。場所、どこでしたっけ？」

それを言うなら、「うかがいます」だろうが：：馬鹿！

まだパンフレットを見るふりをしていた琴美だったが、さすがに頭に来て、その男子学生の馬鹿面に思い

切り皮肉な視線を浴びせてやりたくなつた。

それで、パンフレットを置いて顔を横に向けたのだ。
そして、そこで、琴美は思わず、会場中に響くような声を上げていた。

「あーっ、あんた、のぞき魔！」

「だから、あれは、誤解なんだって」

地下街をすたすた歩いて行くその女の子を追うよう

にして、拓也は必死で言い訳していた。

ちようど昼休みの時刻だからだろう。両側に飲食店の並ぶその通路は、サラリーマンやOLがさかんに行き交っている。女の子はその人波をかわすように進んでいくので、拓也は、何人かにぶつかり、いやな顔をされた。

「ちよ、ちよっと待ってよ。話くらい聞いてくれたっていいだろ」

拓也が言うと、地下鉄の改札口が見えたところで、女の子は急に立ち止まり、くるりと振り向いた。

追っていた拓也もあわてて止まったのだが、勢いもあり、体が接触するくらい近くで向かい合う形になった。そのせいで、拓也は女の子の顔をちよつと見上げていた。靴のヒールは就職活動用でそんなに高いわけではないから、そもそも彼女の方が身長があるのだ。

「私、あんたと話す気なんてないから。すこしはうま

くいきかけてたのに、人の就職、台無しにしといて」

「そ、そりや、こつちだつておんなじだろ」

いや、むしろ、今日については、被害者は自分だと拓也は思った。せつかく就職試験のアポまで取れかかっていたのに、この子があんなことを叫んだせいで、あれ以上、あの場にいられなくなつてしまったのだ。

「いい？ 忘れないでもらいたいわ。先に、裸で人の部屋のぞいてたのは、そつちなんだからね」

女の子が言った。

どうして、そんなことをこんな大きな声で言うんだ。
まわりからの視線にどぎまぎしながら、拓也はそう
思った。

「だから、それについては、さつきから謝ってるじゃない。昨日は、起きたばかりでぼーっとしてたんだって」

「へえ、あんたは寝起きだと、ブリーフ一枚の裸、他

人に見せびらかすわけ。自慢できるような裸でもないくせに」

また女の子が大声で言ったせいで、拓也は顔を赤らめた。恥ずかしさだけでなく、怒りすら湧いてきた。

「そ、そんな言い方、ないでしょうが。悪気があったわけじゃないんだから」

「もう、いいわ。わかったから、これ以上ついて来ないですよ。じゃないと、ストーカーだって、叫ぶよ」

女の子は、そう言うと、またくるりと向きを変え、すたすたと歩き出した。

その言いぐさにさらに頭に来て、拓也は一瞬そこに立ち止まって見送った。しかし、すぐに気がついて、ぶつぶつ言いながらまた後を追った。

「ついて来るなって言ったって、帰り道いっしょなんだから」

と、そのまま地下鉄の自動改札に近づいた女の子は、

バッグから回数券カードを取り出し、振り向きもせず
にそこを通ろうとした。

ところが、いきなりブーという音がして、その改札
がぼたんと閉じたのだ。

どうやら、プリペイドの残金が一区間分より不足し
ていたようだ。

立ち止まった女の子は、改札機からカードを抜き取
ると、忌々しげにそれを見た。そして、振り返ったと

ところで、そこに立っていた拓也と視線が合った。

女の子は、またぶすつとして、拓也を見返した。

しかし、その顔は、さっきまでのとりつく島のない感じではなく、照れ隠しにふくれているような表情だった。

それで、拓也は思わず笑ってしまった。

「なによ」

女の子が言った。

「ねえ、昼だしさ。食事でもしない。昨日のおわびと
転居祝いに、僕がおごるから」

拓也が言うと、女の子はいちおう、さらに不機嫌そ
うな顔をしてみせた。

「えっ、おたく、経営学部だっというのに、先物取引
も知らないわけ？」

「うーん、そういえば、金融概論でちよつと習ったよ

うな気がするな。オプション取引とかといっしょに出てくるやつだろ。そうだ、そのせいで、二単位落としたりしたんだ」

ナイフとフォークを置きながら拓也が言うと、岡崎琴美と名乗ったその女の子は、あきれたようにため息をついた。

「そういう、試験用の知識しかないわけね」

拓也は、ちよつと馬鹿にされたような気がして、ぶ

すつとした。

僕のおごりだときいて、このレストランでいちばん高いランチを注文しておきながら、さつきからずいぶんずけずけ言うじゃないか。

そうは思ったが、拓也はもう、琴美に対して、不思議と悪い感情は持っていないかった。

拓也の誘いにのることを決めたとたん、店も自分で決め、さつきと席に着いた。そのあと、さつきまであ

んなことを言っていたのを忘れたように、屈託なく話しかけてくるのだ。

ずいぶん、さっぱりした性格のようだ。これまで拓也がつきあってきた女の子の中にはいないタイプだった。

しかも、——大柄だから「かわいい」という感じではないにしても——目鼻立ちのはっきりした美人だし……。

「ねえ、コーヒーもいい？」

琴美がきいた。これも、さっぱりした言い方だ。

拓也が苦笑しながらうなずくと、琴美はすぐに、「すみません」とウエイトレスを呼び、そのあとで、拓也に向かって「大沢君も飲むでしょ」と確認すると、さつさと二人分注文した。

たしかに、こういう子なら、いっしょにいても面倒じゃないな。

拓也が琴美を見ながらそう思っていると、琴美が、さっきの話をつづけた。

「ということとはさ。大沢君は、べつに金融志望ってわけじゃないんだ」

「うん、全然。あの会社にしても、貿易会社だと思っただから」

「じゃ、狙いは商社とか？」

「うーん、……よくわかんないけど……」

拓也が言うのと、琴美は、またあきれたように首を振った。馬鹿にしているわけではなく、本当にあきれていようだ。

それで、拓也は、ちよつと言いつつ、言い訳した。

「けどさ、業界しぼれって言ったって、自分がなにに向いてるのかなんて、ほんとのところ、やってみなきゃわかんないだろ。それに、同じ業界だって、職場の雰囲気なんて、会社にもよるんだらうし」

「仕事って、雰囲気とかで選ぶわけじゃないでしょ。

自分が何をやりたいかってことじゃないの？」

「だからさ、それが、わかんないんじゃない？」

拓也の言葉に、琴美は、そんなことを言う方がよほどわからないという感じで、口をとがらせた。

「じゃ、岡崎さんは、はっきりしてるわけ？ 自分のやりたいこと」

拓也がきくと、琴美は、すぐさま「うん」とうなず

いた。

「いいな……」

拓也は思わず言っていた。自分も、そんなふう
に自信を持って言えたらいいと思ったのだ。

と、そんな拓也を見ていた琴美が、ちよつと笑った。

「なに？」

「なんか、おたくって、すごく素直な性格みたい」

「……でも、ないけど……」

拓也が照れて言うと、今度は、琴美の方がしみじみとつぶやいた。

「だけど、男って、いいよね」

「ん、どういうこと？」

「だって、そんなふうだって、雇ってくれるところ、あるんだから」

「そんなことないさ。僕だって、まだ決まってるじゃないじゃん」

「でも、さつきも、すぐ試験受けさせてくれそうだったじゃない」

「岡崎さんが、あんなこと、言わなきやね」

拓也が言うと、琴美は、今度はちよつと申し訳なさそうに苦笑した。もうすっかり、こだわりは持っていないようだ。

「……でも、あれでよかったのかも知れないけど」

つづけて言った拓也の言葉に、琴美が不思議そうに

その顔を見返した。

「だって、あの仕事、岡崎さんが言うような営業なら、あんまり気が進まないし」

ふたたび思ったままを口にした拓也に、琴美はまたあきれたような顔をした。

そして、ため息をひとつつくと、「大沢君みたいな子が、きつと、一般職に向いてるんだよね」と言った。

第2話 取引

「それって、もう終わりってこと？」

ベッドの上で裸の上半身を起こした琴美は、横で寝ている向坂憲太の顔を見下ろしながらきいた。憲太の

言ったことに、思わず声音が尖った。

「待てよ。そうは言っていないさ。ただ、もう、遠距離恋愛にも疲れちゃった感じ、あつてさ」

「だけど、それは、去年からわかってたことじゃない。何年かたてば、また転勤で東京へ戻って来られるから、それまでは二人で努力していこうって」

「いや、そうだけどさ……」

憲太は、そう言いながら、サイドテーブルに手を伸

ばした。

それを見て、琴美が言った。

「ベッドの上では、煙草やめてよ。約束でしょ」

「……ああ」

憲太は伸ばした手を引っ込めると、ため息をついて、ふたたびホテルの天井を見上げた。

いらついた憲太の様子に、琴美は、こんな場面でもそんなことを言ってしまう自分を呪った。

「……じゃあ、向坂先輩は、どうしたいわけ？」

「ほら、また、そういう言い方。さっきまでは『憲太』
って呼んでたのに、いきなり『向坂先輩』だもんな。

時々、俺は、琴美のなんなのかって思うよ」

「だから、なにが言いたいわけ？」

「そんなふうにとんがるなよ。俺は、別れようって言
ってんじやないんだ。むしろ、その逆さ」

憲太はそこで、もう一度ため息をついてつぶけた。

「……たとえばさ、俺だって、営業一年目で、いろいろつらいこともあるわけよ。数字のことで課長にねちねちやられたあと、サービス残業で見込み客リストつくって、夜中の雪の道をとぼとぼアパートへ帰るんだ。そんな時、無性に、琴美のこと抱きたいなって思うわけ。琴美がここにいてくれたらってな」

「なんなの、それ？」

いけない、どんどん口調が陰悪になっていく。

自分の言葉に、琴美自身がいらついた。

でも、琴美は、そんなことを言う憲太などいやだと思つたのだ。この二年半——憲太がまだ学生だった頃から——つき合つて、その聡明さに惹かれてきた琴美は、そんな俗物的で情緒的な弱音を吐く、かっこわるい憲太の姿など見たくなかつた。「雪の帰り道、お前を抱きたい」なんて、まるで演歌じゃないか。

「だから……つまりさ、まだ就職決まらないんなら、

琴美も、東京にこだわることはないんじゃないかって思
ったんだ」

「……え？」

憲太が、いきなり飛躍したことを言い出したので、
琴美は驚いてその顔を見返した。

「どうせ、今の時期からじゃあ、東京にいたってろくな会社には入れないだろ。そんなら、いつそのこと、札幌で探してもいいんじゃないかってさ」

「私に、来いってこと？」

「ああ、いっしょに暮らさないか？　結婚するまでち

やんとしてたいって言うんなら、近くに部屋借りたつていいし」

一瞬、琴美は、その憲太の言葉に引き込まれそうになつた。

卒業のめどは立ったというのに、就職のめどはいつこうにつかない。ここ一週間は卒論の口頭試問の準備

に追われたが、明日からはまた、つらい職探しの日々が始まるのだ。憲太のそばにいれば、そんなつらさから逃れられる気がした。

しかし、次の瞬間、琴美は、そんなふうに感じた自分自身に無性に腹が立った。そして、そんなことを言いだした憲太にも。

そもそも、ついこの間まで、「将来、大きな仕事をしたいなら、東京採用でないとだめだ」と言っ

ていたのは、憲太ではないか。

それでも、琴美は、もう少し憲太の考えを探ろうと、できる限り冷静な声音でつぶけた。

「そりゃ、ここまで来れば、私だって、どうしても東京じゃなきゃだめとは思ってないよ。けど、そんなこと、無理に決まってるじゃない。今の北海道でそんな口があるなんて思えない」

「ああ、地場の景気は最悪だからな。それで、俺も苦

労してんだ。だけど、琴美なら、働き口くらいあるさ。派遣とかも、ふくめて考えれば」

「え、なんで？」

琴美は、さらに驚いて憲太の顔を見下ろした。

「わかってるよ、琴美がキャリア指向なのは。俺だつて、そのへんのちやらちやらした女にはない、琴美のそんなところが好きなんだから。けど、現実の問題として思うようにならないなら、逆にチャンスだと考えた

方がいいだろ。もっとプラス思考しなきや。ちよつと順番は逆になるけど、これを機に二人で暮らせばいいじゃないか。それに、派遣とかなら、いずれあるはずの俺の転勤にも、すんなり対応できるだろ。まあ、不満はあるだろうけど……。でも、琴美だって、昨日会ってからずっと、どっか上の空の暗い顔ばかりしてるじゃないか。俺、そんな琴美、見たくないからさ」

琴美は、その言葉の途中で憲太の顔から目をそらせ、

先刻のセックスのせいでしわくちやになつたベッドカバーを見つめた。

腹が立つた。

あれこれ言つてはいるが、憲太の言いたいことは、要するに、琴美に、もうまともな就職などあきらめて、自分のそばに來いということだ。そして、今の話の順番から考えるなら、その理由は、琴美のことを考えてではない。

いくら自分がつらくてさみしいからって、それではまるで、こちらの弱みにつけ込んでるようなもんじやないか。なにが「プラス思考」だ。

琴美が硬い表情で黙っているの、憲太がふたたび口を開いた。

「なあ、琴美、意地張って無駄な努力つづけててもしやうがないだろ」

憲太は、そう言いながら、布団からはだけた琴美の

生硬な感じの胸に手をかけた。

「やめて」

琴美は、体をひねるようにして、その手を払った。

「……なんだよう」

憲太は、甘えるような口調でそう言い、体をすり寄せてきた。

「やめてったら」

琴美は、さらに体をずらし、それを拒否した。

電車を降り、駅前商店街を歩きながら、琴美は、ふと、アーケードのとぎれ目から見える夕暮れの空を見上げた。

今頃、憲太は羽田を発ったはずだ。

月に一度、憲太が札幌から東京にやってくる時、いつもなら、この時間帯は、羽田で飛行機を見送っているはずだ。そんな時も、無性にせつない思いをするの

だが、今日のせつなさは、それとはくらべものにならなかつた。

もう、憲太とのことは、これで終わるのかも知れない。

琴美は、そう感じていた。

このところ、会っていても、ずっとどこかちぐはぐだった。

もちろん、憲太の言うように、琴美自身が就職のこ

とでいらついていることはたしかだろう。でも、こんなふうになってしまったいちばんの原因は、憲太の側にある。憲太が変わってしまったのだ。

札幌支店に転勤して、不況の中で思うようにいかず、消耗しているのはわかる。私の前で愚痴をこぼしたつて、それはいいとしよう。でも、そんな中で、すべてを「しようがないよ」と片づけていくような、そんな憲太はいやだ。

それに、不況に苦しんでいるのは、なにも憲太だけじゃない。私だって同じじゃないか。いや、むしろ今現在は、私の方がずっと不安なのだ。憲太は、なんと言っても、大手証券会社の社員だ。私なんかよりずっと優位な立場にいるのだ。その立場を利用して、私の将来を曲げさせる権利は、憲太といえどもないはずだ。「これからは、女も、自分の能力を最大限に生かして働いていくべきだ」

いつもそう言っていたはずなのに、憲太もやはり、ふつうの男と同じだった。女の人生なんて、男次第とでも思っているにちがいない。

昼前に一人でラブホテルを出て以来、ただ無目的に街を歩きながら抱きつづけていた憲太への怒りを、琴美はふたたび奮い立たせた。そうでもしないと、心の中にできた空洞に、自分自身が吸い込まれていきそうだった。

ふと気がつくのと、琴美は、すでに商店街のはずれまで来ていた。その角を曲がり、五分ほど歩けばマンションにつく。

疲れ切った足のことを考えれば——それに、明日からまた就職活動に歩き回らなければならぬことを考えれば——、早く帰って休みたいのはやまやまだが、琴美は、なんだか部屋に戻りたくなかった。こうして人のいる場所を歩いているうちはいいが、部屋で一人

になれば、一度にやるせなさが襲ってくる気がした。今日一日、街なかをうろついていたのも、じつは、それが怖かったからだ。

見ると、商店街の角に、酒屋系のコンビニがあった。

「そうか、こんなところでお酒買えるんだ」

この町に来てまだ二週間しか経っていない琴美は、さも大発見でもしたようにつぶやいて、そのコンビニに入った。

バイト先から帰った拓也は、まずシャワーを浴びた。髪や体に油の匂いがついている気がしたからだ。

今日はレストランの厨房スタッフが二人も休み、拓也も揚げ物などを手伝わされた。いつもは、他のバイトメンバーと同じように、ウェイターや皿洗いなどが中心なのだが、わりと器用なことを知られて以来、シエフから——今夜のように——、調理の手伝いを頼ま

れることがよくあった。最近では、シェフは、「俺が口きいてやるから、うちに来いよ」などと誘ってくれたりもする。

「：：そうだな。いつそのこと、コックにでもなつちやおか」

パジャマがわりのジャージの上下を着て、髪を拭きながらバスルームを出た拓也は、そうつぶやき、ベッドの上に疲れた体を投げ出した。

「でもな……」

料理したりするのはきらいではないが、あのレストランも、経営母体はそれなりに大きなレジャー企業で、厨房スタッフを含めて社員へのしめつけはきつそうだ。見ていると、売上を上げろという指示で、店長もシェフもいつも深刻な顔をしている。正社員として就職してしまえば、今みたいな気楽な立場で働くことなどできない気がした。ましてや、正式に調理師資格を

持っているわけでもないのだ。入社した後、どんな仕事をさせられるか、わかったものではない。

「公務員試験でも、受ければよかったな」

拓也は、自分の性格だと、区役所の窓口とかがいちばん似合いそうな気がして、また独り言を言ったあと、もう一度ベッドを立って、部屋の灯りを消した。

明日も、二軒ばかり会社まわりをすることになって
いる。早く寝た方がいいと思っただのだ。

それで、布団の中に潜り込み、目を閉じたときだつた。

突然、ベッドサイドの窓ががたがたと揺れた。

「ん？」

一瞬驚いて体を硬くした後、拓也は窓の方を見た。

カーテン越しのぼんやりとした灯りの中で、影が動くのが見えた。

と、また、窓が鳴った。誰かが叩いていることはた

しかだった。

「……なんだ？」

拓也がつぶやくと、今度は声が聞こえた。

「おーい、大沢ーっ、起きてるかあ」

驚くほど大きな声だった。そして、さらに声はつづいた。

「起きてるなら顔出せ、この、のぞき魔、露出狂ーっ！」

窓がさらにどんとどんと鳴った。

「なんだよ、いったい」

あわてて体を起こし、カーテンを開けた。

と、窓ガラスの向こうに、琴美の顔があった。自分の部屋の窓から身を乗り出し、こちらの窓を叩きながら、わめいている。

そのまともでない様子に、拓也があわてて窓を開けると、琴美は、やっと拓也のことに気づいたらしく、

にんまりと笑った。

「ほら、やっぱり帰ってた。なんか、そんな気がしたんだ」

その口調は、完全にろれつがまわっていない。

「こんな夜中に、大声で騒がないでよ。：：なに？
酔ってるの？」

拓也がきくと、琴美は、すわった目で拓也を見て、
言った。

「なんだよお、女が酔っっちゃ悪いなあ」

「だから、そんな大きな声出すなって」

「ふん、あんたは気楽でいいよね。どうせ、こんな時間まで遊びまわってたんだろ」

「ちよっと、どうしたの。岡崎さんて、こんな酒癖悪いの？」

拓也は、本当に驚いていた。

あれ以来、朝、駅までの道でいっしょになったりし

て、何度か会話を交わしたが、琴美の印象は、いつでもきちんとして一分の隙もないように見えた。こんな姿は、想像もしていなかったのだ。

「酒癖悪くて、悪かったな。私だって、こんなに飲んだの、はじめてよ」

琴美は、そう言うと、今度は、いきなりけらけらと笑いだした。

「ははは：：、なんだ、そのぼろアパート。ゆらゆら

揺れてる……」

「揺れてるのは、岡崎さんの方だよ。どっちにしても、もうちよつと、小さな声で話してよ」

拓也は、アパートとマンションの他の部屋を気にして言った。

「で、なんなの？　なにか用？」

「用？　用がなきや、呼んじやいけないって言うの？」

「そうじゃないけどさ。こんな夜遅く騒いでたら、誰

だってびっくりするでしょうが」

「だから、男は気楽でいいって言ってんのよ。就職先、見つからなくても、やけ酒飲むでもなし、夜遅くまで遊びまわって」

「遊びじゃないよ。バイトだよ」

「バイト？ うそばっかり。退屈だから、話し相手がほしかったのに」

「知らないよ、そんなこと」

「ほら、冷たいんだ。男なんて、気楽なくせに冷たいんだ。人の気持ちなんて、全然わかってない。男なんて……」

「なんだよ、僕に男を代表させるなよ」

「そう！　そうだよね、大沢。あんたなんて、全然男らしくないもんね。なんか、いい年して、妙にかわいらしい顔してさ」

琴美は、そう言って、またけたけたと笑った。

「もう、いい加減にしてよ」

拓也も、琴美の態度に、だんだん腹が立ってきた。

知り合ったばかりで、ただ部屋が背中合わせというだけで、なんでこんなたちの悪い酔っぱらいにつき合わなきゃならないんだ。

「もう、窓閉めるよ。迷惑だろ。お酒飲むなら、一人で静かに飲んでろよ」

「あ、逃げるの？ あんたまで、私を置いてくわけね」

「あんたまで……？　なんだよ、なんかあったの？」

「ふん、ほっとけ！」

「だから、ほっとくって言うてんだろ」

「ほーら、やっぱり、男なんて……」

「だからさあ……」

拓也が言いかけたところで、さらに乗り出してきた琴美は、いきなり「うつ」とえずき、体を折り曲げて、窓の下に上体をたれ下げた。

「……あつ、あぶない！」

マンションとアパートの間に、頭から落ちそうになり、もがいていた琴美は、やつとのこととで体を起こした。そして――

「……気持ち悪い」

今度は小さな声でつぶやくと、体を起こした勢いのまま、部屋の中にのけぞるように崩れ落ちた。

床に倒れるゴンという音がして、琴美の姿は、窓か

ら見えなくなつた。

しばらく呆然としていた拓也だったが、そのあと、ちよつと困つてしまつた。

いくら待つても、部屋の中の琴美が動く気配がないのだ。

「岡崎さん、どうした？」

呼んでみたが、返事はない。

さっきの音から考えて、もしかしたら、頭でも打つ

たかも知れない。けがをして気絶しているのだとしたら、このままほっておくわけにもいかないだろう。

それで、今度は拓也が、体を乗り出して琴美の部屋をのぞき込んだ。

床に投げ出された琴美の腕が見えたが、それ以上は、よくわからない。その腕も、ぴくりとも動かない。打ち所が悪かったとしたら、とんでもないことになって
いる可能性もある。

拓也は、自分の部屋の窓枠に足をかけ、立ち上がりながら、さらに体を乗り出した。それでも、床に広がった琴美の髪くらいしか見えなかった。

そんな体勢になると、琴美の部屋の窓枠は、すぐのり移れそうな感じだった。手を伸ばせば、あちらの窓に簡単にとどく。

それで、拓也は、アパートやマンションの他の部屋をうかがって人が見ていないのを確かめてから、琴美

の部屋の窓に飛び移った。

窓枠に立って見下ろすと、琴美は、壁際に体を曲げて倒れていた。少なくとも、気絶していることだけはまちがいがなかった。

琴美の体をまたぐようにして向こうの床に飛び降りた拓也は、その脇にしゃがんで琴美の顔をのぞき込んだ。

どうやら、息はしているようだ。

それで、とりあえず一安心した拓也は、おずおずと琴美の肩のあたりに手をかけ、揺すつてみた。

「岡崎さん、だいじよぶ？」

「：：うーん」

琴美が顔をゆがめてうなつた。頭などにけがはなさそうだったが、さっきまで紅潮していた顔が青ざめて
いる。

それを見て、ひとつため息をつく、拓也は琴美の

両肩をすくい上げるようにして上体を起こした。

どうやら、単純に悪酔いしているだけらしい。

「おい、しつかりしてよ」

と、琴美がまた「うっ」とえずいた。

それで拓也は、その片腕を自分の肩に掛けて強引に立たせ、部屋の中を見回した。

入口のドア近く、ダイニングスペースの向かい側にトイレらしいドアがあるのを見つけ、一方の手を琴美

の背中側にまわし抱くようにして、そこまで連れて行く。

華奢な拓也には、自分より身長のある琴美の体を支えて引きずっていくのは楽ではなかったが、ちよつと足もとをよたつかせながら、それでもなんとか、トイレのドアを開けて、その中に運び込んだ。

二人揃ってその場に崩れるような格好で、琴美をしやがませると、拓也は便器の上に琴美の顔を出させ、

その口の中に指をつっこんだ。

「ううっ……おえっ」

琴美は、体をけいれんさせるようにして声を上げた。

琴美ののどが、ごぼごぼと音を立てた。

とたん、アルコールと胃液の混じったいやな臭いが
トイレの中に立ちこめた。

ちよつと顔を背けながらも、拓也が便器の中を見る
と、そこにはほとんど液体しか出ていない。琴美は、

なにも食わずに飲んでいたようだ。悪酔いして当然だろう。

琴美が自ら便器の縁をつかんで吐いているのを見て、拓也は、キッチンに立ち、水道をひねって手を洗ってから、そこにあつたコップに水を汲んだ。

トイレに戻って、そのコップを差し出すと、あらかたのものは吐いてしまったらしい琴美は、すぎるようにそのコップを受け取った。

「だいじよぶ？」

隣のバスルームの洗面ユニットにあつたタオルを、水道でぬらしながら、拓也はきいた。

「う、：：うん」

水を口に含み、咳き込みながら、ふたたび便器の中にそれを吐きだした後、琴美は大きく息を吐き、トイレの床にへたり込んだ。

それで、拓也は濡れたタオルを差し出した。

「寝た方がいいよ」

琴美がタオルで口のまわりを拭くのを待って、拓也が手をさしのべると、琴美はまた、「うん」とうなずいた後、その手をとった。

拓也の手と壁にすがりながら、やっと立ち上がった琴美は、よろよるとトイレを出た。拓也は、その体を支えるようにしてベッドの脇まで連れていった。

「ありがとう」

まだ焦点の定まっていない目で拓也を見てやつとそう言うと、琴美は、そのまま、ベッドに倒れ込んだ。

それを見て、拓也はどうしようか迷ったが、とりあえず、トイレに戻り、水を流したり、そこに置きっぱなしになっていたコップとタオルを片づけたりした。

戻ってくると、琴美は、すでに寝入っているようだった。

それで、拓也は窓に近づき、そこから自分の部屋に

戻ろうとした。

と、その時、ベッドの上の琴美が、また、「うーっ」とうなり声を上げた。

「ん？　：：まだ、出そう？」

拓也がきくと、琴美はつらそうに拓也を見て、「うん、もう、吐くもの、なにもない。でも、胃がむかむかする」と言った。

「そうか、なんか、お腹に入れた方がいいよね」

拓也は、便器の中の吐瀉物を思い出してそう言った。胃のあたりを押さえて体を折り曲げている琴美を見ながら、拓也がちよつと考えていると、琴美がふたたびつぶやいた。

「寒い。窓、しめて」

拓也は、また少しの間迷ったが、そのまま窓を閉め、ベッドの脇を通ってふたたび部屋の奥に向かった。

「キッチン借りるよ。僕の部屋、今、ろくな材料ない

からさ」

お粥の器の横に、別につくったほうれん草とちりめんじゃこのあえものを並べ、そのトレイをベッド脇に持ってきたところで、ちよūd琴美が目を覚ました。

「どう？」

拓也が聞くと、琴美は体を起こしながら、ちよūtと照れたように笑った。

「うん、少しうとうとしたら、だいぶ楽になった」

「そう。：：これ」

拓也が、そう言ってトレイを差し出すと、ベッドに腰掛けた琴美は、それを受け取って膝の上に置いた後、「私、なんか、すごくみつともないことした？」ときいた。

「うん、ちよつとね」

拓也は、苦笑するしかなかった。

「頭、痛い」

「そりゃ、一人であれだけ飲んだんじゃね」

そう言って、拓也は、床に転がったワインの瓶を見
やった。

「……ごめんね」

琴美は、頭痛に顔をしかめながらも、さらに恥ずか
しそうに言った。

「いいけど……。気持ち悪くても、食べた方がいいよ。」

せつかく作ったんだし」

「……うん」

琴美は、そう言って、トレイの上のれんげをとった。

「まだ熱いから、気をつけて」

琴美は、ふたたびうなずくと、そのお粥に口をつけた。

「……おいしい」

「でしょ。引き出しにあった昆布で、ちよつとだしも

とったから」

そのままそこに立っているのも間が持てない気がして、拓也はベッド脇の床に腰を落としながら、どこかうれしそうに言った。

お粥を少し食べたあと、琴美は箸をとり、あえ物をつまんだ。

「あ、これも、すごくおいしい。……ん？　梅肉で、

味付けてあるの？」

「うん。岡崎さんとこの冷蔵庫も、あんまりたいして入ってなかったけど、梅干しあったから、すりつぶしてあえてみたんだ。胃がむかついてる時は、ちようどいいでしょ」

拓也の言葉に感心したようにうなずいた後、琴美はお粥とそのあえ物を、黙々と口に運んだ。やはり、空腹だったにちがいない。

床の上に正座した格好で、拓也はその姿を見上げて

いた。

なにか会話した方がいいかとも思ったが、口を開けば、あんなふうにやけ酒を飲んだ理由をきいてしまうことになりそうで——じつは、ききたい気もあったのだが——、やはり、なんとなく黙っていた。

トレイの上のものをあらかじめ食べ終わったところで、琴美は、「ほんとおいしかった。おかげで、頭痛も治ったみたい」と言ってお箸を置いた。そしてそこ

で、拓也の顔を見て、くすつと笑った。

「……なに？」

「ううん、そのエプロン」

「ああ、お米研ぐとき、ジャージが濡れるといけない
と思つて、掛かつてたの借りちやっただ。ごめん。

ここんところ、ちよつと梅肉で汚しちやっただ」

「うん、いいけど。なんか、私より似合ってるなと思
つて。転居祝いにつて、大学の友達がくれたんだけど

ね、私、そんなかわいい柄のエプロンなんて、ふだん、
しないし」

琴美のその言葉に、ピンクのサロンエプロンをつけ
たまま正座していた拓也は照れた。

それでも、琴美はにっこりと笑って、拓也の顔を見
つづけていた。なんだか、いたずらっぽいやでもいう
ような顔つきだ。さっきまで青ざめていた顔色も、ま
た血の気が差し、目のあたりがぼっと赤くなっている。

そんな琴美の奇妙な視線が、なんだか耐えられない気がして、拓也は立ち上がり、琴美の膝の上からトレイを取り上げた。

「洗っとくね」

「あ、そこ置いといてくれれば、私が……」

「いいよ、どうせ、ここまでやったんだから」

拓也はそう言って、キッチンの流しに向かうと、二つの器と鍋を洗いはじめた。

奇妙な成り行きではあったが、これで、琴美とも「いい友達」になれそうな気がした。それに、正直に言えば、深夜、女の子の部屋にいることに、どこかわくわくするような感じもあった。

お腹にもものが入ったことで、琴美はやはり元気を取り戻したようだ。鍋を拭きながら横目で見ると、ベッドを立ち、小振りなチェストの上に置かれたメーキャップミラーに向かってなにかしていた。

その鍋を棚の上に戻し、ふきんを掛けたところで、拓也は振り向いた。

と、琴美が、またいたずらっぽい笑顔で近づいてきた。

「ねえ、ちよつと、いい？」

「……なに？」

「ちよつとだけ、これ塗ってみない？」

「……えっ？」

見ると、琴美の手には、ふたを開けた一本の口紅が握られていた。

「……へ、なに……？」

「そのエプロン、あんまり似合ってるから、ちよつと、面白そうだなと思って」

「なに考えてるの。まだ、酔ってるの？」

「そうかもしれない。おなかいっぱいになったら、また、なんだか気持ちよくなってきた」

「よせったら。ほんとに酒癖悪いな」

口紅をさしだして迫ってきた琴美から身をそらすようにして、拓也は言った。

「いいじゃん。きつと似合うと思うよ」

顔を近づけた琴美の息には、たしかにまだ酒の臭いが濃厚に残っている。

「よ、よせったら、まじかよ」

拓也は、キッチンのコーナーに追いつめられるよう

な格好になった。

「べつにレイプしようっていうんじゃないんだから。動かないで、じっとしてなさい」

琴美にそう言われて、まだ驚いた表情のままの拓也は、さらに体を反らせ、腕をエプロンの胸の前で交差させて、ガードするようにはしていた。

たしかに、これじゃまるで、襲われかけておびえる女の子じゃないか。

自分でもそう思ったが、どうすることもできない。もちろん、琴美を突き飛ばすくらいはわけないのだが、酔っている女の子に対して、そんなことをするのはよくない気がした。

琴美の方は、そんな拓也のためらいなどおかまいなしに、なんだか面白そうに顔を寄せ、拓也の唇に口紅を当てた。

「おい……」

「ちよつと、口動かさないでよ。私だって、口紅塗るのなんて、そんなに慣れてる方じゃないんだから」

そう言われ、さらにおびえるように表情を固めた拓也の唇に、琴美は、リップステイクを走らせた。

「ふふ、これでよし。唇もすごくいい形してる」

琴美は、そう言った後、口紅にふたをしながら体を離し、あらためて拓也の顔を見た。

「ほら、やっぱりね」

「なんだよ」

やっと体勢を立て直した拓也が言うと、琴美は、自分でもちよつと驚いたような表情を込めて言った。

「ほんと。思ったとおり、すっごい、かわいい」

それにどう返事したらいいかわからず、拓也がぶすつとにらみつけていると、琴美が、その手を取った。

「こつち、来てみて」

琴美に強引に引っ張られるようにして、居間の方に

入ると、拓也は、チェストの上のメイクアップミラーの前に立たされた。

「ほら、ね」

えっ……！

声には出さなかったが、拓也自身も、その顔を見てびっくりしていた。

その明るい赤の口紅は、ピンクのエプロンに、そして、拓也の顔に、たしかに驚くほど似合っていたのだ。

多少長めで、真ん中から分けた柔らかな髪も、女性のシヨートカットに見えた。

「かわいいでしょ」

琴美の言葉に、思わずうなずきそうになって、拓也はあわてて言った。

「岡崎さんって……ほんと、酒癖悪いんだ……」

なんだかどぎまぎして、そうくりかえすのがやつとだった。

「……たしかに外資系の攻勢はますます強まるでしょうが、御社のように個人顧客としっかりしたつながりを持った会社は、規制緩和が、むしろ飛躍のチャンスになると思っています。リテールサービスのやり方次第では、小回りの利かない大手証券より有利な立場になりうるのではないでしょうか」

「うーむ、君、よく勉強してるねえ。わが社のことも、

しつかり調べてるようだし」

琴美の前に座った重役のひとりが、感心したように言った。そして、腕組みしながら、こうつけ加えた。

「……女にしとくのは、もったいないなあ」

その言葉に、同席していた人事の男があせったように咳払いし、目配せした。

面接の席でのその言動は、いかにもまずい。女性差別だと、企業姿勢を問題にされかねない。——と、そ

う思ったにちがいない。

琴美もそれに気がついたが、なに食わぬ顔で、笑顔を崩さないようにした。

と、人事の男が、唐突に「では、こんなところで、よろしいでしょうか？」と、重役たちにきいた。

「うむ」

すかさず人事担当重役がうなずき、「じゃ」と、男が琴美を促した。

その瞬間、琴美は、「そういうことか」と悟った。琴美の前に面接した男子学生には三十分以上使っていたのだ。十五分足らずで終わらせようとするのは、やはり最初から採る気がないからにちがいない。

内定辞退での欠員でも出たのだろう。一月も押し詰まったこんな時期に、中堅証券会社の二次募集があった。しかも琴美は、女子ではたった一人、最終面接までたどり着けた。

それで喜んでいたのに、どうやらこれは、そもそも出来レース」だったのだ。琴美は、「女の子も一人くらい入れておかないと、まずいですよ」という、一種の「アリバイづくり」に使われたというわけだ。

「……よろしく願います」

人事担当に駆け寄りテーブルを蹴飛ばしてやりたい衝動を必死に抑え、琴美は頭を下げ、部屋を出た。

今夜も、やけ酒あおりそう……。

地下鉄への道をとぼとぼ歩きながら、琴美はそう思った。

あの会社は、明らかに琴美のことを「もてあそんだ」のだ。それに腹が立った。

それなのに、自分は、それに抗議しようともせず、人事担当者の反応だけで合否がわかってしまうほどに「就職活動のベテラン」になっているのだ。

なんか……馬鹿みたいだ。

そう感じた琴美は、早くあんな会社のことなど忘れてしまおうと思った。次をめざすためにも、気分を切り替えなければいけない。

なにか、楽しいことでも考えて……。

以前なら、こんな時には、憲太の顔を思い出したのだろう。

でも、今やそれもできない琴美は、自然に——直前

に「やけ酒」などと発想していたせいもあり——、この前の夜の拓也との出来事を思い出ししていた。

∴それにしても、かわいかったよね、あの子。

琴美は、心の中でそうつぶやいて、くすつと笑った。

あの翌朝、酒から醒めて、前夜の出来事を思い出したとき、——あのこと以前に、さかんにからんでいたことや、前後不覚で気絶したことも含め——ひどく恥ずかしいことをしたものだ、ひとり赤面した。でも、

あのお粥のおいしさと、口紅を塗った拓也のかわいらしさだけは、妙に心弾むものとして、記憶に残っていた。

じつは、あのあとも、朝晩の行き帰りや、窓に布団を干している時など、二三度、拓也と顔を合わせている。でも、そんな時、拓也は、何事もなかったようにあいさつしてきた。それで、琴美は、恥ずかしい思いをしないですんだ。

もしかしたら、自分自身もあんなことをされたことが恥ずかしかつたからなのかも知れないが、どうやら拓也は、あの夜のことは「なかつたこと」にしてくれているようなのだ。

：：：そういえば、あの子、私のやけ酒の理由もきこうとはしなかつたよね。

琴美は、それを思い出し、そんな拓也の「何気ない優しさ」に、さらに気分が浮き立っていく気がした。

でも、ちよつと不思議だ……。

琴美は、歩きながら、さらにそう思った。

最近知り合ったばかりの同い年の男が、深夜、自分の部屋に入ってきたのだ。いくら酔っていたとはいえ、ふつうなら、「怖い」とか感じるものだろう。

ところが、あの夜、琴美は、拓也に対してまったくそんな警戒心を抱かなかつた。

作ってくれたお粥を食べていた時、自分はベッドに

腰掛け、拓也はその前に座っていたのだ。ふつうなら、襲われるのではないかという危険を、少しは感じてもいいシチュエーションだ。

それなのに、自分はある時、安心しきっていた。まるで、同性の友達といるような感覚になって。

：：：そうか、つまり、そういうことだな。

要するに、ピンクのエプロン姿でちよこんと正座した拓也が、男に見えなかったのだ。

拓也にとっては失礼この上ない話かも知れないが、
琴美は、そう考え、納得した。

そして、だからこそ——お酒のせいでハイになって
いた——自分は、あんなおかしなことを思い立ったの
だ。

口紅でも塗れば、もっとかわいくなると思い、それ
を見てみたくて、「いたずら」する気になった。いわ
ば、女の子同士のパジャマ・パーティーでもしている感

覚だった。

そう錯覚させるほど、拓也の顔かたちは、女の子っぽいのだ。

琴美は、さらに、そのことがおかしいようならいような気がしてきて、先刻の挫折感からほぼ立ち直り、地下鉄の入口を降りようとした。

と、そこで、歩道脇のビルに、一軒の美容院があるのに気がついた。

その大きなウインドウには、極端なショートカットと男物のスーツでマニッシュに装ったモデルのポスターが貼られていた。

立ち止まり、ぼーっとそのウインドウを見ていた琴美は、やがて、自分が考えていることに驚いたような表情をしたあと、まるで、そのポスターに引き寄せられるように美容院の中に入った。

「あ、大沢君、ちようどよかった」

駅の改札口を出たところで、後ろから呼び止められ、拓也は振り向いた。

そして、自分を呼んだのが誰なのかわからず、きよろきよろと目を泳がせた。

しばらくそんなふうに見ていたあと、拓也は思わず声を上げた。

「……えーっ!？」

「……どうも」

改札を出てきた琴美は、ちよつと照れたようにしながら、拓也にそう言った。

「ど、どうしたの、それ？」

琴美のヘアスタイルに驚いたせいで、思わず言葉がうわずった。

「ちよつとね」

琴美はそう言って、拓也についてこいともいうよ

うなまなざしを送り、そのまま前を通り過ぎた。

それでも拓也は、しばし呆然と、そんな琴美の後ろ姿を見送っていた。

ショートカットと叫びたつて、いくらなんでも……。
琴美の後頭部は、左右の耳の上あたりまで刈り上げられていた。

サイドや前髪もずいぶん短く、おまけに七三わけのようになっている。

「なにしてるの？」

「……う、うん」

やっと我に返り、あわてて琴美を追うと、琴美は、駅前商店街にある喫茶店を指し示した。

「ちよつと相談があるの。そこで、お茶でも飲まない」「えーっ!? 名前を取り替える？」

その喫茶店のテーブルで、拓也は、思わず大きな声

できき返していた。

「うん。名前だけでなく、学歴も、なににもかも」

「それで、入社試験、受けようっていうの？」

「そう。私が大沢拓也になって、大沢君が岡崎琴美になつて」

琴美は、まじめな顔でそう言った。

「そんな……」

拓也は、その琴美の提案に、絶句するほかなかつた。

「ちようどね、今どき、一般職と総合職をいっしよに募集してる会社があつたんだ。わりと大手の商品先物の会社でね」

「ちよ、ちよっと待ってよ。マジで言ってるの？」

「そう。面白そうでしょ」

「で、でも、なんで……」

「半分は、わらにもすすがる気持ち。あと半分は、まあ、復讐」

琴美は、笑いながら、しかし、その中になんだか複雑な表情を紛れ込ませて言った。

「復讐……？」

拓也がきき返すと、琴美は、また「うん」とうなずいてつづけた。

「今日、面接で、『女にしとくのはもったいない』って言われたの。これまでも、『君が男だったら』って何度も言われたことがある。そんなら、男として受け

てやろうじゃないのって、思ったわけ」

「それが、なんで復讐になるの？」

「けつきよく、企業は女をもてあそんでるのよ。試験受けさせといて、からかってるみたいなもの。一度くらい、こっちが企業をもてあそんで、からかってやったっていいじゃない」

「それで、髪切っちゃったわけ？」

「そう」

「それで、男に化けて受けようってこと？」

「そう、大沢君の名前借りてね。大沢君は、私に化けて、一般職受ければいいでしょ」

「ちよ、ちよつと……。なんで、そういうことになるわけ」

「だって、もし受かっちゃったらどうするのよ。まず、そんなことはないと思うけど、経歴と名前、借りっぱなしで勤めるってわけにいかないでしょ。同時に別の

会社に同じ人間がいたら、社会保険やなんかからばれちゃうと思うし。もし、いつしよに入社できれば、交換したままで、ばれないですむんじゃない」

「それって、僕に、女の子になって、入社試験受けるってことだろ」

「そうだよ。さつきから、そう言ってるじゃない」

「そんな、めちやくちやだよ。そんなこと、できるわけない」

「それでもないと思うけど。この前の夜の大沢君の感じなら、絶対だいじよぶだと思う。むしろ、私がどうやって男に見せるかって方が大変なんじゃないかな。

ねえ、やってみない？ 面白そうじゃない。ここまでくりや、二人とも、どうせダメモトなんだしさ」

「だ、だって……」

琴美が、いよいよ本気で言っているらしいのに驚き、拓也はなぜか口ごもった。そして――

「も、もし、受かっちゃったらどうすんのよ」

先刻の琴美と同じことを言った。

「だから、同じ会社に勤めるの」

「女の子として？」

「そう」

琴美は、何事でもないように言ったあと、つづけた。

「もし、私も大沢君も二人とも受かったら、って話ね。

どっちか片一方だけだったら、受かった方は潔く辞退

する。そういうことにしとこ。どう？　それなら、これまでの経験から言っても、まずそんなことはあり得ないって感じでしょ」

「で、でも……」

琴美の言うことがあまりにも突飛な気がして、そして、先刻の琴美の言葉であの夜のことをまざまざと思い出し、自分の中でなんだかよくわからない感情がわき上がっているせいで、拓也はまた口ごもった。

「なに？」

「う、うん。：：あのさあ、岡崎さんの思ってることは、なんとなくわかる気がするけど、：：いや、やっぱりよくわかんないけど：：、それでもむりやり納得したとして、でも、僕は：：、僕の方は、女の子になつて仕事さがさなきやいけない理由なんて、なにもないわけでしょ」

「そうかな？　だって、この前、大沢君言ってたじゃ

ない。『やりたいことがわからない』って。それに、職場の雰囲気がよくって、気楽にやれる仕事がいいわけでしょ。そういう子には、『花のOL』っていうのが、いちばんいいと思うんだけどなあ」

琴美は、そう言って、またいたずらっぽい笑顔を向けた。

第3話 契約

「……年4月、S大学経済学部経済学科入学、……
で、本年3月、同、卒業見込……と」

拓也は、いちいち言葉に出しながら、その履歴書を

埋めていた。

自分の履歴書なら——この間何通も書いているから——そらでも書けるのだが、今回はそうはいかない。横に置いた見本を一字一字確認しながら写しているのである。

これは、「岡崎琴美」名の履歴書だからだ。

提出する人間が入れ替わるだけなのだから、お互いが書いた履歴書を交換すればすみそうなものだが、そ

れではまずいと琴美は言った。

この間の経験から言っても、就職面接の場でなにかを書かされる可能性は高い。そのまま、SPIと呼ばれるテストと適性検査をする会社もある。それらの用紙に書いた文字と履歴書の筆跡がちがえば、不審をもたれるだろう。だから、それぞれが自筆で書き直そうというわけだ。

「それに、書きながら、お互いの経歴を頭に入れられ

るでしょ」

先刻、窓越しに見本の履歴書を交換しながらそう言った琴美に対して、拓也は、まだ煮え切らない表情のままうなずいた。

そのあと、どうやら琴美の方はさっさと写し終えてしまったらしく、今しがた、また窓から顔を出し、「ちよつと出かけるね」と、どこかに消えてしまった。

拓也の方は、釈然としない気持ちを抱きながら作業

しているぶん、遅くなっているのだ。

なんだか、昨日から、琴美の勢いに飲まれてしまっているけれど、ほんとにこんなこととしていていいんだろうか？

履歴書の左半分を書き終わったところで、拓也はまたそう思い、手を止めた。

しかし、けつきよく拓也は、またすぐ履歴書の右側にペンをおろしていた。

なんだか、この作業が楽しいような気もしているのだ。

いつもなら——就職自体に気が進まないこともあつて——、履歴書を書くのはどこかおつくりな作業だ。

でも、今やっていることには、それとはちがう、わくわくするような感じがある。

渡された履歴書によれば、琴美は、静岡県浜松市生まれ。そのまま、地元の高校を出ている。同じ中部地

方ということもあり、拓也も名前を聞いたことのある有数の受験校だ。きっと優等生だったにちがいない。

太平洋に面した明るい土地柄ですくすくと育った、明朗で成績優秀な女の子。：：そうイメージすると、海に見える道をセーラー服で駆ける少女の像が頭に浮かんだ。

履歴書の文字をひとつずつ書き込むごとに、なんだか、そんな琴美の少女時代をのぞき見しているような

気がした。

どんな家に住み、父や母や妹と——琴美は二人姉妹のようだ——どんな暮らしをしていたのか？　どんな音楽を聴き、ふだんはどんな服を着ていたのか？　学校では、友達とどんな会話をしていたのか？

ついつい、そんなことを想像してしまおう。

しかも今、その履歴書を書いているのは自分なのだ。つまり、その少女は自分だということになる。

そう思うと、どこかくすぐったいような感じがし、この間の暗い気分を忘れられるような気がしてくるのだった。

拓也が履歴書を写すのに時間がかかっているのは、一方でそんなことを考えているからでもあった。

そんなふうにして右側の欄もほぼ埋まり、「資格・特技」の欄を書き込もうとしたところで、拓也はまたペンを止めた。そして、驚いたようにつぶやいた。

「……ん？　柔道……二段!？」

その記述は、拓也のイメージしていた少女像とは、ちよつとズレていた。

昨日の午後、駅前の喫茶店でそのアイデアをはじめて聞かされたとき、拓也はまだ、単なる冗談か、具体性のない憂さ晴らしの空想なのだろうと感じていた。

ところがそのあとすぐ、琴美は、バッグの中から市

販の転職情報誌をとりだし、付箋をつけたページを広げたのだ。

そこには、「平安トレード株式会社」という会社の求人広告があり、募集職種は「(1)商品取引外務員(営業) (2)一般事務」となっていた。さらに、その資格の項には「本年度大学新卒者歓迎」の記述があった。

拓也がその誌面を眺めていると、琴美は、今度は携帯電話を取り出し、その場から応募の電話を入れろと

言った。

「私の方はもう、一般事務を受けるってエントリーし
といたから、大沢君は、営業の方に応募してよ。人事
担当も電話の声までは覚えてないでしょ、きつと」

拓也は、ちよつと迷ったが、「どのみち、就職先を
さがしているわけだし」と思い、言われたとおり電話
した。

と、先方からは、三日後の月曜に応募者をまとめて

面接をやるから、履歴書を持って来てくれという返事があった。

「ふうん、どっちの職種も、同じ時間帯にやるんだ」
先に電話して同じように言われたらしい琴美が言った。

そのあと、バイトに行く時間が近づいていたこともあり、いったん部屋に帰ったのだが、すぐに琴美が、窓越しに「今日のうちにやっておきたいことがあるか

ら、出かける前にこっちに来てよ」と言ってきた。

この前の夜の「緊急事態」とはちがうのだから、窓から出入りするのには抵抗があつたが、琴美の方がそのつもりらしく窓を全開して待っていたので、拓也は、そこから琴美の部屋に入った。

と、琴美は、拓也に上着を脱ぐように言い、メジャ―を取り出していきなり体のサイズを測った。

「うん、思った通り。これなら、お互いの服、そのま

ま使えるわね」

驚いている拓也をしり目に、琴美はそう言ってるな
ずいた。

「ほんとに……マジなの？」

拓也がきくと、琴美は、「さつきから、そう言ってる
じゃない」と、当然のように答えた。

もうバイトに行かなければならなかったもので、それ
以上の議論もつづけられず、拓也は出かけ、そして、

いつものように深夜に帰って眠りについた。

そして、今朝。目を覚ますと、琴美が、履歴書を写すように言ってきたわけである。

けつきよく、拓也は、一度も同意した覚えのないまま、こんなことをしているのだ。

写し終えた「岡崎琴美」名の履歴書をなんとなく眺めながら、ベッドに腰掛け、どうしたものかと考えていると、背後で窓が開く音がした。

どうやら帰ってきたようだ。

買ってきたものが入った紙袋をベッドの上に置き、窓を開けると、琴美はそこで時計を見た。

ひと駅先の大きなショッピングセンターまで行って、いたせいで、思ったより時間を食ってしまった。これからその「作業」をすると、昼ご飯を食べに出るのは、ちよつと遅くなりそうだ。拓也がすんなり納得して、

言うことをきいてくれればいいが……。

そう思っていると、向かいのアパートの窓が開いた。

「履歴書、写した？」

琴美がきくと、拓也は「ああ」とうなずいた。

「じゃあ、こっち来て」

琴美の言葉に、拓也は、今日は躊躇することなく窓
枠に足をかけた。

どうやら、今後も、このやり方が、お互いの出入り

の定番になりそうだ。たしかに、玄関を出て、外を通って相手の玄関まで歩くと——ひとブロックをまわりこむことになるから——三・四分はかかってしまう。この方が合理的なことはまちがいない。

と、今書いた履歴書を手に入れて来た拓也が言った。「岡崎さんって、柔道なんてやってたんだね。そんなふうに見えなかったけど」

「うん、子供の時からね。けっこう強いんだよ。もう

少しで、インターハイにも出れるところだったんだから」

琴美は、ちよつと得意になって答えた。

「迷ったけど、その欄、書くのやめといた」

拓也は、そう言いながら履歴書を見せた。

「どうして？」

「僕、柔道なんて、何にも知らないからさ」

企業好みの売り物にもなる自慢の経歴を否定された
ようでも不満だったが、琴美はうなずいた。

「……そうか、面接の時、つつこまれたらやばいもんね」

納得できないという顔をしていながらも、どうやら一方で、拓也はその気になりはじめているらしい。

「あ、いや、そういうことじゃ……。あの……。考えただけどき、やっぱり、岡崎さんの思ってるようなことって、無理だよ。だいいち、こんなにそばに住んでる人間が、そろっていっしょの会社受けたら、それ

だけでへんじやない。すぐに疑われちゃうよ」

拓也の言葉に、琴美はちよつと笑うようにして答えた。

「履歴書写してて気がつかなかった？ このマンションとそっちのアパート、町名がちがうんだよ」

「えっ？ ……あ」

拓也は、履歴書の現住所の欄を見て、はじめて気がついたようだ。

「つまり、その窓と窓の間を境界線が通ってるってわけ」

じつは琴美は、そのことを前から知っていた。部屋を借りるとき、地図で確かめていたからだ。このあたりは、入り組んだ古くからの町名区画がまだ残っている。その上、琴美のマンションは大通りに面していて、通りの名が住所になっている。つまり、同じブロックで背中合わせていながら、琴美の部屋と拓也の部屋は

別の町内になるのだ。

「同じ町名だったら怪しまれるかも知れないけど、東京の同じ区に住んでる人間がいつしよの会社を受けるなんて、いくらでもあることでしょ。履歴書だけじゃ、絶対ばれないと思うよ」

琴美がそう言うと、拓也は「だけど……」と口ごもった。次の反論の材料をさがしているにちがいない。

しかし、琴美がその時、ベッドの上の紙袋からある

ものを取り出したのを見て、拓也は、焦ったように「えっ！」と言った。

「……な、なにそれ？」

「ブラジャーよ。知らないの？」

なにかを予感したらしく、声を上ずらせた拓也に対し、琴美はからかうような口調で答えた。

「服を交換するって言っても、私も下着までは抵抗あるからね。新しいの買ってきたの。それに、大沢君の

方が胸囲：：っていうか、アンダーバストがひとサイズ大きいみたいだし。細く見えても、やっぱり男の子だよね」

「：：そ、それを、僕が？」

「そう。だって、女物のスーツ着るなら、胸は、いるでしょ」

「そんな：：」

「近頃話題の、オイルブラ」

オイルの入ったパッドがカップに入れ込んであり、自然な柔らかさと大きさをくり出すというそのブラジャーをぶら下げて見せながら、琴美は言った。

「これをふつうのパッドの上からすれば、きれいな胸のラインができると思うんだ。私だって、こんな高い下着使ったことないんだからね」

「……」

拓也は、いったんそのブラジャーを見つめたあと、

落ち着かなそうに目を泳がせた。

予想通りのその反応を、琴美は内心楽しんでいた。

そして、そんな自分に気づき、もしかして私は、これも含めて「復讐」と考えているのかも知れないなど感じた。女をもてあそぶ企業への復讐というだけでなく、男社会全体への復讐……。自分がしようとしているのは、そういうことなのかも知れなかった。

まあ、復讐すべき男社会を、これだけですでおた

おたしている拓也ひとりに仮託してしまうのは、ちよつと気の毒な気もしたが……。

「ほんとに……マジなの？」

拓也が、昨日と同じことをまた言ったので、琴美は「うん」とうなずき、「それから、これもね」と、紙袋の中からさらにもう一枚の下着をとりだした。薄いピンクのショーツだった。

「大沢君、トランクスじゃなくてブリーフだから、そ

のままでもだいじよぶだとは思っただけど……」

「な、なんで、そんなことを……」

動揺の中にも、どうして自分の下着のことまで知っているのかと、拓也は不思議に思っただけだ。

「だって、初めて会ったとき、すっかり目撃してるじゃない」

「……あ」

拓也が気がついたようなので、琴美はさらに言葉を

つづけた。

「面接官のオヤジたちって、真正面に座ると、たいてい、スカートの膝のあたりをちらちら見るんだよね。

見破られないためにも、それに、大沢君がへまやらないように意識するためにも、これ履いといた方がいいと思うんだ」

「あ、あの……」

琴美の言葉に、拓也はなにか言いかけたが、けっき

よく言うべき言葉が見つからなかったようで、その口を半開きにしたまま、シヨーツを見つめた。

数分後、琴美は、拓也の部屋にいた。

拓也が着替える間に自分も着替えてしまおうと、拓也に断って、窓を渡ってこちらにきたのだ。といって、拓也は、手渡された下着やスーツの掛かったハンガーを持ったまま、まだ呆然としていたから、こちら

の言うことをきいていたかどうかよくわからないが。

あの子、ブラの着け方とか、わかるかなあ……。

そう思いながら窓のカーテンを閉め、琴美は着ていたトレーナーを脱いだ。

ブラジャーもとり、そして、持ってきた紙袋から新しい「さらし」を取り出した。さっきの下着類といっしょに買ってきたものだ。

大柄のわりに、胸はそんなにポリウムのある方で

はない。とはいえ、男物のワイシャツを着れば、やはり目立つだろう。拓也にパッド入りのブラが必要なように、琴美にもこれが必須だった。

琴美は、手際よく、ちよつときつめにさらしを巻いていった。柔道をしていたときの経験が、こんなところで役立つとは思わなかった。

そのさらしをとめると、琴美は、壁に掛かっていたハンガーからスーツとワイシャツをとった。

ワイシャツを着るとき、あわせが逆なのにちよつと手を止めたが、ラフなスタイルの時、男物のシャツを着たこともあったので、戸惑うことなくボタンをはめていった。

ジーンズをスーツのズボンに履き替える。腰回りが多少きつい気がしたし、ウエストは逆にゆるめだ。それでも、拓也がふだん使っているらしい穴よりひとつきつめにベルトを締めると、なんとか様になった。こ

れなら、おそらく、拓也も琴美のスカートが入ったにちがいない。

上着を羽織り、最後にネクタイをする。

これだけは慣れていないことなので、前と後ろの長さをちようどよくするのに苦労したが、何度かやりなおしてバランスがとれた。結び目をきゅっと締め上げたときには、柔道ではじめて黒帯を締めたときのような爽快感さえ感じた。

洗面所の鏡の前に立ち、ショートヘアをきつちりと分けた。無断で使ってはいけないかと思ったが、そこに拓也のドイツプがあつたので、それで髪を固めてみた。

と、生え際の産毛が気になり、琴美は、やはりそこにあつたシェーバーに新しい刃をつけて、額を剃つた。生え際がくつきりすると、鏡の中の顔は、けっこう見られるものになつた気がした。

そこまでの作業を終え、脱いだものを紙袋にしまつた後、琴美はカーテンと窓を開けて、自分の部屋の磨りガラスをノックした。

「できた？」

中で動く気配はしたが、返事がない。

もしかしたら、拓也は、まだなにもしていないのだろうか？

そう感じた琴美は、もう一度声を掛けてみた。

「開けるよ」

「……う、うん」

拓也のかすかな声が聞こえた。

サツシに手を掛け、開けると、拓也は、部屋の中央にもじもじと立っていた。……女物の紺のスーツを着て。

「……へえ」

思わず声が出た。

この前のエプロン同様、そのスーツもまた、琴美自身が着るより似合っている気がしたのだ。

柔道のせいで幾分筋肉質の琴美の肩や二の腕より、拓也の方がずっと薄く細く見える。膝丈のスカートから伸びたストッキングの脚も——多少すね毛はあるようだったが——、すらりとしている。

その予想以上の姿に、琴美はなぜかわくわくし、自分が拓也にこんなことをさせたのは、さつき思ったよ

うな「男社会への復讐」などではないのかもしれないと感じた。

もしかすると、私は、この子の女装姿が見てみたかっただけなのかも……。

さすが、柔道の有段者だな……。

窓から窓へひらりと飛び移った琴美の身軽さを見て——恥ずかしさに赤くなりながらも——、拓也はおか

しな感心をした。

男物のスーツの上着を翻すその身のこなしが、なんだかかっこよかったのだ。

と、拓也の前の床にとんと飛び降りた琴美は、あらためて、拓也の姿を上から下まで見つめてきた。

その視線に、拓也はさらに顔を赤らめ、うつむいた。

まだ真冬で、しかも窓を開けたまままだというのに、胸に着けたブラジャーの下の肌を、汗が伝うのがわか

った。

「これなら、ぜったいだいじよぶだよ」

琴美の声にそっと顔を上げると、琴美はまだ拓也の方をおもしろそうに見つめている。

拓也も、その顔にちよつと見入ってしまった。

もともと女なのだから肌はきれいで、どこか線の細さを残しているが、眼差しの強さが顔つきをしまらせ、その線の細さを、逆に甘い魅力という感じに変えてい

る。琴美の姿は、まちがいなく美男子という部類に入るものだった。

「お化粧すれば、見かけだけなら、絶対にばれない」
琴美はそう言って、窓を閉めると、拓也をベッドの上
に腰掛けさせた。

なにか言わなければならぬことがあるような気が
したが、恥ずかしさと、琴美の変身ぶりに対する驚き
から、拓也は沈黙し、されるままになっていた。

そしてじつは、それ以上に、自分を見失ってもいた。自分が、なぜ、言われるままにこんなものを着てしまったのか。それが、自分でもよくわからなかった。でも、その下着や服を渡され、この琴美の部屋に一人で残されたとき、先刻、履歴書を写しながら感じていた感覚が、またよみがえったのだ。これを着れば、今の憂鬱な毎日を送る自分とは別の自分になれるという気がした。手の中にあるその下着の、どこか秘密め

いた感じも、そんな気持ちを増幅させていた。

そして、そんな気持ちに突き動かされ、それらを実際に身に着けていくと、我を忘れるような感覚はさらに強まった。

オイルブラは、拓也が少し体を動かすだけで、「胸が揺れる」弾力を肌に伝えてくる。少しきつめのスカートは、いつものような腹式呼吸を許さない。その裾は膝小僧をなで、パンティストッキングは、

腿と腿がふれあうたびにかすかにこすれて、しびれにも似た不思議な感覚を脚に走らせた。

そんな体全体を被う感覚のせいで、拓也は、まるで別世界にいるような感じになっていた。だから、琴美が、その顔に化粧している間も、ただ黙って、緊張したように座っていたのだ。

「私も、化粧なんて、あんまり上手じゃないから、いまいちかもしれないけど、がまんしてね」

琴美はそう言いながら、拓也の顔に、ファンデーションに始まり、あれこれのものを塗っていった。

「うん。：：こんなもんなかな。立ってみて」

その言葉に、拓也が呆然と立ち上がると、琴美はもう一度、拓也の姿を上から下まで点検した。

「うん、これなら、外歩いても、疑う人いないと思うよ。じゃあ、お腹も減ったことだし、昼ご飯食べに行こうか」

「……えっ？ この格好のまんまで？」

琴美の言葉に驚いて、現実に戻された拓也がきくと、琴美は、また大きくなずいた。

「面接はあさってなんだよ。お互い、早く慣れとかないと。それに、履歴書には写真がいるでしょ。駅前インスタント写真のボックスがあるじゃない。あそこで写真も撮ろう」

「また、見てるの？」

山手線の車内の座席で、シヨルダーバッグから履歴書を取り出して見入っている拓也に、横に座った琴美は、ちよつとあきれたように言った。

「う、うん。面接までに、もう一度、ちゃんと頭の中に入れておこうと思って……」

拓也はそう答えたが、琴美は、たぶんそういうことではないのだらうと思った。

昨日の日曜、二人は丸一日を使って、声の出し方やしゃべり方、仕草などの練習をした。お互いを見て、おかしなところも矯正し合った。面接での想定問答も何度も繰り返したから、履歴書には書いていないことまで含め、お互いの経歴は頭にたたき込んでいる。だから今さら、履歴書など読み返さなくてもいいはずだ。たぶん拓也は、そこに貼ってある写真を見ているのだ。写真を見て、今自分がどんなふうに見えるの

かを確かめ、安心したいという気持ちなのだろう。

たしかに、その写真の中の拓也の姿は、見ているだけでそんな不安をはらすほど「女の子」そのものだ。

スーツ姿のバストショットだし、ヘアスタイルもショートなのだけれど、ぱっちりとした目と少しだけ上向き加減の小振りな鼻、そして、口角がきゅつと上がった唇の取り合わせは、驚くほど化粧映えした。写真だと、女性としては多少大柄なのがわからないぶん、よ

けいにかわいく見えるのかもしれない。

一昨日、駅前のインスタント写真のボックスでその出来上がりを見たとき、琴美もちよつと驚いたが、それ以上に、拓也はこの写真に心を動かされたようだった。

それまでは、もじもじとうつむき、琴美に隠れるように歩いていた拓也が、この写真を見たとたん——まだ恥ずかしそうではあったが——、態度を変えたのだ。

駅とマンションの途中にあるファミリーレストランで食事をとっている間も、女の子を演じようと努力していたようだし、帰ったあと、琴美が言ったとおり――

――渋々という顔はしていたが――、すね毛も剃ったようだ。

昨日の練習でも、思った以上に協力的だった。その結果、たった一日で、立ち居振る舞いも、女の子らしく見えるようになったのだ。

現に今も、電車の振動に揺れながら、紺のスカートから出た膝頭をそろえ、きれいな脚を傾けるように座るその姿に、不自然なところはない。まわりの乗客たちも、まったく気にしていないようだ。

と、履歴書をバッグにしまった拓也が、琴美に耳打ちしてきた。

「脚、もうちよつと開いてた方がいいかも」

むしろ、男らしく振る舞うよう注意しなければいけ

ないのは、琴美の方だった。

信号待ちの交差点で、転職情報誌をコピーしてきた地図を見て、琴美はもう一度応募先の会社の場所を確かめた。

「あ、あそこの、一階に旅行代理店の入っているビルみたいよ」

その言葉に、拓也がこちらを見た。

「声、気をつけないと」

思わず、いつものしやべり方で話していたのだ。

「そ、そうだね」

琴美は、ちよつとだけトーンを落とす、のどの上の方でゆったり話すようにして、うなずいた。昨日の練習で見つけた男っぽい声の出し方だ。拓也の方は、逆に、のどの奥で声を出す感じにするとよいようだった。

お互い、無理に声の高低を変えようとすると、不自

然ないやらしい感じになる。そうではなく、発声するとき、のどを使う場所をいつもと変えるように意識する方が、音質が変わる。男女の声のちがいは、高低もあるが、むしろその音質が問題だというのを、二人で発見したのだ。特に拓也は、もともと、しゃべり方に鼻にかかるような感じがあるので、それだけで、ちよつとハスキーな女の子の声に聞こえた。

「いっしょに入って行かない方が、いいと思うんだけ

ど」

信号が変わったので、横断歩道を歩きながら、琴美は、その男の声で言った。

「……う、うん」

拓也は、ちよつと不安そうに肩をすくめた。意識しているのかいないのか、それもまた、なんだか女っぽい仕草だ。

「大沢君、先に行つて」

目的のビルが近づいたところで、琴美はそう言い、そして、すぐ言い直した。

「そうじゃない……な。ここからは、岡崎琴美か」

「僕……、あたし、から？ どうして？」

まわりの通行人を気にして、拓也の方も出かかった言葉を飲み込み、言い換えた。

「どうしてってことはないけど……つまり、レディ・ファースト」

琴美は、理由にならない理由を口にした。

じつは、琴美にしても不安だったのだ。

ここまでやってくる間に、たくさんの人の目に触れ、見かけだけでは見破られないという自信はついたが、ここからは、他人となんらかの交渉を持たなければならぬ。そこでも男を演り通す自信は、まだなかった。

「そんなあ。そんなこと言うなら、ぼ……あたし、このまま帰ったっていい……のよ」

必死に女言葉を使おうとしている拓也の素振りに、「このまま帰る」ことはないだろうという気がしたが、もともとの発案者は自分なのだからと思い直し、琴美は言った。

「わかったよ。……ぼ、僕から行くよ」

「男らしさ」を示さなければいけないとも思ったのだ。

緊張はしたが、そのビルの四階にある「平安トレード株式会社」の受付でも、琴美は疑われずにすんだようだ。

出てきた制服の女子事務員に「あの、就職面接にかがったのですが」と言うと、その女の子は、琴美の顔を見てにっこりと笑い、すぐに、教室のような配列で会議テーブルが並べられた部屋に案内してくれた。

部屋の中には、すでに十五人ほどの男女が、どこか

不安気に座っていた。女が五人で、あとは男だ。

二三人を除き、男も女も、ほとんど新卒のようだ。

きつとみんな、最後のチャンスに賭けているにちがいない。

それぞれが間を空け、ばらばらに席に着いているのだが、部屋の真ん中あたりを境界に、なんとなく男女別になっている。

琴美は、一瞬、女性のいる側に行きそうになり、あ

わてて、男性の側に座った。

と、すぐに、ひとつ空けて隣にいた男が席をつめ、顔を寄せてきた。

「君も、新卒？」

「え、：：あええ」

突然きかれて戸惑った琴美は、「ええ」と「ああ」の中間のような言い方で答えていた。声質に注意して緊張したのと、同じ年頃の男同士——しかも初対面——

—の会話の場合、どんな返事をしたらいいのか、よくわからなかったのだ。

「お互い、ここで決めないと、もうプーしかないよな」
その男が言った。

なんだか軽くて厚かましそうな、間違っても琴美は好きにならないだろうというタイプの男だ。

「：：う、うん。そうだね」

話せばぼろが出そうな気がして、琴美は素っ気ない

返事をした。

と、そこでドアが開き、拓也が案内されてきた。

一瞬、部屋にいる全員の目が拓也に集中した。さつき、琴美が入ったときもそうだった。みんな手持ちぶさたで、しかも、担当者が来るのを待っているの、誰か入ってくれば、そこに視線を向けるのだらう。

でも、そのあとの男たちの反応が、琴美の時とはちよつとちがった。

拓也は、入ってくると、琴美と同じように、一瞬男の座っている側を向き、そこで気づいたように、女たちの座っている側の席に進んだのだが、男たち全員がそれを目で追っていた。

そんな視線に気づいてか、拓也は、必要以上にスカート裾に注意を払うようにして、席に着いた。そして、ちらりと琴美の方に視線を走らせた。

それで、琴美も、それとなくうなずき返した。

と、そこで、隣の男がまた口を寄せ、言った。

「あの子、今、俺の方、見なかった？」

「え、そう？」

琴美があわててあいまいな返事を返すと、男はなんと、「気があるのかなあ、俺のこと」と独り言をつぶやき、そして――

「あんなかわいい子が入社するなら、がんばらなきやな」

——と、琴美に同意を求めた。

「あ、ああ」

琴美は、その男の反応にちよつと驚きながら、また、あいまいにうなずくしかなかった。

そのあと、やはり新卒らしい男女が二三人ずつ加わり、それで全員がそろつたのだらう。すぐに人事の担当者らしい男が現れて、全員の前に立った。

「本日は、当社の社員募集に応募していただき、あり

がとうございます。ご承知のように、金融自由化が進む中で、わが商品取引業界は急速な近代化と体質改善を迫られております。当社においても、昨年暮れに二年後の株式上場の方針が決まり、現在、組織見直しとともに、全国ネットへと業容の拡大を急いでおります。それに伴う、社員の地方への配転などもあり、急遽、本社社員の第二次募集が決まった次第でございます。すでに一次の募集で、本年度新卒者十名ほどの採用が

内定しておりますが、今回の募集は、その方たちとまったく同条件での若干名の採用を予定しております：
：

そのあと、今日の日程の説明へとつづいた人事担当の挨拶が終わると、その言葉どおり、まず会社案内用のビデオの上映が始まった。もう少しつつこんだものかと思ったが、商品取引の仕組みなどを紹介した、琴美には、もうわかっている内容ばかりだった。

それなのに、隣の男は、いちいち「へえ」とか「ほお」とか言っつてうなずいた。そのわざとらしいほどの反応に、琴美が辟易した頃、ビデオが終わった。

すると、SPIの適性検査の用紙が配られた。

合図とともに、「よく落ち込む方だと思う」とか「何でも相談できる友達がいる」とか「人から個性的な性格だといわれることが多い」とかいう質問に答え、マークシートにイエス・ノーを書き込んでいく。

限られた時間の中で数多くの質問に答えなければいけないから、とっさの判断で書き込む。それで、その人の資質がわかるというが、本当だろうか。琴美は受けるたびに思う。

だいいち、琴美のように何度も受けていると、どう答えたら企業のウケがいいかのパターンまでわかってしまうのだ。

それに、「これは性格テストではなく、あくまでそ

の職種に向くかどうかの適性検査だ」というのも、なんだかインチキくさい。明らかに、性格を見ているとしか思えない質問も多いのだ。けっして性格で就職差別しているわけではないという言い訳なのだろう。

琴美は、そんなことを考えながら、いつものように機械的に質問に答えていった。ただ途中で、今回は、いつもと少し答えるパターンを変えた方がいいことに気がついた。人間関係を問うような項目では、女とし

ての立場と男としての立場で、企業の気に入る答えが変わるような気がしたのだ。

その「適性検査」が終わると、人事の男が、「では、一般事務希望の方は別室へ移動してください」と言った。先刻の説明によれば、営業の方は、つづけて一般教養のテストをやるのだという。事務の方は、すぐに面接だ。

新たに配られたテスト用紙を受け取りながら、琴美

が見やると、部屋を出て行くところだった拓也が、不安そうな顔で見返してきた。

「では、次、岡崎さん、お入りください」

控え室で待っていた拓也は、一瞬間があつたあと、やっと自分のことだと気づき、「はい」とソファを立った。

立ち上がると、さつきから速まっていた心臓の鼓動

がさらに高鳴った。胸のオイルブラにその鼓動が伝わり、大きく揺れている気さえした。

就職用の靴だからそんなに高いわけではないが、それでも、そのヒールがタイルカーペットに引っかかり歩きにくい。面接室に入るときには、思わずつまづきそうになった。

あわてて体勢を立て直し、スカートの裾のあたりに手をそろえ、頭を下げる。

「……S 大学経済学部 の岡崎琴美と申します。よろしく
お願いいたします」

目を上げると、そこに並んだ二人の年輩の男と、人
事担当らしい女性がこちらを見ていた。

なんだか、いつもの面接よりじろじろ見られている
感じだ。もしかしたら、不審がられているんだらうか
……。。

そんな不安を抱きながら、拓也は、用意された椅子

まで進み、腰掛けた。

スカートの後ろに、それとなく手をあて、まくれ上がらないように注意しながら腰を落とす。かといって、やたら裾を気にして直したりしては、かえって嫌らしい印象になる。つま先をそろえ、膝の下あたりまで引き、自然な感じに脚を傾ける。手は、膝の上で両手の指を重ねるようにそろえて、背筋を伸ばし、面接官の顔をまっすぐ見つめる。

拓也は、昨日、琴美にレクチャーされたとおりに振る舞った。ここまでは、どうやらうまくいっているようだ。重役らしい面接官たちが見つめてくるのは変わらなかったが、二人とも笑顔だ。

と、彼らの視線がちよつと下に動いた気がした。やはり、琴美が言っていたように、全身を見ているらしい。これも、いつもの面接では経験しないことだった。

「うむ」

ひとりの重役がうなずき、先刻提出した履歴書のコピーらしいものを見て、言葉をかけてきた。

「四大、それもS大を出て、一般事務っていうのは、君としては不本意なんじゃないのかね」

いきなりの変化球だ。

こういう質問をされたときは、妙に取り繕ったりせず、「正直に」答える方がいいと琴美は言っていた。

「はい。それはそうなんですが、ご存じのように、女

子の就職は採用してくださる企業が少なく、なかなか希望どおりにはいきません。でも、せつかく学んできた知識を社会に役立てていくためにも、やはり、ちゃんとした企業で働きたいと考えました。それで、御社のような企業で、どんな仕事でもいいですから、働かせていただけたらと思いました」

拓也の答えに、その重役は、また「うむ」とうなずいたあと、「でも、事務だと、コピーとりのような仕

事も多いよ」と言った。

「はい、そんな仕事もいやだとは思いません。むしろ、私は、身のまわりの方に喜んでいただけるとようなことができたとき、自分自身も喜びを感じる、そんな性格だと思っています。正直言つて、人を引っ張るとか、なにかの交渉をするとか、そういう仕事は、もうひとつ自信もありませんし」

「しかし、当社の場合、一般事務といつても、総務系

ばかりではなく、営業のアシスタントといった仕事も多いからね。お客様への電話かけとかもお願いするところになると思いますよ」

その重役は、さつきとは反対のことを言ってきた。

反応を試しているにちがいない。

「はい。自分からリーダーシップをとる自信はありませんが、社会人として自立して生きていくためには、そんな場で、みなさんにご指導していただけたらと思

っています」

拓也は、いつもの面接よりなんだかすんなり言葉が出てくるような気がした。つくっているにしても、いつもの——無理して「やる気」を見せようとする——演技より、ずっと本音に近いからかもしれない。

と、それまで横で、どこかにやついた顔をしていたもう一人の重役が、言った。

「そんなこと言っというて、一年くらいしたら、さっさ

とコトブキ退社する子も多いからね。最初から腰掛けのつもりで就職してさ。君も、もしかしたら、もういい男でもいるんじゃないの？」

これは、昨日の練習では想定していなかった質問だった。なんと答えたものか、拓也は困り、そのことで、どぎまぎと目を泳がせた。自然に、顔も赤くなった。

と、さっきの重役が、質問した重役をたしなめた。

「常務、そんなことをきくのは、よろしくないでしょ

う。セクハラですよ」

といつても、けっして陰悪な言い方ではなく、拓也の反応に微笑みながら助け船を出してくれた感じだった。

人事担当の女性も、その言葉に大ききうなずき、拓也に笑いかけた。

∴∴女の子のふりするなんて、どうなることかと思

ったけど、なんかいつもより面接官がやさしくて楽しかったな。

フライドポテトの最後の一本を口に入れながら、拓也はそう思った。

あのあと、面接は妙に和やかな空気が進み——女の子らしく見せるのに気は使ったものの——、拓也はきかれたことに素直に答え、重役たちも気軽な感じで笑いながら話し、気がつくとも終わっていたのだ。

コーラのストローに口をつけたところで、こちらもからになっていることに気づいた拓也は、ガラス張りの外を行き交う人の波を見やった。

「まだ、終わらないのかな……」

平安トレード最寄り駅近くのハンバーガーショップで、琴美を待っているのだ。朝、行く途中で、早く終わった方がここで待っていようと、打ち合わせていた。

歩道からもよく見える窓際のテーブルで、女物の服

を着て座っているのは、やはり落ち着かなかつたし、それに、けっこう混んでいるファストフードの店で、たった一人で一時間以上粘っているのはつらい。

口にするものもなくなってしまった拓也は——手持ちぶさたでもあり——、脇に置いてあったバッグをとった。ストローに口紅がついているのに気づき、塗り直してみようかと思ったのだ。

バッグからコンパクトを取り出し映してみると、や

はり、唇の中央の部分が上下ともはげかかっていた。フライドポテトの油も残っている感じだ。

ポケットティッシュを取り出し、その油を拭き取ったあと、拓也はリップステイクを持って、唇に走らせた。コンパクトの鏡の中で、形よくかわいい唇が、ふたたびよみがえっていった。

人の行き交う街の真ん中でそんなことをしている自分に、どこかぞくぞくするような感覚がした。それで

拓也は、口紅だけでやめず、パフでファンデーションも塗り直した。

「ふふ、やるじゃん」

鏡を見つめていた拓也は、すぐ近くで聞こえた声に驚き、顔を上げた。

と、男物のスーツにコート姿の琴美が立っていた。

すでにその手にハンバーガーののったトレイを持っているところを見ると、ずいぶん前に入ってきていた

のだ。ということとは、それにも気づかず拓也が化粧を直しているのを、ずっと見ていたにちがいない。

「……あ、う、うん……、ど、どうだった？」

照れくささに動揺した拓也は、あわててコンパクトをしまい、話題を変えるようにきいた。

「うん、試験はばっちり」

琴美はそう言って拓也の向かいに腰掛けると、「でも、面接は……」と、ちよつと複雑な表情をした。

「いつもより、言いたいこと、いっぱい言えた気はしたけど、なんか、向こうは、厳しそうな顔してたから」
「……ふうん」

自分とは逆のことを感じたらしい琴美の言葉に、拓也はあいまいにうなずいた。

「そっちは？」

「よくわかんない。一般職の面接なんて、はじめてだし」

「そりゃ、そうだよな」

ハンバーガーに食らいつきながらそう言い、そこで、
琴美は、自分の言葉づかいに驚いた顔をした。

それを見て、今度は、拓也が笑った。

「そのしゃべり方、戻らなかつたら、どうする？」

「なにしろ、さっきまで、自分は男なんだって、一生
懸命感情移入してたからな：：じゃなくて、ね」

言い訳したその言葉がまたおかしくなり、今度は、

二人で顔を見合わせて笑ってしまった。

と、その時だった。

「あれっ、そりゃ、ないでしょうが」

また、すぐそばで声がした。

拓也と琴美が、あわててそちらを見ると、やはりリクルートスーツにコートを着た男が立っていた。

「なに、おたくたち、知り合いだったの？」

先刻、試験会場で、琴美の隣に座っていた男だ。

「さつきは全然知らないような顔して、このお」

男はそう言いながら、琴美の隣にトレイを置くと、当然のようにそこに腰掛けた。

「なんか、仲よさそうに笑ってたけど、どういうつき合いよ？」

男に問いつめられ、琴美は、口ごもりながら答えた。

「つ、つまり、…その、前にさ、…そ、そう。前に他の会社受けたとき、ちよつといっしょになったこ

とがあつて」

「なんか、あやしいな。ほんとは、しつかりできてん
じゃないの」

「そ、そんなこと、ないさ」

「じゃ、俺にもまだ、このレースに参加する権利があ
るってわけね」

「……え？」

男の言った意味がとっさにはわからず、琴美も拓也

も、きよとんとした顔になった。

と、男は、テーブルに身を乗り出すようにして、拓也に顔を向けた。

「俺、志村誠二。君は？」

「……え、ええ。あの……岡崎……琴美です」

拓也がどぎまぎしながら答えると、志村は押し強い笑顔でつぶけた。

「琴美ちゃんかあ。名前もかわいいなあ」

「でも、あいつ、ほんとにしつこかったよな」

バイト帰りの深夜の町を、表通りから裏道にまがりながら、ふと独り言をつぶやき、拓也はくすつと笑った。

あのあと志村は、「これから遊びに行こう」としきりに拓也を口説き、それがだめだとわかると、今度は、携帯電話の番号を何度もきいてきた。

拓也は、慣れない女言葉で、四苦八苦しながらその攻撃をかいくぐったのだ。

あの時は、こんな思いはもう二度とごめんだと思っ
たが、今思い出すと、なんだか心が弾んでくるような
気がする。

あの日から、一週間が経っていた。

拓也のまわりでは、また、憂鬱な日々が流れていた。

あのあと、二社ほど——もちろん男として——就職

面接を受けたが、どちらも芳しくはなかった。

このままいけば、仕事も決まらないまままで卒業を迎えそうだ。

そんな暗い気分の日々の中で、なぜか、あの日のことが、まるでかけがえのない思い出のように輝いていた。まったく奇妙な一日だったけれど、これまでの拓也の人生にはなかった不思議な興奮を味わえた日だった。

そういえば、あの面接の結果がそろそろ出るはずだ。
受かってるかな……？

アパートに近づきながら、ちよつとそう思って、拓
也はあわててその考えを否定した。

たとえ受かっていたとしても、どうするわけにもい
かないだろう。

そう考えながらアパートの入口を入り、いつもの習
慣で、そこにある自分のメールボックスを開けた。

と、その中に入っていたらしい封書が、足もとに落ちた。

「……ん？」

拾い上げると、速達だった。だから、こんな時間にポストに入っていたのだらう。

裏返すと、差出人は「平安トレード株式会社」となっている。

拓也は、そこに立ったまま、あわてて封を切った。

入っていた紙を広げると、「採用通知」という文字が、いきなり目に飛び込んできた。

「……え!？」

それは、拓也が受け取った、はじめての採用通知だった。

驚きの中に、一瞬うれしそうな表情をし、そしてすぐ、拓也はまた肩を落とした。

……そうか、これは、僕宛の採用通知じゃないんだ。

大沢拓也として受けたのは琴美だったのだから、受かったのは琴美だということだ。

拓也は、ため息をつき、それでも、琴美に報告した方がいいだろうと、自分の部屋に急いだ。

でも、もしかしたら、琴美のところにも、僕の方の採用通知が届いているかも知れないし……。

そう思いながら部屋の鍵を開け、拓也は、そこで手を止めた。

……え、もしそんなことになったら……。

一瞬、ドアを開けるのが怖いような気がした。

「……まさか」

拓也は、そんな、恐れ——とも期待ともつかない気持ち——を振り払うようにつぶやき、ドアノブをまわした。

部屋に上がり、急いで窓を開けた。

と、その音を聞きつけたのか、すかさず向かいの窓

が開いた。

「岡崎さん、採用通知が……」

拓也が言うと、窓から顔を出した琴美は「うん、知ってる」と言っただ。

「大沢拓也の名前で電話かけて、結果聞いたんだ。私のところに、岡崎琴美名の採用通知が届いたから」

「……えっ！」

その言葉に、拓也が声をあげると、琴美は、自分の

部屋の中を振り向きながら言った。

「今、できあがるから、ちよつと待ってて」

「……え、なにが？」

琴美の視線を追うと、奥のダイニングテーブルの上で、ノートパソコンに繋がれた小型プリンターが、A4の紙を打ち出し終わるところだった。

「……？」

わけがわからないまま呆然と見ていると、琴美は、

その紙を取りに行つた。

「よく読んで、納得したら、署名捺印して」

戻つてきた琴美から、窓越しにその紙を受け取り、中身に目を通した拓也は、ふたたび声をあげた。

「……えーっ!？」

契約書

私たち、大沢拓也（以下、甲と表記）と岡崎琴美（以下、乙と表記）の二人は、協議の結果、以下の条項について合意に達し、契約を締結する。

主契約

一 平安トレード株式会社（以下、丙と表記）への就職及び丙社員としての就労に際し、甲は乙の、乙は甲の戸籍名及び経歴、身分等を自らのものとして称呼、使用することを無条件で許可する。

一 前項に関連する丙社外での人間関係、社会的活動においても、甲乙両者が必要と認め

た場合は、前項を延用するものとする。

財産・権利の共有

一 前々項及び前項に関し、甲乙両者が必要と認められた限りにおいて、甲乙が所有する財産及び権利、つまり、家財、衣服、部屋の使用権等を、相互に無償で貸借または共用できるものとする。

一 ただし、前項の「財産」には、甲乙が所有する現金及び預金口座、有価証券等は含まないものとする

本契約の期限

一 本契約の有効期限は、特にこれを定めない。

本契約の失効

一 本契約は、甲乙のどちらかが、契約破棄を申し渡した時点で、その効力を失う。

一 前項に関し、甲乙どちらも、一方の意志決定をいかなる方法においても妨げてはならない。

一 また、本契約は、甲乙どちらかが丙を退社した時点で、その意義を失うこととなり、

従って、その効力を失う。

一 前項についても、甲乙どちらも、一方の意志決定を妨げてはならないばかりでなく、一方が丙を退社した場合、もう一方も速やかに退社するものとする。

本契約の発効

一 本契約は、甲乙両者が署名捺印した日よ

り有効となる。

平成〇〇年二月一五日

甲 東京都〇〇区〇〇町一丁目三二番地

大沢拓也 印

乙 東京都〇〇区〇〇通三丁目三番五号

岡崎琴美 印

第4話 から売り

「……わが国においては、未だ、商品先物取引市場に、ある種の偏見を持つ一般投資家は少なくありません。しかし、先般も述べたように、今、時代は大きく

変わろうとしています。国際的な金融革命の中で、『投資機』というものが、市場経済全体に果たす役割が大き
く再評価されているのです。そんな時代にふさわしい
新風を市場にそそぎ込む人材は、古くさい『相場師』
イメージの時代とも、バブル時代ともまったく無縁の、
君たちの世代だと言っていていいでしょう。……」

熱弁を振るう社長の前に、十四人の新入社員が並ん
でいる。そのいちばん端で、真新しいピンクのツーピ

ースーツを着た拓也は、所在なげに立っていた。

社長のその訓示は、内容から言っても、主に外務員、つまり営業社員に向けたものだろう。現に社長は、終始、背広を着た十一人の営業社員たちを見て話している。拓也たちの方には、最初のあいさつの時以外、一度も顔を向けてこない。きつと、女子事務員など、社長の頭の中では戦力としての数に入っていないのだ。

平安トレード株式会社の本年度入社式は、本社B会

議室、つまり、拓也たちが入社試験を受けた部屋で行われていた。

演壇で話す社長と新入社員以外には、部屋の壁際に、二十人ほどの重役や部課長、それに、人事課の二人の社員が並んでいる。

紺かグレーの背広がほとんどの、ダークな色彩の中で、明るい色の服を着ているのは、拓也たち一般事務に採用された三人と、ライトグレーの制服を着た人事

課の女子社員、三谷ゆかりだけだ。

その中でもことに、拓也のピンクのツーピースは、なんだか浮いている感じがした。拓也が居心地の悪さを感じるのは——もちろんそれ以前に、性別を偽っていることが問題なのだが——、この服の色のせいもあるかもしれない。

この服は、琴美が、大学の卒業式のあと、その報告に実家に帰ったとき、母親に買ってもらったのだとい

う。卒業しても郷里に帰らず、東京に勤めると言い張った娘に対する、母親の複雑な思いがこもったプレゼントなのだろう。

じつは拓也の方も、十日ほど前、新入社員研修が始まる直前に一度、岐阜の実家に帰った。やはり卒業と就職の報告に行ったのだが、信用組合の職員である父と大手電力会社に勤める兄は、「商取だつて？」と露骨にいやな顔をした。でも、やはり母だけは、就職祝

いだと、そつとお金を渡してくれたのだ。

拓也は、そのお金で、母に言われたとおり背広を買った。

しかし、今、その背広を着ているのは、拓也ではなく、営業社員たちの列に並ぶ琴美なのである。

この会社に勤めることを納得してくれた双方の母親も、まさか二人がこんな姿で入社の日を迎えているとは思ってもいないだろう。

社長の訓示が終わり、式次第は、いよいよ配属部署の発表に移った。人事課の男性社員が名前と配属先を読み上げ、新入社員が社長から辞令を受け取る。

「：：。志村誠二君、営業部商品ファンド推進課配属を命ず」

「はい」

呼ばれた男が、ひととき大きな声で答え、社長の前に進んだ。

例の、入社試験の日、さかんに拓也のことを口説いた志村だった。

入社前に五日間行われた新入社員研修の初日、顔合わせをした同期入社の中に志村の顔を見つけ、拓也は、驚くと同時に、ちよつと憂鬱な気分になった。

案の定、研修中、志村は拓也のことを「琴美ちゃん」などと呼び、しきりに話しかけてきた。おかげで、同期社員の中で、「琴美ちゃん」という呼び名が定着し

てしまったほどだ。

会社の概要を理解し、同時に社会人としての基本マナーを身につけるためというその研修では、応接マナーのロールプレイングなどもやったのだが、そんなときも、志村は露骨に「琴美」、つまり拓也と組みたがった。研修が終わった帰りにも、しつこく食事に誘われたりした。

ただでさえ女性らしく振る舞うことに神経を使っ

いるのに、志村のその凶々しさは、研修中ずっと、拓也の頭痛の種だったのだ。

できれば、志村とは同じ部署になりたくない。

次々に発表される配属先を聞きながら、拓也は強く思った。

「……。大沢拓也君、営業部営業第二課配属を命ず」
「はい」

琴美は、すぐそれに反応し、返事とともに前に出た。

そんな入社前研修があったおかげで、お互い、交換した名前で呼ばれることにもずいぶん慣れてきた。

研修当初は、「大沢君」と誰かが呼ぶと、つい返事をしそうになった——琴美の方も、自分が呼ばれたのに気づかなかったりした——が、そんな失敗寸前のことを何度も経験することで、三日目くらいからは、こんなふうに女装しているときは「岡崎琴美」なのだという認識が、自分の中でできあがった気がする。琴美

の方もまた、「大沢拓也」であることが身についたよ
うだ。

配属先の発表が事務員に移り、まず、拓也の一人お
いて隣に並ぶ小柄な女の子が呼ばれた。

「……磯村亜莉沙さん、営業部営業第二課配属を命
ず」

研修中、志村のしつこさから逃れようと、拓也は何
度も琴美に目配せを送り、助けを求めようとした。で

も、琴美は、それに応えてくれなかった。

じつは、琴美の方も、それどころではない事情があったのだ。拓也同様、琴美もまた、この亜莉沙にまわりつかれていたからだ。

亜莉沙は、研修中ずっと、琴美のそばに座り、なにかにつけて話しかけていた。そして、研修五日目など、なんと、琴美の——というか「拓也」の——ために、手作りのお弁当まで作ってきたのだ。

そんなふうには、琴美に向かってモーションをかけるというだけではなかった。

研修中一度、昼食のあと、拓也は、この亜莉沙に誘われてトイレで化粧直しをした。

その時、亜莉沙は、口紅を塗りながら「大沢さんって、かっこいいよね」と同意を求めてきた。

あれはどうも、「大沢さんは、私のものよ」という宣言だったような気がする。

もつとも、その時拓也は、自分のことを「かつこい」と言われているような妙な感じがし、それになにより、女子トイレでそんなことをしていること自体に落ち着かず、あいまいに笑い返すしかなかったのだが。

今も亜莉沙は、「大沢拓也」と同じ課に配属されたことがよほどうれしかったらしく、まるでVサインでも出しそうな笑顔で辞令を受け取り、列に戻った。

もう一人事務の配属先が発表されたあと、いよいよ

拓也の番になった。

「岡崎琴美さん、営業部営業第一課配属を命ず」

「はい」

拓也は、志村と別の課の配属になったことに胸をなで下ろし、返事をした。

営業第一課なら、志村の商品ファンド営業推進課とは階も別だ。しかも、琴美の営業第二課とは同じフロアで隣り合っているはずだ。

「ここが四階の女子更衣室ね。ちよつと狭いけど、がまんして」

拓也と亜莉沙を案内してきた人事課の三谷ゆかりが言った。

彼女は、拓也の面接の時、人事担当として同席していた女性だ。採用決定後も連絡窓口になっていたし、研修中も担当者としてずっとついていたので、拓也た

ち新入社員が最初に親しくなった平安トレードの社員だった。

短大を出て四年目だというから、実際は、拓也や琴美より一歳年上だけのはずだが、すでに人事のベテラン社員という感じで、しかも、どこか色っぽい。

「ロッカーにはもう名前が入ってるから、そこを使つて。中に、制服も入れてあるから」

ゆかりの言葉に、亜莉沙は、すぐに自分のロッカー

を見つげ、中から制服をとりだした。

「……これ、なんか、ダサイよね。もつとかわいいのがよかった」

その、ライトグレーのベストとスカート、それに薄い水色のブラウスを見て、亜莉沙は、新入社員らしからぬ言葉を吐いている。

「文句、言わないの」

自らもその制服を着たゆかりが、苦笑した。

「春秋のシーズンごとに、女子社員全員でカタログ見
て選んでるんだから。ほんとのこと言えば、私もちよ
つと不満なんだけどね。もっとおしやれなものもあるの
に、『みんながそれなりに似合うもの』って遠慮がは
たらいて、けっきょく、こういうデザインに落ち着い
ちやうのよ」

「ふうん、馬鹿みたい。今度選ぶときには、私、どん
どん意見言お。色も、今、琴美が着てるみたいな、か

わいいのわいい」

すでに友達のような口調で言う亜莉沙の言葉に——この服のことを気にしていたこともあつて——、拓也は照れた。

亜莉沙は短大卒のはずだから二つ年下だ。でも、同じ女子の新入社員という意識なのだろう。研修の最中から、「岡崎さん」でも「琴美ちゃん」でもなく、「琴美」と名前の方を呼び捨てにしてくる。それにつられ、

拓也の側も、「亜莉沙」と呼ぶようになってしまった。

「もうじき男の子たちも、外務員研修の打ち合わせが
終わって出てくるはずだから、それまでに着替えてお
いて」

ゆかりはそう言って出て行きかけたが、そこで、「そ
ういえば、岡崎さん」と、拓也を呼んだ。

「はい」

「出してもらった交通費の申請書見てて気がついたん

「だけど、岡崎さんて、大沢君と同じ駅なのね」

「え？　：：そ、そうなんですか？」

「なぜゆかりがそんなことを言うのか戸惑ったが、拓也は、とりあえずとぼけた。」

「あ、知らなかった？　これまで、駅や電車でいっしょになったことない？」

「：：え、ええ」

「そう」

ゆかりはそれだけ言うと、笑顔を返し、更衣室を出ていった。

ゆかりさんは、なにか感づいたんだろうか？ 特に不審がつてるふうではなかったけれど……。

拓也はちよつと不安を感じながら、その後ろ姿を見送り、それから、振り返った。

そして、そこで、息を呑んだ。

なんと、目の前に、ブラジャーとパンティ姿の亜莉

沙がいたのだ。

それまで着ていたスーツやブラウスを脱ぎ、着替えているのだった。

拓也は少しの間うろたえ、目を泳がせていた。

しかし、すぐに、なんとか気持ちを落ち着かせようとした。

これは、べつに驚くようなことではない。なんと云っても、ここは女子更衣室なのだ。ここを使うかぎり

は、これからもこんなことに慣れていかなければならないのだ。

そう考えて、なんとか平静を取り繕い、拓也は亜莉沙の体を見ないようにしながら、自分の——つまり、

「岡崎」と名前の書かれた——ロッカーに近づいた。

と、背中合わせに着替えていた亜莉沙が、いつもとはちがう、なんだか冷やかな声音で言った。

「琴美、だめだよ」

「……えっ？」

今の動揺を気取られたのかと思い、拓也はどきつと
した。

しかし、亜莉沙はすぐに、こうつぶけた。

「先につばつけたのは、私なんだからね」

琴美——というか「大沢拓也」——のことを、言っ
ているのだ。

さっきのゆかりの言葉を聞きとめて、「念を押した」

にちがいなかった。

商品取引の営業は、商品先物取引業協会に委託外務員として登録された人間にしか許されない。そして、登録されるには、協会が行う試験に合格しなければならぬ。社員になったからといって、すぐに営業に出るわけではないのだ。

営業に配属された人間には、夏に行われるその登録

外務員試験に向け、さらに三ヶ月間の研修が科されることになっていた。

入社式のあと、その研修日程の通達があるとかで、営業社員だけはその場に残された。そこで発表されたことによると、六月まで、琴美たち新入社員は、午前中、試験対策の授業を受け、午後からは、OJTも兼ね、配属された課の先輩社員のアシストとして内勤するということだ。

そんな打ち合わせを終え、琴美たちは、各課に別れて先輩たちとはじめて顔合わせをすることになった。

同じフロアでもあり、営業第一課と第二課に配属された六人の社員は、一課の山木課長と二課の中村課長に連れられ、会議室を出た。

廊下を進むと、湯沸室の隣の女子更衣室のドアの前に、拓也と亜莉沙の「女子社員」二人が待っていた。

「おっ、二人とも、よく似合うなあ」

山木課長がそう声をかけた。

と、すぐに、亜莉沙が琴美の方に視線を走らせ、「どう？」という感じで見返してきた。

琴美は、しかたなく、それにうなずいてみせたが、その視線は、自然に拓也の方に向かった。

そのよくあるタイプの女子事務員の制服が、似合っていることに驚いたのだ。

亜莉沙の方が、制服のせいで、いつもの印象より平

凡に見えるのに対し、拓也は、その制服姿で、かえつて、すらりとしたスタイルと目鼻立ちが強調されていた。亜莉沙より十五センチ近く身長が高いにもかかわらず、拓也の方がかわいく見えたりもするのだ。

そう思っていると、新入社員の集団に加わった亜莉沙が、ちやつかり琴美の隣に並んできた。

「いっしよの課になれて、よかったね」

他の連中には聞こえないようなささやき声で、亜莉

沙が言った。

困ったことに、もうすっかり恋人気取りだ。

「二課に配属されました大沢拓也です。金融戦国時代に勝利をおさめられる、誰にも負けない得意技を身につけたいと思っています。びしびし鍛えてください」

琴美があいさつすると、拍手とともに、先輩の男性社員たちの声がかかった。

「よっ、色男っ！」

「ジャニーズ系っ！」

先刻から、新入社員があいさつするごとに茶化して
いるのだが、そんな言われ方をしたことで、琴美は、
ちよつと顔を赤らめた。

営業社員たちのあいさつが終わり、次に亜莉沙が一
歩前に出た。

「二課の磯村亜莉沙です。趣味はスノボとカラオケ。

それにお酒。皆さん、行くときは、ぜひ誘ってください。けど、今、新しい恋が始まりそうなんで、そっちの方はパスします」

その大胆なあいさつに、室内が湧いた。

「いいぞ、二課のアイドル！」

「誰だ、相手は？　その中にいるのか？」

ただ、そんな男子社員たちも亜莉沙自身も、先輩の女子社員たちが渋い顔をしているのに気づいてはいな

いようだった。

「一課に配属されました、岡崎琴美です」

まだ騒然とした感じの雰囲気に気後れしたように、
おずおずと前に出た拓也が言った。

と、すぐに男性社員たちは静まった。

「皆さんのお役に立てるように、一生懸命がんばりたい
と思っています」

それだけ言って、列に戻る。

なんだか平凡すぎるあいさつだなと琴美は感じ、ちよつと心配になった。

と、大きな拍手が起こった。

「いよつ、今年度ミス平安！」

そのかけ声に、今度は亜莉沙が渋い顔をした。

どう考えても、「二課のアイドル」より「ミス平安」の方が上だからだろう。

それにしてもみんな、女をなんだと思ってるんだ。

琴美は、心の隅で、ちよつとそう感じた。

「帰りにここで待ち合わせるの、やめた方がいいかも
知れないね」

例のハンバーガーショップで待っていると、十五分
近く遅れて、ピンクのスーツ姿の拓也がやって来た。

会社を出たのは拓也の方が早かったはずなのにどう
してだろうと思っていると、シェークの紙コップを持

って席に着いた拓也が、さらに話をつづけた。

「社員の半分くらいは、この駅から帰るんだって。見られたら、やっぱりまずいでしょ」

その言葉に、琴美は思わず笑ってしまった。

と、拓也は「……？」と首を傾げた。

「だって、なんか、不倫中の恋人同士みたいな会話だなと思って」

「え？　そう言えば、そうね、……そうだね」

今度は二人で笑い合いながら、琴美は、それにしてもなんだか変な具合だなと思った。こんなふうには、街中で男装と女装で話していると、双方とも、言葉遣いが中性的———というか、男言葉と女言葉の間で、妙に揺らぐのだ。

「でも、岡崎さんだって、困るんじゃない？ 亜莉沙……、磯村さんにでも見られたら、すごいやきもちやかれるよ、きつと」

「やめてよ。ぼ……私、あの子のこと、どう扱ったらいいか、困ってるんだから。同じ課になって、席も隣だし。でも、そっちだって、志村に……志村君に、追いまわされてるじゃない」

「うん。今も、会社出るところ見つかって、ずっと誘われてたんだ。寄るところがあるからって、反対方向の地下鉄の駅までまわり道して、やっと振り切ったけど」

「あ、それで」

拓也が遅くなった理由がわかり、うなずいてから、琴美はつづけた。

「でも、志村君だけじゃないみたいだよ。今日一日で、『ミス平安』っていうのが、一課と二課の男たちの間では通り名になっちゃってるし」

「え、そうなの？」

拓也は、あきれたような、困ったような、照れくさいような、ちよつと複雑な顔をした。

「やっぱり、大沢君って、誰が見ても、美人でかわいいんだなって、今日、再認識した」

「そんな：：、うれしくないよ、そんなこと言われたって」

「そう？」

琴美がからかうような視線を送ると、拓也は、ちよつとふくれた顔をしてから、言い返してきた。

「でも、岡崎さんだって、女子社員の間で噂になつて

るよ。更衣室で、先輩たちが『大沢君って、かわいいよね』って話してた。それ聞いて、磯村さんは、かりかりしてたみたいだけど」

「え？　：：あ、そうか。大沢君、女の子たちといっしよに着替えるんだ」

拓也の言ったことより、そのことにはじめて気づき、琴美は言った。

と、照れるかと思っていた拓也が、逆にからかうよう

にきいてきた。

「うらやましい？」

「なんでよ」

ますます変な具合だった。「男と女」という感覚が、
どんどんねじれていく感じだ。

琴美がそんなことを思っていると、ガラス張りの店の外を見た拓也が、あわてたように、手で顔を隠した。

「どうした？」

「うん、今、柳田さんが駅を出てきたんだ」

「え？」

琴美が見ると、たしかに、営業一課主任の柳田進らしい長身の後ろ姿が、会社の方に向かって歩いて行った。隣の課だからよくはわからないが、たぶん、今、営業先から帰ってきたところなのだろう。

「そうか、大沢君、柳田さんにつくことになるんだよね」

琴美は、今日、中村課長が亜莉沙に説明していたことを思い出し、言った。

平安トレード営業部の事務社員は、ふつう、一人あたり、営業社員三人の担当を持つらしい。彼らの指示に従って、書類整備や資料・名簿づくり、顧客との連絡など、アシスト業務をするのだ。ただ、右も左もわからない入社当初は、各課の主任一人を担当することになっている。主任が女子社員を教育するという意味

なのだろう。

「柳田さんって、どういう人？　なんかすごいやり手だっけ話だけど」

琴美はちよつと気になってきいた。今日、同じ課の先輩社員が、そんなふうの評するのを耳にはさんだのだ。

「まだよくわかんない。ろくに話さないうちに営業に行っちゃったし」

拓也は、どこか所在なげに言った。

「そうか、それで午後、暇そうにしてたんだ」

「課長はあれこれ声かけてくれたけど、けつきよく、
なにもやることなくって……。まあ、楽でいいんだけ
ど……。」

拓也は、そこで、ちよつと考え込むようにした。

「……。でも、ほんとに、こんなこととしていいのか
な？」

琴美は、拓也の言ったことを、単なる入社一日目の感想ではないと思った。

たぶん拓也も、同じように、自分の中で感覚がねじれていくような、奇妙な不安を感じているのだ。

本当に、こんなことをしていいんだらうか？

洗ったばかりのブラジャーとショーツを、部屋の中に吊した小物干しに掛けながら、拓也は、また考えて

いた。

琴美に押し切られるように、あんなおかしな契約を交わし、こんなことになってしまった。そもそも当初から、琴美の、とても常識的とは言えない思いつきに振りまわされっぱなしだ。

ただ、それを、すべて琴美のせいにするのは、やはりフェアじゃないだろう、と、今は思う。

その途中途中で——消極的にではあっても——、け

つきよく自分は同意してきたのだし、あの契約書にも、自らサインし、はんこを押したのだ。

それはたぶん、そんな行為の中に、これまでの、取り立ててどうということもない人生にはなかつた——、ことに、この一年ほどの冴えない自分とはちがう——、なんだかわくわくするような感じがあつたからだ。

しかし、それは、多分に遊び半分というか、どこか現実味に欠ける感情だつた気がする。いわば、ロール

プレイングゲームの中で遊んでいるような感覚だった。

でも、今日からはそうもいかない。

目の前の現実として、会社勤めのOLという毎日が始まっているのだ。

現に、このブラジャーとショーツだってそうだ。

採用が決まったあと、琴美がもう二組買ってきてくれたというものの、毎朝、これを着けて会社に出勤

するためには、こうして、毎晩洗濯しなくてはならぬ。
い。

まさか、窓の外には干せないから、こんなふうには部屋の中に干すしかない。

帰ったあとは、男物の服を着て大沢拓也の部屋で暮らしているというのに、そんな本来の現実の中に、「〇
L岡崎琴美」としての現実が入り込んできているというわけだ。

こんなことは、これから、もつと多くなっていく気がする。

そして、問題はそれだけではない。

どうも、自分自身の心の中も、この部屋と同じような状態になり始めているのだ。

大沢拓也としての――つまり男としての――見方や考え方と、岡崎琴美としての――つまり女としての――見方や考え方の両方が、自分の中にあり、それが、

妙な具合に入り組んできている感じだ。どちらが自分にとって「現実の」気持ちなのかが、よくわからなくなりはじめている。

本当に、こんなことをしていいのだろうか？

拓也は、ふたたび、そう思った。

あの契約によれば、どちらかがやめようと言い出せば、こんなことは、すぐにやめられることになっていく。

後戻りするならば、今しかないのではないのか？

自分——そして琴美も——の行く末に、ちよつと怖
ささえ感じた。

明日着けていくためのオイルブラとショーツを用意
しながら、そんなふうにかえているとき、琴美の部屋
の窓が開く音がした。

それに気づき、拓也が窓を開けると、琴美は、持つ
ていたグリーンのワンピースを示した。

「明日着てくの、これでいいでしょ。スーツなんて、リクルートスーツの他にはもうないし、まだ二日目じやあ、あんまりラフな格好で通勤するわけにもいかないだろうし」

「：：うん」

拓也は、どこか浮かない顔でうなずき、それでも、琴美の言うとおりでだと思い、そのワンピースを受け取った。

と、琴美がまた言った。

「大沢君のスーツ、あとの二着も、こっちで預かっところか。毎日、受け渡しするのも面倒でしょ」

「うん。僕の方も、いちいち返さなくてもいいよね」
自分の男物のスーツをダンスから出しながら、拓也はそう言った。

そして、やはりこんなふうには、自分にしても琴美にしても、「男」と「女」がどんどん入り組んでいって

しまうのだろうと感じた。

「明日から、そっちは、また研修だね」

そのスーツを手渡しながら拓也が言うと、琴美は、ちよっとうんざりしたような顔をした。

「うん、どうせ、もうわかってる話、くどくど聞かされるんだらうけど」

「そりゃ、岡崎さんは、それが専攻だったからだよ。

そうじゃない学科出たやつには、商品取引なんて、ま

だ、ちんぷんかんぷんだと思うよ」

「そうかな。そんなにむずかしい話じゃないと思うけど」

「そんなことないよ。この前の入社研修で概略説明されたけど、僕も全然実感持てなかったもん。だいたい、いきなり売りができるなんて、さっぱりわからない」

「ああ、『から売り』のこと？」

「買ってもしないんだから、売るものなにも持ってな

いわけでしょ。なのに、売り注文から取引がはじめられるなんて、なんのことだか」

「だから、先物取引っていうのは、現物取引とはちがうのよ」

「:::？」

「物を売り買いしてるわけじゃなくて、何ヶ月か先の商品の値段を売り買いしてるわけ。つまり、物の値段っていう観念を売買してるのね」

「……なんか、そういう言い方されると、よけいにかからないよ」

拓也は、首を傾げるほかなかった。

「ふふ、ま、あの会社で仕事してれば、いずれ、わかるようになるよ。だけど……」

そこで琴美は、ちよつと考えるようにした。そして、こうつけ加えた。

「私たちだって、いわば『から売り』してるようなも

んか。現物とはちがう自分、売ろうとしてるんだから」

第5話 証拠金

「入社して最初の、仕事らしい仕事があんなのって、なんか馬鹿みたいだよな」

幾重にも折りたたまれたビニールシートを重そうに

抱え、亜莉沙が何度目かの文句を言った。

「しかたないじゃない。毎年、場所取りは、新卒社員の仕事だっていうんだから。：：ね、あそこなんかいいんじゃない？」

やはりビニールシートを持った拓也は、よさそうな場所を見つけ、公園内の遊歩道をそれて緑地帯へと入った。一課二課合わせて三十五名。その全員が座れる余地があつて、上に張り出した枝の桜も満開だ。

つまり、入社十日目のこの日、拓也と亜莉沙は、朝イチから、花見の席の確保を仰せつかったのである。

「だけど、見てよ。他の会社は、みんな男子社員が来てるんだよ。なんでうちは、こんなこと、女の子にやらせるのよ」

「だって、男の人たちは午前中研修なんだから、朝から来られるのはあたしたちしかいないでしょ」

拓也は、「男の人たちは……」などと自然に言っ

いる自分自身にちよつとあきれながらも、目星をつけた場所にシートをおろした。

「午後からは、誰か代わってくれるって言ってたから、いいじゃない。亜莉沙、ちよつと、そつち引つ張つてよ」

シートを広げながら言った拓也の言葉に、反対側の端を持ちながら、亜莉沙はまだ不満げだ。

「でもさあ、琴美、うちの会社って、女子の扱い、ち

よつとひどいんじゃない？　うちの課なんて、なんか、セクハラっぽいしさ」

亜莉沙の論点は、微妙に変わった。

「そうなの？」

「うん、人の胸とか脚、じろじろ見るし。『今度、ホテル行こうか』とかって、オヤジっぽい冗談、平気で言うし」

「……へえ」

まだそんな経験をしたことのない拓也は、ちよつと意外な感じがした。

「特に、あのエロ課長」

「え、：：中村課長？」

「うん。なにかにつけて、私の体に触るんだよ。伝票の入力を教えるような顔して、肩抱いてきたり：：」

靴を脱ぎ、敷き終わったシートの上に座りながら、亜莉沙は言った。

そういえば、中村課長が亜莉沙のデスクの横でコンピュータの扱い方を教えている場面をやたらに見るな。

そう思いながら、拓也も、亜莉沙の横に腰を下ろした。こんな時は、これまでなら当然、あぐらをかくところだが、スカートでは横座りするしかない。

「だったら、やめてくださいって言えばいいじゃない。

亜莉沙なら、そのくらい言えそうだけど」

「そんなこと、言えるわけないよ。なんか、意識過剰な女に見えるじゃない。そばに大沢さんだっているんだよ」

なるほど、そういうことか、と思ったが、それ以外にも解決方法はあるような気がした。

「そんなら、先輩の女子社員に相談して、それとなく言ってもらうとか」

「一課はいいよね。みんな、やさしそうで。琴美にも、

いろいろ教えてくれるみたいだし。うちは、みんな、意地悪なんだ」

琴美の会社への不満の論点は、またずれたようだ。

でも、たしかに、更衣室や湯沸室で、亜莉沙は冷たくあしらわれている気がする。

拓也がそう思っていると、亜莉沙は今自分が言っていたことなど忘れたように、「ここつて、気持ちいいー」と、大きく伸びをした。さらに、そのまま後ろに

ばたんと倒れ、寝ころんでしまった。

「……ねえねえ、琴美。午後から、誰が交替に来ると
思う？」

「え？ そりゃ、新入社員の誰かでしょ」

「大沢さんだといいな。ねえ、もし大沢さんが来たら、
私、ここに残るから、帰ったら、うまいこと言つとい
て」

「そんな……」

その言葉にあきれて、拓也が見やると、亜莉沙はシートの上で大の字になっていた。私服に着替えてきたから、けっこう短いスカートをはいているというのに、平然と脚を広げている。

きつと、亜莉沙のこんな無防備さが、男につけいる隙を与え、先輩の女性たちから反感を買う原因なのだろうと拓也は感じた。

そして、そんなことに気がまわるのは、自分自身も

今、スカートで横座りなどしているからにちがいない
と思った。

会社に戻り制服に着替えたあと、オフィスに入って
行こうとすると、一課の山木課長と二課の中村課長が
いっしょに出てきた。たぶん、部課長会議かなにかに
行くのだろうが、その姿を見たたん、拓也はどきり
とした。

「あ、琴美ちゃん、お帰り。……あれ、磯村君は？」
きかれなければいいがと思っていたことを、案の定、
中村はきいてきた。

午後になって交替にやって来た「男子社員」は、亜
莉沙の思惑通り「大沢拓也」——つまり琴美——だっ
たのだ。それで、亜莉沙は居残ると言い張った。

「え、あ、あの……、ちよつと風が出てきて、シート
が飛びそうなんで、二人いた方がいいだらうって……」

「そうか。……桜、散らなきやいいけどな」

拓也の苦しまぎれの言い訳を、中村は疑うこともなく信じたようだ。

それに胸をなで下ろしていると、今度は山木が声をかけてきた。

「そういえば、さつきから柳田が、帰ってくるの待ってたぜ。なんか、頼みたいことがあるらしい。しつかりやれよ」

山木はそう言いながら、拓也を部屋の中に送り込むようにした。

「は……！」

「はい」と返事をしようとして、拓也は、その言葉を思わず飲み込んだ。

山木の手が、スカートの後ろの部分に当てられたのだ。しかも、それが、なでるように動いた。

部屋に入りかけた拓也が驚いて振り返ると、すでに

山木と中村は、何事もなかったように雑談しながら、廊下を向こうへと歩きだしていた。

それを見送りながら、拓也は、さらに愕然とした。

よく考えてみると、山木にそんなふうにされたのは、これが初めてではない。この十日間で二三度あったよ
うな気がする。

あれは、ひよつとして、そういう意味だったの……
か？

もしかすると、自分も——女としては——かなり無防備だったのかもしれないと、拓也は感じた。

そして、そう感じたとたん、山木に触られた尻のあたりから背中にかけて、寒気のようなものが駆けのぼった。

「ただいま帰りました」

動揺を抑え、柳田のデスクに近づいていくと、コン

ピューターディスプレイに表示された市況の数字を見つめていた柳田は、こちらを向きもせず、「うむ」と言った。

「なんでしたか？」

「ああ」

そう言ったきり、まだディスプレイをにらんでいる。

「……あの、なにか用事だと……」

「ちよつと待て」

とりつく島のないような柳田の言葉に、拓也はしかたなく、そのデスクの横にたたずんでいた。

この十日間、柳田と組んでいるはずなのに、同じ課の他の営業とよりも話す機会はない。

だいいち、柳田は日中ほとんど営業に出ていたから、顔を合すことそのものが少ないのだ。オフィスにいる時も、いつも素っ気なく、必要なことしか言わない。

書類やパンフレットをそろえてくれとか、このチャー

トをどこごとくにフアックスしてくれとか、そんなことは毎日何度か頼まれるが、それ以上のことを言われたことがない。だから拓也には、柳田のやっていることが、未だよく理解できていなかった。

もしかしたらこの人は、僕の正体にどこかで感づいて、本能的に避けているとでもいうことだろうか：
：？

手持ちぶさたにその場に立って、拓也がそんなこと

を考えていると、時間とともに変化するディスプレイの数字を厳しい表情で見っていた柳田の顔が、ちよつと動いた。

「ビンゴ！」

小さくそうつぶやくと、すかさず、脇の電話に手をかけた。そして、ディスプレイを見つめたまま、そちらを見もせず短縮ダイヤルを押した。

「……もしもし、柳田です。やはり、今朝申し上げた

とおりの動きをしましたでしよ。たぶん、今が底です。どうします？ 予定通り、仕切りますか？ ……はい」

それだけ言って受話器を置くと、素早い動きでキーボードを操作した。たぶん、買い戻し注文を出しているのだ。最近、やっと少しずつ覚えた銘柄の略号がディスプレイ上に打ち込まれたのを見て、拓也は、輸入大豆の三ヶ月ものだろうと見当をつけた。

それを終えて、ディスプレイから視線をはずした柳

田が、大きくひと息ついた。

「あの……」

声をかけると、そこでやっと拓也のことを思いだし、
たらしく、柳田は「おう」と言った。そして、「君、
エクセル使えるか？」といきなりきいてきた。

「え、……ええ、だいたいは」

経営学科の出身だ。エクセルの表づくりくらいは何
とかなるはずだ。

そう思っていると、柳田が立ち上がった。身長は一八五センチ以上。向かい合うと、急角度で見上げる感じになる。

「俺は、これから営業に出て、今日はもう戻らん。何軒かまわったら、その足で花見に直行する」

「はい」

拓也がうなずくと、柳田は、いきなり話の方向を変えた。

「俺の客に、鈴木勉というのがいる。実績データベースを調べれば、過去の取引は出てくる。それを全部、表に打ち込んでくれ。証拠金も決済額も、全部だ。表のフォーマットはここにある」

柳田はそう言って、机の上からフロップピーを一枚取り上げた。

「その上で、損益レシオを月ごとのグラフにしてほしいんだ。俺は、先方に四時半に入る。それまでに表と

グラフをプリントアウトして先方にファックスしといてくれ。ぶっつけでその表を見ながら話す。くれぐれも数字にまちがいのないようにな」

「はい。鈴木勉さんですね」

拓也は、もう一度、顧客名を確認した。

「ああ」

柳田は、それだけ言うと、重そうな営業カバンを持ち、さっさと出て行ってしまった。

拓也は、受け取ったフロッピーを持ったまま、呆然と見送った。

エクセルの入力とグラフづくりはなんとかなるとして、その実績データベースは、どうやって調べたらいいんだらう……？

「こんなところに一日座っていると、焼けちやいそう。春って、意外とUV強いって言うから。ねえ、大沢さん

は、ガングロの女の子ってどう思う？」

「え？ ……う、うん、まあ、若いうちなら」

琴美は、亜莉沙のおしやべりにちよつと辟易していた。

どうして大沢君は、この子を無理にでも連れ帰ってくれなかったんだらう。こっちの事情はわかってるのに……。

つい、拓也への恨み言も言いたくなる。

「そうよね。二十歳すぎたら、シミだつてできるし。でもさ、ずっと思ってるんだけど、大沢さんって、そういう、女の子の事情、すごくわかってるところ、あるよね」

「そ、そうかな……」

琴美は、ごまかすように返事した。こういう、へんなところで勘の鋭い女の子の前で男を演ずるのは、そうとうに疲れる。その上、亜莉沙は、見え見えに気の

ある素振りを示してくるのだ。

「そうよ。だからもてるんじゃない」

「もててなんか、ないよ」

「うそばっかり。きっと、大学の頃からつきあってる彼女とか、何人もいるんだ」

「そんなこと……」

琴美は、いっそのこと、「彼女がいる」とでも言った方がいいかと思い、口ごもった。

「だってさ、ふつう、男の子って、社会人になっちゃうと、急におじさんぼくなるじゃない。大沢さん、ぜんぜん、そんなとこないから」

「そりゃ、まだ、会社入って十日だから」

「会社入る前からよ。就職活動しだすと、男の子って、とたんに面白くなくなるんだよ。それまで、べたべたしてたくせに、急に冷たくなったりして」

その亜莉沙の言葉の中に、やっと黙らせるネタを見

つけ、琴美は言った。

「そうか、磯村さんの彼氏、そうだったんだ」

と、亜莉沙は、一瞬ばつの悪そうな顔をしたあと、さつと話題を変えた。

「あ、あそこにお団子の屋台が出てる。タツ君、お腹減ったでしょ」

え？ いつの間に関自分は「タツ君」になったんだ：
：？

琴美が驚いていると、亜莉沙は、あわてて靴を履いた。

「ちよつと買ってくるね」

走っていく亜莉沙の後ろ姿を見送りながら、琴美はため息をつき、早く会社のみんなが来てくれないかと思つた。

だいたい私は、こんなことをするために、男になつてまで会社に入ったわけじゃないのに……。

データベースの操作方法を先輩の女子社員から教えてもらい、検索したりリストをプリントアウトした拓也は、それをエクセルの表に打ち込んでいった。

鈴木という顧客は、どうやら柳田の上得意らしく、この五年ほどの間に頻繁に取引がある。その数は膨大だったが、とりあえず、柳田に言われたとおり、取引ごとの証拠金——つまり、売買の際に払い込むお金——

——の欄と、差金決済——つまり、清算額——の欄だけを見て、まちがいのないように入力していった。

損益レシオの計算方法がよくわからなかったが、そんなときに見るようにならわられている実務マニュアルを調べると「一回当たりの平均利益を一回当たりの平均損失で割った比率」とあったので、式を入力し、なんとかグラフ化もできた。

その自分の作ったグラフを見て、拓也はちよつと驚

いてしまった。柳田を介した取引で、鈴木は驚くほどの利益を上げているのだ。一年単位で見ても、拓也が一生かかっても手にすることはないだろうと思える額だった。

やっぱり、柳田さんって、そうとうに凄腕なんだ。

そう思いながら時計を見ると、すでに四時十五分を少しまわっていた。

拓也はあわてて、そのエクセルのデータをプリント

アウトし、例の検索データの顧客欄で鈴木のアックス番号を調べてファックスした。

それを送り終わり、プリンタとファックスが置いてあるコーナーに立ったまま、拓也は大きくため息をついた。

と、そんな様子を見ていたのだろう。背後から山木課長が声を掛けてきた。

「終わったかい」

「ええ」

拓也が振り向きかけると、山木はその肩に手をかけてきた。

「お疲れさん。しかし、やつも、そうとう人使い荒いよな。新人にいきなり、こんなイレギュラーな作業させるんだから」

最初、背中を軽く叩くように置いたその手は、すぐに肩を握るように動いた。

「……！」

山木の手のひらの、汗で湿った感じが、ブラウスの肩の薄い布を通して肌に伝わった。その感触に、先刻感じたのと同じ寒気のようなものが背筋を走り、拓也は、体を堅くしてつばを飲み込んだ。

「じゃ、定時前だが、花見の会場に行ってくれよ」

「……は、はい」

山木の顔をそれとなく見返しながら、拓也は、やっ

とのことで返事した。そのにやけた目つきに下心を感じてしまうのは、単なる気のせいだろうか。

「琴美ちゃんが忙しそうだったから、買い出しは新人の男連中に頼んどいた。やつら、もう準備はじめてると思うから」

そう言って、もう一度肩をたたくようにしたあと、やっと山木の手は離れていった。

昨日までは何とも思っていなかった——いや、むしろ

ろ親切な上司だと思っていた——山木が、なんだか脂ぎった気味の悪い存在に思えてきた。

それでも、拓也はなんとか気持ちを落ち着かせ、デスクまで戻り、コンピュータの電源を落とした。

いずれにしても、早く山木のそばから離れたい気がした。

そう思い、更衣室に向かいかけた時だった。

デスクの電話が鳴った。

「……はい、平安トレードでございます」

拓也が出ると、電話からいきなり「岡崎君はいるか？」という声が聞こえた。どうやら柳田らしい。

「あ、はい、あたしですが」

先刻のファックスの礼を言ってくれるのかもしれないと思いますが、拓也が返事すると、受話器から聞こえる声のボリュームが急に上がった。

「お前、なに考えてるんだ。こんなに儲かるんだった

ら、先物なんて誰でもやるぞ。いったい、俺たちがなにを苦勞してると思ってるんだ」

「……え？」

「オイシヨウが抜けてんだよ、馬鹿野郎」

すごい剣幕でそれだけ言うと、電話はまたいきなり「ブツツ」と切れた。

柳田が言った「オイシヨウ」という言葉が、入社研修の時に聞いた「追い証」であることに気づくのに、

たつぷり一分以上はかかった。

先物は、出資した額の何十倍何百倍の取引ができる。だからこそ、思惑が当たればハイリターンになる。しかし、そのぶん、値が逆に動けば、リスクも大きい。

取引開始の時支払うお金は——実際にものを買うのでなく——、その支払い能力がある証明として払い込むものだ。だから「証拠金」という。ところが、値動きの落差が激しければ、損失が、その証拠金の額を容易

に超えてしまう。さらに取引をつづけるのなら、その時点で、新たに証拠金を払い込まなければならぬ。それを「追い証拠金」つまり「追い証」というのだ。

先刻、表に入力していたとき、拓也は、実績リストの中の、当初払い込まれる証拠金の欄だけを見ていたようだ。取引によっては、その後何度も払い込まれたはずの追い証を入力していないのだ。数字上、とんでもない利益が出るのも当然だった。

そこまで気がつくのに、さらに何分かがかかった。その間、拓也は、切れてしまった電話を握りしめたまま、呆然とたたずんでいた。

「どうしたんだ？」

そのようすを不審に思ったのだろう。ふたたび近づいてきた山木がきいた。

やっと我に返って、拓也は答えた。

「……あの、課長、あたし、お花見に行くの、もう少

し遅れそうです」

「あれ、なんで人事課がいるわけ？」

すでに宴もたけなわの花見の席に、今やって来て加わった営業マンが言った。出先から駆けつけるため、遅れてくる営業は多いのだ。

「人事課には、俺が声かけたんだよ」

中村がそう答えると、その近くに座っていたゆかり

が言葉を継いだ。

「おじやましてます。うち、メンバーが四人しかいないんで、毎年、さみしいお花見やってたんです。それで、中村課長が、気を使ってくれさつて」

「こんな酒の席で、人事査定なんてしないでよ」

「人事課に査定の権限があるわけじゃないですよ。それを言うなら、課長に言ってくださいよ」

営業マンの冗談に、ゆかりは笑いながら答えた。

「そんなこと言つといて、じつはリストラの対象者さがしてんじやないの？ 酔っぱらって、女の子にセクハラしたとかなんとか理由見つけてさ」

「そういうことなら、お前がいちばん危ないぞ。ま、駆けつけ三杯だ」

中村はそう言いながら、営業マンの持った紙コップに酒をついだ。

「あ、すみません」

営業マンはそう言いながら、さらにそこにいるメン
バーを見渡した。

「あれ、他にもよそもんがいるじゃないか」

「あ、おじやましてまーす。商品ファンド営業推進の
志村でーす」

その営業マンの言葉に、すでに何度も一気飲みをや
らされて完全に酔っている志村が答えた。

「おめえだな。商品ファンドの連中が言ってた調子の

いい新人っていうのは」

「はい。調子のいい志村、どえーす」

そんな様子を見ながら、志村の横に座った琴美は苦笑した。

ま、うるさいけれど、こいつが来てくれたおかげで、私は「一気」から免れてるんだから、感謝しなきゃ：。

そう思ったのだ。

ここでは、あまり酔うわけにはいかない。三ヶ月前のように意識がなくなるほどの酔っぱらい方でもすれば、地が出て、正体がばれる。

と、琴美をはさんで志村とは反対側に座った亜莉沙が、しなだれかかってきた。

「ねえ、タツ君、もっと飲んでよお」
「こちらも、そうとうに酔っている。」

「へ、タツ君？　タツ君って誰よ」

その言葉を耳にはさんだらしく、志村がきいた。

「タツ君はタツ君よ。ね、タツ君」

「磯村さん、ちよつと飲み過ぎだよ」

首に両手を巻きつけるように甘えてきた亜莉沙に、
琴美はまわりの目を気にしながら言った。

「いよつ、タツ君！」

志村がやし立てたので、琴美はさらに肩をすぼめた。

と、案の定、営業マンの一人がそれに気づいたよう
だ。

「あれーっ、磯村の彼氏って、大沢なのか？」

大きなその声に、それぞれに盛り上がっていた全員
がこちらを見てきた。

「そうです。大沢タツ君が、私のカレです」

亜莉沙が、まるで宣言でもするようにそう言った。

と、いつせいに歓声や口笛が、琴美と亜莉沙を取り

巻いた。

志村がさらにはやし立てた。

「タツ君、タツ君、タツ君……」

すぐに全員が、手拍子しながらそれに声を合わせた。

「タツ君、タツ君、タツ君……」

それで、琴美は真っ赤になった。

「タツ君、タツ君……一気、一気、一気」

いつの間にか、かけ声がそう変わっていった。

どうやらこの場は、飲まなければおさまりがつかないようだ。

琴美は、しかたなしに紙コップをとった。

志村が一升瓶を持って、それになみなみと酒をついだ。

琴美は覚悟を決め、それを一気にあおった。

「よっ、タツ君」

「男だねー」

「二課のルーキー」

「女にもてて仕事もできる将来のエース」

営業マンの何人かが、さらにはやした。

亜莉沙は、みんなに認められたことがうれしかったのか、とろんとした表情で腕に抱きつくようにしている。

体内に急速に酒がまわっていくのを感じながら、琴美は、内心、ちよつといらだった。

自分を男だと思つてまとわりついてくる亜莉沙に対するいらだちもあつたが、それ以上に、この場の雰囲気にはいらだつのだ。

これでは、一気飲みに応えるような「男らしさ」こそ、営業の条件だと言わんばかりではないか。

と、志村が今度はしみじみした調子で言った。

「いいよな、お前は。こんなにもてて」

その言葉に、琴美は、腕に抱きついたらまま幸せそう

に目を閉じてしまった亜莉沙を見てため息をついた。

「琴美ちゃんがいると思ってきたのに、なんで来てないんだよ」

そう言えば、大沢君はまだ現れないな……。

志村の言葉に、琴美はやっと、拓也のことを思い出した。一課の山木課長は、先刻、「ちよつと残った仕事を片づけてる」と言っていたが、それにしては遅い。

と、その時、「お、やっと、一課の現役エースの登

場だ」と誰かが言った。

見ると、営業カバンを持った柳田が、宴会の輪の中に座るところだった。

「遅くなりました」

「今まで、客先か？」

「ええ、ちよつとトラブルあつて。なんとかおさめましたけどね」

山木の言葉にそう答えたあと、柳田は、そこにいる

メンバーの顔を見渡した。

「あれ、岡崎君は？」

「なに言ってるんだ。お前が仕事言いつけたんだろ。かわいそうに、せつかくの花見だから明日やればいって言ったのに、必死になって数字入力してたぞ」

琴美が見ていると、柳田は、ちよつと意外な顔をしたらあと、なにかを考え込んだ。

「……そうか、あいつのせいか」

志村が、ぼそつとそう言い、そんな柳田をにらみつけた。

「まあ、柳田さん、飲みましようや」

柳田の隣に座った営業マンが、そう言いながら酒をつごうとした。そして、そこで酒瓶がからになってい
るのに気がついた。そのあと、シートの上に転がった
缶ビールや一升瓶を探していたが、まともに入ってい
るものがなくなっているようだ。

「おい、酒がないぞ。なんだよ、今年の新人は。気が
きかねえな。ちゃんとそろえとけよ」

その営業マンが言うのと、ゆかりが中腰になった。

「私、買ってきましようか？」

「え、いいよ。新人に行かせるから」

中村が、それをとめるように言った。

「でも、彼ら、みんな酔いつぶれてますよ」

立ち上がったゆかりは、そう言って、見まわした。

たしかにほとんどの新入社員は、先輩たちに酒を勧められて、まともな状態ではなくなっている。

「だけど、三谷君だけで運んで来るには、重いだろ」
「そうですね。じゃ、大沢君、いつしよに来てくれる？」

ゆかりはそう言って、琴美の顔を見た。

「そうだな、お前、まだ、わりとしつかりしてるみたいだから、いつしよに行つてこい。磯村君は、俺が面

倒見とくから」

「……はい」

「あ、タツ君……」

琴美が立ち上がったせいで、うとうととしていた亜莉沙が目を覚まし、すがりつくようにした。

それを見て、中村が、後ろから引き離すように抱きかかえた。

「亜莉沙ちゃん、いいからいいから、もつと飲もうよ。」

これ終わったら、二次会、カラオケ行こうか？」

「え、カラオケ？　亜莉沙、カラオケだーい好き」

中村の言葉に気を引かれたらしく、亜莉沙はろれつ
のまわらない口振りでそう言い、今度は中村にしなだ
れかかった。

シートのまわりに雑然と散らばった靴の中から、自
分の靴をさがし、琴美は、すでに遊歩道のあたりまで
行っているゆかりを追った。

追いついて並んで歩くと、いきなりゆかりが言った。

「ねえ、このまま、二人で消えちやおうか？」

「……えっ？」

「大沢君、ああいう席、なじめないんでしょ。みんな酔っぱらってるから、いなくなっただって、けつきよく誰も気がつかないわよ」

ゆかりはそう言って琴美の方を見やり、笑いかけた。
きた。

その視線に、琴美はなぜかぞくりとした。

散りかけている夜桜をバックにしたゆかりのその表情が、なんだか妙に艶っぽかったのだ。

と、ゆかりは、琴美の背広の腕に自分の手をまわしてきた。夜闇に濃紺を増した背広の生地に、その指がほの白い。

それを振り払うこともできず、琴美は、さっきの酒に、いよいよ酔いはじめている自分を感じていた。

すべての追い証の数字を打ち込んだあと、拓也は、もう一度実績リストと見比べ、一件ずつ入力ミスがな
いか照合した。

そこで腕時計を見、ちよつと考えてから、さらにも
う一度頭からチェックしなおした。

もう、いまさら花見に駆けつけても、間に合わない
にちがいない。そろそろみんな、二次会へと場所を移

している時刻だろう。

そう考えながら慎重にすすめた二度目のチエツクも、残りあと少しまで来た時だった。

拓也は突然、びくりと体を震わせた。

どこかで足音が聞こえた気がしたのだ。

あわてて振り向き、フロア全体を眺める。しかし、広いフロアには、どこにも人影はなかった。先刻までまだ残業する人のいた法人営業課のあたりも蛍光灯が

消えている。

それで、気のせいだったかと思っただが、拓也は、その光景になんとも言えない不安を感じた。

都会の真ん中で、しかも、セキュリティの行き届いたインテリジェントビルの一室。こんなに怖いと感じるなど、これまでならなかっただろう。

たぶんそれは、今、自分が着ているもののせいにちがいないと拓也は思った。

フロアと、そして窓の外にまで広がる闇の深さにくらべ、肩や腕を包むブラウスはあまりに薄すぎる気がする。スカートから出た脚に張りついたストッキングは、そのオフィスのうそ寒さを、なおさら敏感に肌伝えてくる。

拓也は、その膝頭をさらにぎゅっと閉じ、ふたたびディスプレイに向かった。

すべてのチェックを終え、シートを表示を損益レシ

オのグラフに切り替える。

追い証の入力を反映し、グラフは、先刻とはすっかかり形を変えていた。

全体としては利益が出ているものの、それは、先刻よりずっと少ない額だ。損失が出ている月もあった。

これで、たぶん、まちがいはないだろう。

拓也は、そのグラフを見つめながら、大きくため息をついた。

と、その時だった。

ディスプレイの前を、なにかがひらひらと落ちた。

反射的に目で追うと、デスクの上に落ちたそれは、

桜の花びららしい。

「……？」

と、つづけて、そのデスクの上に食品用のポリパツクが、がさつと音を立てて置かれた。

「えっ？」

入っているのは、三色の花見団子だ。

「お疲れ」

驚いてななめ後ろを見上げると、そこに柳田が立っていた。

先刻の足音は、エレベーターを降りた柳田が、廊下を歩くものだったにちがいない。

「なんだか真剣にやってたから、声かけちやまずいか
と思っただけ。驚かせちやったか？」

「……え、ええ」

拓也は、動悸を抑えるようにして、うなずいた。たしかに今は、グラフに目を凝らしていたせいで、こんなそばまで柳田が近づいていたのさえ気がつかなかったのだ。

「客には、明日の朝、もう一度来るって言ってきたから、花見のあとで戻って、俺が自分で仕上げようと思ってたんだ。助かったよ」

柳田はそう言ったあと、「どれどれ」とディスプレイに向かい、表とグラフを点検した。

拓也は、座っている椅子ごと脇に移動し、そんな柳田を見つめていた。

なんだかどきどきした。また、まちがいを見つければ、「お前、なに考えてるんだ」と怒鳴られそうな気がした。

と、柳田は、ゆっくりとうなずいた。

「うん、いいだろう。ありがとう」

その言葉に、拓也はほっとして、思わず大きく息を吐いた。

柳田は、それを見て、ちよつと笑ってから、「さあ、せつかく持ってきたんだ。食べよ」と言った。

「はい、いただきます」

拓也は、そこでやっと、自分がひどく空腹なのに気づき——よく考えると、昼からなにも食べていないの

だ——、その花見団子のパックを開けた。

花見団子などというものが、これほどおいしいと思
ったことはなかった。

そう感じながら一本を食べ終わったところで、拓也
は、急に柳田の視線が気になった。なんだか——女の
子としては——がつがつ食べていたような気がしたの
だ。

見上げると、柳田は、そんな拓也を穏やかな笑顔で

見ていた。これまでは見たことのない表情だ。

拓也がその視線に照れると、柳田は、今度はふくらんでいた左右の背広のポケットから、なにかを取り出した。

「その団子には合わないかも知れないが、よかったら、こんなものもあるぞ。もし飲めるなら、一杯どうだ」

それは、日本酒のワンカップ瓶だった。

「はい、ごちそうになります」

拓也はそれを受け取り、いったん両手で包むように握った。まだ爛が残っていて、暖かさが掌に伝わった。

と、柳田は、ワンカップ瓶のふたを開けながら、フロアの片側一面に開いた窓際へと歩いていった。

「花見とはいかないが、夜の街でも見ながら飲まないか」

ちらりと振り向きながら言った柳田に、拓也はうなずいた。

しかし、すぐに気づき、「じゃ、酔っぱらう前に、プリントアウトだけしときます」と、ふたたびマウスに手をかけた。

と、柳田は「それはまあ、明日でいいだろう」と言
った。

えっ、明日朝イチで、お客さんのところに直行する
んじゃないの？

拓也はそう思ってから、さつき柳田が言った、今夜、

自分でやるつもりで戻ったというのは、照れ隠しの方便だったのかもしれないと感じた。

柳田はきつと、残業している拓也を気づかって、さしいれを持って戻ってきてくれたのだ。その上で、拓也が今夜やっていたことを無駄にしないようにと、あんな言い方をしたにちがいない。

拓也はそう考えながら席を立ち、窓辺で外を眺めている柳田の後ろ姿に近づいていった。

長身の柳田の横に立つと、ずいぶん身長差がある。

柳田の背広の肩が、拓也の目より高い位置にあるのだ。どうしても、柳田に寄り添っている感覚になる。拓也は、そのことにどぎまぎした。そして、それはまた、先刻感じた怖さと同様、今着ている服のせいでもあった。

そんなことを感じつつ拓也がワンカップ瓶のふたを開けると、それを待っていた柳田が、カップを少しあ

げ乾杯の仕草をした。

「いただきます」

拓也もそれに応え、かすかにカップをあげ、そして、口をつけた。

まだ空腹の胃に、酒が浸み入っていく感じだった。

「……今日は、悪かったな」

ひとくち飲み終わったところで、柳田が言った。

「客に怒鳴られたあと、すぐその場から電話したんで、

あんな言い方になっちまって」

「いえ、あたしがいけないんです。あんな馬鹿みたいなことして」

「いや、忙しさにかまけて、君になにも教えてなかったのは俺の責任だから」

「そんな……」

「あとで、ちよつと反省したんだ。言いすぎたかもしれないってな。それで、謝ろうと思つて花見の席に行

「つたら、君は来てなかった」

「あたしのミスで柳田さんに迷惑かけたって……無駄かも知れないけど、今日中になんとかしたいって、そう思ったんです」

「ああ、俺は、ちよつとうれしかったんだ。どうやら、君を誤解してたんだって気づいてな」

「……えっ？」

柳田の言ったことの意味がストレートにはわから

ず、拓也はその顔を見上げた。

と、柳田は、窓の外の街を見たまま、言葉を継いだ。

「君のこと、そのへんによくいる、言われたことしかない、自分ではなににも考えない女の子だと思つてたから」

「……え、ええ。そういうところ、たしかに、あります」

拓也は、そう言っていた。「女の子」という部分を除けば、そのまま自分のことを言い当てられたような

気がしたのだ。

「いや、そんなことはないだろう」

柳田はそう言ったあと、拓也の方に顔を向けた。

「明日から、いろいろ教えてやるから、俺の仕事、しつかり手伝ってくれよな」

「：：はい」

拓也は、柳田の顔を見ながらうなずいた。

なんだか、うれしかった。

この十日間、女の子のふりをして仕事をしているという緊張と興奮はあった。でも、仕事や会社そのものにさして興味を持たたわけではない。しかし、明日からは、そこに目的ができた気がした。自分は、この人のために仕事をしていけばいいのだと素直に思えた。

柳田も、につこり笑ってうなずいたあと、ふたたび、窓の外に目を戻した。

「この街も、夜、こうして見ると、けっこうきれいな

もんだ」

柳田の言葉に、拓也も、外に目を向けた。

大きな窓からは、街の様子がよく見渡せた。四階だから、夜景を見下ろすという感じではなかったが、行き交う車のライトやショーウインドウの灯り、電光看板、そして、ビルのところどころにまだ残る四角い窓の灯り、そんな微妙に色合いのちがうさまざまな光が、道路に沿って、ずっと彼方までつづいていた。

「昼間は、欲の皮の突っ張った人間が、ごちやごちやうごめいてるっていうのにな」

その言葉は、商品先物の営業マンとしての柳田の実感なのだろうと、拓也は感じた。

「……ま、俺もその一人だから、偉そうなことは言えんが」

柳田は、そうつけ加え、ちよつと自嘲的に笑いながら、また拓也の方を向いた。

それにどう答えたらいいかわからず、拓也が複雑な笑顔を返すと、柳田は、「そろそろ帰らんとな」と言った。

拓也がうなずき、オフィスの方を振り向くと、柳田は促すように、その肩に軽く手を添えた。

「送ってくよ」

昼間、山木に触られたときは、あれほどいやだと思つたのに、拓也は、そんな柳田の行為を素直に受け入

れていた。

酒がまわったせいか、なんだか顔が火照った。

「三年前、私が入社した頃は、まだ、相場師っていうか、猛者って感じの人も二三人残ってたのよ。でも、さすがに、そういう感覚じゃもうやっていけなくてね。辞めたり、地方に飛ばされたりして、今は、スマートな、臭みのない営業マンが多くなったわ」

バーカウンターに肘をつき、手に持ったカクテルグラスを目の前で揺らしながら、ゆかりは言った。

「ええ。僕も、もっと荒っぽい感じなのかなと思ってたんで、みんな優しく、ちよつと意外でした」

やはり片肘をついた琴美は、カウンターチェアをゆかりの方に回転させながら答えた。

ゆかりに誘われこのバーに入ってから、すでに一時間以上はたっている。

「でもね、やっぱり、業界の臭みっていうのはなかなか抜けないものね。あんなふうには、宴会ともなると、なんか体育会系っぽいでしょ。『一気一気』って」

「ゆかりさんは、それが気にいらないわけですか？」

「うん、もともと、私自身がマッチョな男って好きじゃないし、仕事の上でも、人事課ただ一人の女子社員として、そういう変な男臭さみたいなもの、払拭するのが課題だと思ってるから」

「……へえ」

「商品ファンドとかも出てきて、この業界でも他の会社には女子営業がいるの。でも、うちはまだ、男ばかりでしょ。私、女の子の営業採用をずっと提案してるのよ。でも、毎年、『まだ時期尚早だ』って却下されてるの」

「どうしてですか？」

琴美は、つい二ヶ月前まで自分が持っていたのと同

じ問題意識を持っている人間が、企業の中にもいるのだと思ひながらきいた。

「上が言ういちばんの理由は、女じやお客さんが信用しないだろうってこと。先物は、大金扱うし、投機性は強いし、『私にすべてお任せください』っていう男気みたいなものがないとだめだっっていうの」

「でも、外務員の仕事は、顧客の委託を受けて売買の取り次ぎをすることで、一任勘定はもちろん、顧客を

誘導したりしてもいけないって、毎日、研修でくだい
くらいに聞かされてますよ」

ゆかりが言いたいことはじゆうぶんわかっていなが
ら、琴美は、あえて反論してみた。

ゆかりにもそれが伝わったらしく、ちよつと笑いな
がら答えた。

「ふふ、でも、現実にそうもいかないのは、わかって
るでしょ。よほど相場に長けたお客さんは別として、

ふつうのお客さんは、けつきよく、その外務員の言葉で売り買い決めるしかないわけよね。外務員も、『ぜったい儲かります』とは言わないまでも、『私を信用してください』くらいは言うわけよ。そんな時、女だと、『こんな大金、女なんかに預けられるか』ってお客さんは思うだろうって」

「まあ、そういうお客さんもいるだろうけど」

「うん、まだ多いとは思わ。けど、金融自由化で、

保険のおばさんでさえデリバティブがらみの商品扱う世の中でしょ。女の営業だから信用できないってことはないと思うんだけどね」

「そうですよ」

琴美は思わず力を込めてうなずいていた。

と、ゆかりは、そんな琴美を見て「ふふ」と笑った。

「え？　：：なんですか？」

「うん。大沢君って、やっぱりそういう人なんだなと

思っ
て」

「……そういう人って？」

「入社研修の時から感じてたんだけど、なんだか、女の立場がすごくよくわかってるところがあるのよね」

「そ、そうですか？」

琴美は、あわててとぼけた。昼間、亜莉沙から同じようなことを言われた。油断するとそんなところが出てしまうのだろう。

「そうよ。研修の時の発言聞いててもそう思ったし、それに、磯村さんのことでも」

「いえ、あれは……」

「わかってるわよ、大沢君にその気がないのは。でも、大沢君、磯村さんの気持ち傷つけないように、ずいぶん苦勞してるじゃない。そのために、無理して一気飲みまでしちやって」

「でも、あの場はああでもしないとおさまりつかない

でしょ」

琴美が言うと、ゆかりは「そうね」と微笑んで、もてあそんでいたカクテルを口にしました。そして、そのあと、グラスをカウンターに置き、琴美の背広の腕に少し体を預けるようにした。

「ねえ、これからも、ときどき誘っていい？」

「……え？」

「こんなこと話して、わかってくれそうな男の人って、

うちの社には他にいないから」

「……え、ええ」

たしかに、ゆかりが思っているようなことは、平安トレードの男性社員にはなかなか通じないだろうなと感じ、琴美はうなずいた。

「でも、彼女に悪いかな？」

ゆかりは、さらに顔を寄せるようにして言った。

琴美は、またどぎまぎしながら、答えた。

「いえ、磯村さんだったら、べつに……ぼ、僕は……」
「そうじゃないわよ。私が言ってるのは、岡崎さんのこと」

「え？」

「知り合いなんでしょ、前から。家も近所みたいだし」
「い、いえ……」

「べつに隠さなくたっていいわよ。この前、岡崎さんにきいた時もあるわって否定してたけど、私見ちゃった

んだから」

ゆかりの思わぬ言葉に、琴美は緊張した。

ゆかりはいつたい、なにを見たというのだ……？

「入社試験、いっしよに来たでしょ。私、あの時、何気なく窓から見てたの。ちよつといい感じのリクルー
トスーツの男の子と女の子が、いっしよに話しながら
歩いてきて、別々にうちのビルに入った」

「……あ、ああ、そういうことですか」

内心ほつとして、琴美は、以前、志村に言ったのと同じ言い訳をした。

「じつは、前に、他の会社を受けたとき、顔を知ってたんです。で、あの日、たまたま駅でいっしよになって、こんな近所だったのかって驚いて、その上、同じ会社を受けるっていうし」

「それで、いっしよに来たってこと？」

「ええ。でも、二人そろって試験会場に行くのも、な

んかへんじじゃないですか。それで、べつべつに入ろう
つていうことにしたんです」

「それだけ？ そのわりには、なんだか仲よさそうに
見えたけど」

「ええ、もちろん、それ以上のことはありませんよ。
やだなあ」

ゆかりが、なにをどこまで疑っているのかわからな
い感じもして、琴美は必死に平静を取り繕った。

と、ゆかりは、「そう」と微笑み、さらに、琴美にもたれかかるようにした。

「じゃ、私、彼女のこと、気にしなくてもいいのね」
カウンターの上のゆかりの手が、琴美の腕にそつと重ねられた。

「……え、ええ……はい」

拓也とのことをへんに勘ぐらせないためにも、琴美には、そう答えるしかなかった。

「あ、そのこのマンションです」

どうしようか迷ったが、拓也は、琴美のマンションの前でタクシーを降りることにした。会社で調べれば、柳田にも「岡崎琴美」の住所はわかるわけだから、裏道の自分のアパートまで行ってもらうわけにはいかな
いだろう。

「運転手さん、ここで一人降りるから」

「はい」

車を停車させたタクシ－の運転手が、柳田の言葉にドアを開けた。

「ありがとうございます」

拓也がそう言って降りかけたところで、柳田が言った。

「遅くなるようなときは、これからもなるべく、俺が送るよ。この辺、夜は人通り少なそうだしな」

「いえ、そんな……」

降り立った拓也があわてて振り向くと、座席の柳田は、拓也がそれ以上言う前に「じゃ、またあしたな」と軽く手を挙げた。

「は、はい。おやすみなさい」

ドアが閉まり発進するタクシーを、拓也はちよつとの間、見送っていた。

困ったな……。

柳田の言葉に、困惑していた。

自分——そして琴美——の私生活の場に、会社の間を近づけるのは、やはりよくないだろう。

しかし、そう思う一方、その柳田の言葉を、拓也は、うれしいことのように感じていた。

走り去るタクシーが、かなり先にある次の信号で停車するまで見送った拓也は、それでも用心のために、いったん琴美のマンションのエントランスに入るふり

をした。車内で柳田が振り返っているような気がしたからだ。

信号が変わり、タクシーがふたたび走り出したのを見計らって、拓也はやっと、歩道に戻った。

自分のアパートへと歩きだしながら目をやると、マンション一階の吹き抜けになった廊下越しに琴美の部屋のドアが見えた。横のキッチンの小窓に、明かりはない。まだ、帰ってはいないようだ。

きつと、二次会に行ってるんだろうな。

拓也はちらりとそう思ったが、すぐに、今別れたばかりの柳田の顔が頭に浮かび、それ以上は、琴美のことを考えることはなかった。

お互いが知らない場所で、拓也は「琴美」としての、琴美は「拓也」としての新しい日常が動き出していた。まるで自然なことのように。

しかし、自分たちがしているのは、きわめて不自然なことなのだ、拓也があらためて気づかされたのは、それから二週間経った初めての給料日のことだった。

「あの、これを……」

「試着なさらなくて、よろしいですか？」

拓也が差し出したワンピースを受け取りながら、女子店員がきいてきた。

「……ええ」

拓也は、うつむいて、小さく答えた。

はじめてレデイスの服を買ったのだ。女装には多少慣れたというものの、やはり照れる。

この日、拓也は、会社の帰りに、いつもの駅のひとつ手前で電車を降りて、そこにある大手のショッピングセンターに寄った。このショッピングセンターには、インショップ・ブティックのたくさん入ったフロアが

ある。とりあえず、慣れない拓也が、初サラリーで女の服を買うには手頃だった。

お金を払い、服の入った紙袋を受け取って、そのフロアを歩いていった拓也は、今度はバッグ・ショップの前で足を止めた。

自分が使うバッグを買おうと思ったのではない。バッグ類は、琴美の持っていた物で、今のところは足りている。

そうではなく、母へのプレゼントを買おうかと考えたのだ。父や兄とちがい、自分の就職を喜んでくれ、お金までくれた母には、初サラリーの記念になにか贈りたい。バッグなら、ちようどいいかも知れないという気がした。

それで拓也は、その店に入り、壁に吊されたバッグを見ていった。母親が外出時にするファッションを思い出し、それに似合いそうなバッグをさがした。以前

なら、自分の中にそんなセンスはなかつただろうが、この一ヶ月女として振る舞ってきたおかげで、選択眼も、なんとなくできている感じだ。

そんなふうにはバッグを見ていた拓也は、女ばかりの客の中に、一人だけ背広姿がいるのに気がついた。

「……あれ？」

琴美だった。

「ああ」

琴美もこちらに気づいたらしく、近づいてきながら言った。

「お母さんに、なにかプレゼントしようと思つて」
琴美も同じことを考えていたようだ。

「岡崎さん、ほんとにそれでいいの？」

次の駅まで距離がさほどないことから、歩いて帰ろうということになり、人通りの少ない線路沿いの道を

並んで歩きながら、拓也はきいた。

「自分の働いた分の給料が、自分のものにならないんだよ」

「うん、最初からそのつもりだったよ」

琴美は、わかりきったことというように答えた。

じつは、拓也は先刻、ショッピングセンターのATMで「大沢拓也」名義のカードを使ってお金をおろし、はじめてそのことに気がついたのだ。

「だって、契約書にもそう書いてあるじゃない。あれは、そういう意味なんだよ」

琴美に言われ、拓也は例の「契約書」の文言を思い出した。その「財産・権利の共有」という条項の二項目には、たしかにこう書かれていた。

「ただし、前項の『財産』には、甲乙が所有する現金及び預金口座、有価証券等は含まないものとする」――
預金口座は、それぞれ名義人のもの。つまり、拓也

の働いた分の給与は琴美の口座に、琴美の給与は拓也の口座に振り込まれ、それぞれ名義人が受け取るということだ。

「でも、そんなの不公平でしょ。初任給は総合職と一般職で一万円もちがわないけど、営業は、研修終われば歩合給だって上乘せされるんだし」

「売ればね」

「柳田さんなんて、平均月収百万円以上あるらしいよ。」

そりゃ、いきなり柳田さんみたいにはなれないとしても、岡崎さんがいくら営業がんばっても、その分のお金、僕の方に振り込まれちゃうことになるわけでしょ」

拓也は、ちよつとむきになって言った。明らかに自分の方が得になる話なのだが、それではフェアではないと思えたのだ。

「だって、もともと、私の方が押しつけたことだし」

「それは……、そうだけど……」

「私はね、大きな収入を得ようと思って、仕事探してたわけじゃないの。私がほしかったのは、金融商品やデリバティブの現場の営業ノウハウ。だから、今のところ、お金はどっちでもいいのよ」

「だけど、先物の営業なんて、歩合があるから、みんながんばってるわけでしょ」

「そりゃ、将来的には、この世界で大きく稼ぎたいと思ってるよ。でも、それは、平安トレードでって意味

じゃない。ノウハウ身につけたら独立して、ファイナシヤル・プランナーとか、投資コンサルタントとか、やりたいと思ってるの。だいいち、大沢君、こんなこと、いつまでもつづけていけると思ってる？」

「……え、それは……」

拓也は言葉につまった。今のところは、OLを演じることには精いっぱい、そんなに先のことまで考えているわけではない。

「こんな無理なこと、五年も十年もつづけられるわけがないと思うの。いつかはやめることになるでしょ。で、私の方は、今言ったような人生設計があってやってることだけど、大沢君の方は、そういうわけじゃない。どう考えても、大沢君のがリスクは大きいじゃない。だから、その保障として、私が余分に稼いだ分は大沢君のものにしていいかなと思ったわけ。いわば、この取引のために、私が入れる証拠金ってとこね」

「岡崎さん、そんなことまで考えてたんだ……」

一見無謀な思いつきのように見えて、フェアネスと
いうことでは、琴美の方がずっと深く考えていたこと
に気づかされ、あの「契約書」からそんなことも読み
とれなかった自分が、拓也は恥ずかしいような気がし
た。

「でも、なんだか申し訳ないような……」

「だから、私が営業やって、売ればって話よ。ま、

取引相手に損はさせないつもりだけどね。それにね、遊びとか余暇の部分を除けば、毎日の生活にいちばんお金がかかるの、一人暮らしのOLだっていうの知ってる？」

「そうなの？」

「だって、服とか化粧品とか、余分なものがいろいろあるわけじゃない。今日だって、服買ったみたいだけど、給料の三分の一くらいは飛んじやったんじゃない

い？」

拓也が持っているブティックの紙袋に目をやり、琴美は言った。

「三分の一まではいかないけど、けっこう高かった」
拓也が答えると、琴美は、その袋に手を伸ばした。

「どんなの買ったの。見せてね」

ちよつと恥ずかしい気がしたが、拓也がうなずくと、琴美はさっそくその袋を受け取り、歩きながら中をの

ぞいた。

「……へえ。いいじゃない。大沢君に似合いそう。でも、どうして自分で服を買おうって気になったの？」

たしかに、私の手持ちは学生みたいなのばかりで、数が足りない気はするけど」

「う、うん。ちよつとね……」

拓也は、言葉を濁した。

まさか、柳田から「今度、いっしょに食事に行こう」

と誘われたからだなどとは言えないだろう。

第6話 レバレッジ

パフをはたき、口紅を塗ったところで、拓也は鏡を見つめたまま、口をとがらせた。

どうも、出来に納得がいかないのだ。

女装するようになった当初、化粧は琴美にやってもらっていた。しかし、実際に会社勤めが始まると、毎朝、琴美の部屋でそんなことをしているのは、どちらにとっても面倒だということになり、手順を教えるもらって、拓也自身でするようになった。同時に、琴美の部屋にあったメイクアップミラーも拓也の部屋に移った。

自分ではじめた頃こそ、おぼつかない手つきで――

それに、まだ気恥ずかしさも有り——やたら時間がかかったが、一・二週間後にはもう慣れて、十分もかけずにできるようになっていた。

すると今度は、その、自分のしているメイクが気に入らなくなった。

会社の先輩や、通勤途中で見かけるOLたちは、もつと手の込んだことをしているようだ。それに比べると、自分のメイクは、素朴というか、いかにも幼稚な

気がした。もし彼女たちと同じようにできれば、自分の顔はもっと魅力的になるように思えた。

そのせいで、入社以来三ヶ月近くたった最近では、逆にメイクの時間が伸びている。あれこれやってみて、けっきょく思ったようにならず、やり直したりしていると三十分近くも鏡の前に座っていることになるのだった。

琴美自身も言っていたことだが、彼女はもともと、

メイクに詳しいようなタイプではない。琴美から教わったやり方というのは、ほんとうに基本的な手法でしかないのだろう。街で見かける女性のようにするには、もつといろいろなテクニクがあるにちがいない。化粧品アイテムも、なんだか決定的に足りない気がする。

そのあたりのことを、先輩の女子社員や亜莉沙にきいてみようかとも思うのだが、「女の子のくせにそん

なことも知らないの？」などと言われそうで、口に出
しづらい。

それで、今日もまた、その仕上がり気が気に入らない
まま、拓也はメーキャップミラーの置かれた机を立つ
た。

そのあと、ダンスの鏡の前で、着ている服やバッグ
を確認する。

髪もずいぶん伸びて、ミドルショートという感じに

なっているが、毛先がばらばらだ。そろそろ、美容院へ行った方がいいのかもしれない。

しかし、その時は、男の服で行くのか、女の服で行くのか……？

こんな暮らしをつづけていくなら、まだまだ解決しなければいけないことは、たくさんある気がした。

鏡を見ながら、またそんなことを考えていたので、もう出勤ぎりぎりの時間になっていた。それに気づい

た拓也は、部屋を出ながら、窓の方をちらりと見た。

琴美は、たぶん一時間以上前に出ているはずだ。拓也のメイクをしなくてよくなって以来、ずっとそうだ。

研修の時間が始まる前に、ロイターや日経のデイーリング・サーバーとつながった会社のコンピューターで、海外市場の値動きを調べておきたいのだと言っていた。

「おはよう。今日も早いのね」

ロンドンの金地金の終値を確認したあと、シカゴ市場へと画面を切り替えたところで声をかけられた。

椅子をまわして振り向くと、そこにゆかりが立っていた。

「あ、おはようございます」

「ふふ、こんなに勉強熱心な新入社員は柳田さん以来だって、部長や課長の間でも評判よ」

人事課は総務などと同じ六階にあるのだが、早く出社した時、ゆかりはいつもこの営業フロアに顔を出す。琴美が毎朝、ここでデイスプレイに向かっていることを知っているからだ。

「勉強熱心っていても、半分は趣味みたいなもんですから。それに、こんなことに熱心なことと、実際に売れるかどうかは、たぶん、べつでしょ」

「大沢君なら大丈夫よ。研修の講師の評価も、いつも

最高点だし」

「そんなこと、ばらしちやっついていいんですか？」

「あ、そうね、業務上の秘密ね」

ゆかりはそう言って笑ったあと、「へえ、海外の金融先物とかもチェックしてるのね」と言った。琴美が、シカゴの米国債先物のチャートを開いたからだろう。

「ええ、いちおう、証券も為替も、できるだけ多くの材料を頭に入れておきたいと思って」

「もうベテランの域ね。専攻、経営だったはずなのに、デリバティブの知識は豊富だし。もしかしたら、岡崎さんとそういうこと話すの？」

「え、どうしてですか？」

「だって、彼女、大学で金融工学とかやってたんでしょ」

新入社員の履歴書も身上書も目を通していているから、ゆかりは、琴美の専攻のこともよくわかっているのだ。

あまり知識を表に出すのはよくないかもしれないと、
琴美は思った。

「……い、いえ。そういう話は……」

「そうよね。彼女、そういうこと、あんまり熱心に勉強してきたタイプには見えないし。柳田さんがていねいに教えてくれてるから、営業アシスタントとしての成長は速いようだけど」

と、そこまで言ったところで、フロアの入口の方に

目をやったゆかりは、ちよつと焦つたような表情で話を終えた。

「……じゃ、がんばってね」

あわてたのは、どうやら、そこに、入社してきた亜莉沙がいたかららしい。人事課員として、無駄な「摩擦」は起こしたくないということなのだろう。

と、案の定、亜莉沙は、立ち去るゆかりをどこか剣のある視線で見送った。

しかし、そのあと、タイムカードを押すと、琴美の方に「おはよう」と声をかけただけで、すぐに更衣室に向かって出て行ってしまった。

この頃は、当初のように露骨にまとわりついてくることはないから助かるのだが、でも、そのぶん、どこか元気がないのが気になる。

「あ、おはようございます」

一階のエレベーターホールで柳田といっしょになり、拓也の顔が思わず輝いた。

「おはよ」

軽く手をあげるようにして柳田が近づいてきたところ、ちょうどエレベーターのドアが開き、柳田と拓也は、そこに待っていたサラリーマンやOLたちとともに乗り込んだ。

平安トレードは四階から六階までで、他の階には別

の会社が入っている。朝のこの時間帯は、それらの会社も始業時間が重なって、エレベーターはいつも満員だ。

「今日は、午前中、北村総業の社長のところでしたよね」

他の人々に押され、拓也が身を寄せるようにして言うのと、柳田は、そんな拓也をかばうように立ち、「ああ」とうなずいた。

「パラジウムと金の一ヶ月分のチャート、昨日のうちに打ち出して、デスクの上に置いておきました」

「あ、ありがとう。今、そう言おうと思ってたんだ」
ちよつと驚いたように、そして、満足そうにまたうなずいた柳田の顔を見上げ、拓也は、心が浮き立つ気がした。

と、柳田が言った。

「そうそう、俺、言うの忘れてたんだけどさ。今月の

全国営業推進会議、今夜、広島でやるっていうんだ」

「広島で……ですか？」

「うん、いつもみたいに東京か名古屋で集まればいいのに、せっかく新しい営業所ができたんだから、一度くらいは、広島でってさ。そのせいで、こっちは丸一日つぶれるっていうのに、まったく、なに考えてんだか」

「……」

東京本社の営業推進キャンペーン担当者である柳田は、午後から広島に行くということだろう。ということとは、帰りは明日になるのだろうか。

柳田の予定を頭の中で確かめながら、拓也は、今度は、気持ちが沈んでいく気がした。たしか明日、柳田は午後から夜までびっしりとアポが入っていたはずだ。明日は金曜だから、広島から帰った柳田が客先に直行するとしたら、来週まで顔を合わせないということ

とになる。

と、そこで、エレベーターが四階につき、話のつづきは廊下を歩きながらになった。

「でさ、午前中に、今日の新幹線のチケットとつといてほしいんだ。昼に一度、社に寄って受け取るから」

「はい、二時台くらいのでいいですか？」

「うん、そんなもんだろうな。広島だと、総務に回数券のストックないと思うから、経理に仮出金してもら

って、一階の旅行代理店で買っというよ」

「はい。帰りの分の指定は？」

「今日中に帰れるかどうかわからんし、とりあえず乗車券のみで」

「はい、わかりました」

営業のフロアに入り、タイムカードを押しながら拓也はうなずいた。

そして、更衣室に行きかけたとき、また、柳田が「琴

美ちゃん」と呼び止めた。

この頃では、柳田も、「岡崎君」でなく「琴美ちゃん」と呼ぶようになった。柳田にそう呼ばれると、他の営業マンに言われるよりくすぐったい気がする。

「はい」

振り向いた拓也に近寄り、柳田は「あのさ……」と、ちよつと口ごもった。

長身の柳田がいつもよりずっと顔を近づけてきたせ

いで、拓也はまるで、真上を見上げるような体勢になつた。

「あさつての土曜日、時間あいてないかな？」

「……え？」

「もしよかったら、会って、食事でもしないか？」

「……え、ええ。でも、食事なら、いつもごちそうになつてます」

あの、初めて残業した花見の日以来、柳田が早く仕

事の終わった日——そんなことはたまにしかなかったが——は、誘われて何度かいっしょに食事をしていた。「いや、いつも、俺が忙しくて、じっくり話す時間もないしさ。休みの日なら、ゆっくり話せると思って。予定あるなら、いいけど」

「……い、いえ。だいじよぶです」

拓也は思わず言っていた。先刻感じていた「月曜まで柳田に会えないのだ」という、どこか張りの失せる

ような気持ちだが、そう言わせていた。

「そう。じゃあ、土曜の朝、連絡するよ。電話番号教えて」

柳田にそう言われ、そこで拓也は躊躇した。

休日に誘われたということとは、仕事とは関係のない、プライベートの誘いということだ。つまり、デートの誘いというわけだろう。そんなことに応じてしまって、いいのだろうか？

それに、電話についても困った。自分の部屋の電話では、実家や大学時代の友人からかかってくることもある。女の声で出るわけにはいかない。かといって、琴美の部屋の電話を教えれば、もっとおかしなことになる。

そう思って拓也が迷っていると、柳田が、冗談っぽくではあったが、ちよつと心外だという感じできいてきた。

「……あれ？　俺のこと、警戒してる？」

「い……いえ、そんな……。じゃ、携帯の番号書いて、チケットといっしょに置いておきます」

拓也の言葉に、柳田は安心したように笑ってうなずき、オフィスへと入って行った。

その後ろ姿を見つめながら、拓也はさらに困惑した。携帯電話なら、仕事を始めてから買い替えていたから、まだ、あまり人に番号を知らせていない。だから

いいと思っただが、そんなやり方では、いよいよ秘密めかした思わせぶりなものになるではないか。まるで：：恋人同士のように。

朝の営業ミーティングが終わるとすぐに出かけた柳田を見送った後、拓也は、言われたとおり、経理で出金伝票を書き、お金を受け取って一階に降りた。

このビルの一階は、エレベーターホールを除けば、

ほとんどの部分を大手の旅行代理店の店舗が占めている。通りに向かってガラス張りになり、そこに自動ドアの入口があるのだが、このエレベーターホール側にも小さなガラスドアがついていた。

拓也は、そこを通過して、店内に入った。

ウィークデイの午前中では、観光旅行の相談に来るような客もいないのだろう。店の中は、なんとなくのんびりした空気が漂っていた。カウンターの中の社員

たちも、デスクで雑談しながら、書類の整理などをして
いる。

拓也が、手近なカウンターに近づくと、それに気づ
いた男性社員が目配せし、その向かいでこちらに背を
向けて座っていた制服の女子社員が席を立った。

「いらっしやいませ」

「……！」

その瞬間、拓也の頭の中は真っ白になった。

そこに立ち、呆然と、その女性の顔を見つめてしまった。

……実香!?

なにより先に、まず名前が浮かんだ。

他人のそら似にしては似すぎている。ずいぶん大人びた感じにはなっているが、たぶん本人にちがいない。でも、どうしてこんなところに……?

筋道だった状況判断ができないまま、そんな疑問が

心に湧いた。

「……あの、なにか？」

言葉を失った拓也の顔を不審そうに見返し、実香——
——としか思えないその女性——が言った。どうやら、
こちらの正体はわかっていないようだ。

それに気づいた拓也は、やっと、幾分かは自分を取り返し、必死に動揺を抑えて答えた。

「……え、ええ。ひ、広島までの新幹線のチケットを、

お、往復で……」

いつも以上に無理して女の声を出そうとしているぶん、言葉がうわずった。

「はい、指定はどういたしましょう？」

「ええ、その、往きは今日の二時台の『のぞみ』か『ひかり』で。帰りは、乗車券だけで……」

「かしこまりました。少々お待ちください」

実香は、脇に置かれたコンピューター端末の方を向

きながら言った。それで視線がはずれ、拓也は、今度は盗み見るようにその顔をうかがった。

荒木実香。拓也の高校の同級生だ。——というより、高校時代の「彼女」だったのだ。

実家のある岐阜の県立高校で、二年生から三年生にかけて、一年半ほどつき合っていた。本人同士も、まわりの友達も、「カップル」として認める間柄だった。

実香がディスプレイを見ながらキーボードを打って

いる間、拓也は落ち着かず、ちらちらとその姿を見ていた。

「出資金額の何倍ものもうけや損失が出る。このレバレッジ、つまり『てこの作用』こそが、商品先物やデリバティブ商品の特徴であるわけです……」

講師が変わるごとに、同じようなこと——しかも、琴美にとってはわかりきった話——を何度も聞かされ

る。琴美は、講師に見えないように下を向き、あくびした。こちらは、早朝から出社しているのだ。と、隣に座っていた志村が顔を寄せてきた。

「今日、昼飯、なに食う？」

研修が始まった当初こそ、やたらにはりきった様子のスタンドプレイをしていた志村も、この頃では、いい加減飽きてきているのだろう。

「なに食うったって、お金、そんなにあるわけじゃない

いだろ」

琴美が言うと、志村は、「そうだな、また牛井か」とつぶやいた。

社へ戻ったあとも、拓也は呆然としていた。

実香が地元の短大を出た後、大手の旅行代理店に就職したといううわさは、大学時代に帰郷したとき、たしかに誰かからきいた覚えがある。でも、あの時の話

では、地元の営業所か名古屋支社か、いずれにしても実家から通っているというようなことだった。それがなぜ、東京の、よりにもよって、このビルの支店などにいるのだろうか。

拓也が東京の大学に入ったことで、実香との関係はいつしか自然消滅というような形で途絶えてしまった。デートすればキスくらいはしたが、肉体関係にまでは至らない幼い恋愛だったから、お互いが新しい世

界に触れることで、自然に気持ちちが離れていったのだ。

拓也は——それに、たぶん実香も——、なんとなくうやむやにしてしまったのが気まずくて、それ以来、一度も会っていないかった。だから、今日は、四年三ヶ月ぶりの再会ということになる。

しかし、まさかこんな格好で再会するとは思ってもしなかつた。幸い、実香の方は、拓也のことに気づいていなかつたようだからよかつたが、同じビルにいる

以上、また顔を合わせることもあるだろう。

困ったなあ……。

拓也は、仕事も手に着かず、そんなことを考えていた。

「琴美ちゃん、昼行かない？」

同じ課の先輩女子社員に声をかけられ、拓也はやつと、昼休みになっっていることに気がついたほどだ。

「あ、はい」

デスクを立つと、柳田のデスクの上に置いたチケツトが目に入った。

柳田さんは、昼休み中に出先から戻るかもしれない。そう思ったところで、やっと朝の約束を思い出した。

「あ、ちよつと待ってください。すぐ行きますから」
拓也は、あわててメモ用紙に携帯の番号を書き、チケツトのケースに挟み込んだ。

「お前、彼女から、なんかきいてないか、俺のこと」

「え？　彼女って？」

牛井屋のカウンターで並んで食事しながら、志村にきかれ、琴美は箸をとめてその顔を見た。

「琴美ちゃんさ。お前、同じフロアだし、なんか、通勤の駅もいっしょだっていうじゃないか」

「う、うん。そうだけど、朝とか帰りとか、時間ちがうから、いっしょにならないんだ」

琴美は、ふたたび牛丼を口に運びながら、とぼけた。
家が近所だというような話は、いくら本人どうしが
隠していても、いつの間にか広まってしまいうものらし
い。

「でも、お前のことって、なんだ？」

「ああ、つまりな。なんつったって、もう四ヶ月だぜ」
「え、なに？」

「いや、琴美ちゃんと初めて会ってからさ。あれは、

入社試験の日だからな」

「それが？」

「それ以来、ずっと誘ってるのに、一度ものつてこないんだぜ。俺、嫌われてるのかな？」

「……さあ」

琴美はまたとぼけながらも、ちよつとあきれた。それだけ拒否されていれば、避けられているのは、もつと早くわかりそうなものだろう。

「彼女、俺のこと、なんか言っただけでなかったか」

「だから、なにもきいてないって」

琴美が言うと、志村は「そうか」とつぶやき、「彼氏いるのかな」と独り言のように言って、みそ汁をすすった。

「……だけど、遊んできたタイプには見えないよな。」

もしかして、まだバージンだったりして。お前、どう思う？」

男というのは、好きな女の子に対して、そんなふうにあれこれ想像するものなのかと思いつながら、しかたなく、琴美は答えた。

「知らないよ、そんなこと。彼女に直接、きいてみたら」

もちろん、拓也に「男経験」がないことは、琴美がいちばんよく知っているのだが。

「それがきけるような関係に、早くなりたいよな」

つくづく懲りないやつだと、琴美は思った。

「ちよっと、トイレ寄ってくから」

「別に、トイレだったら上行ってからでも……」

一階のエレベーターホールで、志村は不思議そうに
したが、琴美はそれを無視するように軽く手をあげ、
エレベーターの裏側にあるトイレに向かった。

こんな格好をしているから、使うのは男子トイレだ

としても、もちろん、立ったまま小用をたすことでは
きない。いつもは、課のフロアにあるトイレに行くの
だが、そのたびに個室に入っているのを誰かに気づか
れたら、不審がられるような気がした。だから、外に
出た機会に、別のトイレを使うのだ。この一階のトイ
レは、ふだん、あまり人が使わないから、うってつけ
だった。

それに、じつは昨日から、さらに上のトイレを使い

にくい事情があった。

生理が始まっているのだ。

会社の男子トイレのゴミ箱に、使用済みのナプキン
を捨てるわけにはいかないだろう。

：：：だけど、私、軽い方でよかったな。

琴美はそう思いながら、男子トイレの個室で、背広
の内ポケットに隠し持っていた新品のナプキンと取り
替えた。使用済みのものをティッシュで何重にもくる

み、人がいないか警戒しながら個室を出た琴美は、手洗いのシンクのそばに置かれたゴミ箱の奥深く、それを捨てた。

そんな、秘密のことをしていたせいもあるだろう。

手を洗い、トイレを出ようとしたところで、聞き覚えのある声を耳にして、琴美は、思わず足を止めた。

「そんなこと言われても、私……」

亜莉沙の声だった。

いつもとはちがう、トーンを落とした話し方だったが、奥が行き止まりになったトイレ前の通路には、声が届いた。

「だからさ、べつに、君さえ黙っていれば、誰も気づかないだろ」

相手は中村課長のようだ。こちらも、秘密めかしたぼそぼそとした話し声だ。

思わずトイレの入口の壁に身を寄せ、隠れるように

しながらそつとのぞくと、二人は、通路の脇に引っ込む形に作られた自動販売機や公衆電話の置かれたスペースで話していた。

「こんなこと、私、もう……。許してください」

「許すも許さないも、あの花見の夜、俺をその気にさせたのは、亜莉沙の方なんだからな。二次会の後、俺に抱きついて、ホテル行こうって言ったのは、誰だった？」

「……だから、あの時は、私、どうにかしてたんです。酔ってたし……」

「俺だって、こんなことにはなりたくなかったさ。女の子子供だっているんだから。でも、あの夜から、亜莉沙の体が忘れられなくなっただ」

「そんなこと……」

「いいじゃないか、もっと気楽に考えろよ。君って、そういうタイプだと思ってたけどな」

亜莉沙は何も答えなかつたが、ため息をつくような息づかいだけは伝わってきた。

「へえ、そう。ま、俺はいいんだぜ、会社にばれたつて。べつに会社に迷惑かけてるわけじゃないし、ちよつとした火遊びつてことですむんだろうから。むしろ、困るのは、そっちの方だろ。まだ新入社員なんだし、代わりはいくらでもいるって、会社は思う。それに：

：俺自身が、うっかり口すべらすかもわからんしな。

たとえば、大沢誘って飲みに行つたときとかにさ」

それは、あきらかに脅しだった。亜莉沙が言うことをきかないのなら、会社の人間にばらすと言っているのだ。しかも、その脅しのネタとして「大沢」、つまり琴美のことが持ち出されているのだ。

琴美は、その場に隠れたまま、拳を握りしめていた。

上司である中村のことが許せないと思つた。

「お、もう時間だな。そんな暗い顔するなよ」

何も言葉を返せなくなっているらしい亜莉沙に向かって、また中村が言った。

「会社終わったら、いつものホテルへ行って、先にチエックインしててくれよ。携帯でルームナンバー聞きましょう」

中村は、そう言い残し、エレベーターホールの方へ向かったようだ。

琴美は、そこで出ていこうかと思ったが、亜莉沙は

まだその場に残っているようだったので、躊躇した。

中村が乗ったらしいエレベーターのドアが閉まる音を待ってから、亜莉沙の足音はやっと去っていった。

いっしよにフロアに帰るのはまずいと思ったのか、それとも、そんな少しの時間も、中村といっしよにいたくはないのだろう。

そして、琴美自身も、その場に身を隠したまま、もうひとエレベーター待つことになった。中村に対して

ひどく腹は立っていたが、かといって、いや、だからこそよけいに、あんな話を聞いたすぐ後で、亜莉沙と同じエレベーターに乗る勇氣はなかったのだ。

自分の席に戻った後も、琴美は、先輩社員から言い使った資料整理の仕事も手に着かず、神経だけがやたらにぴりぴりとしていた。

琴美のデスクから少し離れた課長席では、中村が書

類に目を通したり、得意先からの電話に応対したりしている。そして、隣の席では、亜莉沙が、黙々とコンピュータへの入力作業をしている。そんな二人の姿が、否応もなく目に入ってくるのだ。

二人は、何食わぬ顔でふだんどおり振る舞おうとしているようだが、さっきの会話を聞いた琴美には、中村はどこか浮かれた様子に、そして、亜莉沙の方は、どんどん沈み込んでいくように見えた。

そんな姿を見ながら、琴美は、入社して初めて、自分が男になりすましていることを悔やんでいた。

なにしろ、亜莉沙が中村とそんな関係になってしまったのも、そして、それが清算できずにいるのも、どうやら、男としての自分の存在が関わっているようなのだ。

あの花見の夜、酔った亜莉沙が中村を誘ったというのは、琴美がいつのまにか姿を消してしまったせいでは

もあるのだろう。そして今、亜莉沙が、中村に言われるまま、ずるずると関係が続けているのは、会社を辞めざるを得なくなるとかいう以上に、そんな関係を琴美に知られるのを恐れてのことなのかもしれない。

もちろん、亜莉沙だってもう立派な社会人なのだから、結局は自分の行動によって招いたことに、琴美が責任を感じることはないのかもしれない。しかし、それにしても、「男」としての琴美には、そんな亜莉沙

に声をかけることすらできないのだ。

もし自分が、女子社員として勤めていたのなら、と琴美は考えた。

それなら、すぐにでも亜莉沙の相談に乗り、同性の立場から何が正しいことなのかを話して、勇気づけることだってできるだろう。しかし、男では——ことに亜莉沙の動機にかかわっているらしい今の琴美の立場では——、それは出来ないことだった。

琴美が、そんなことを考え続けているうちに、午後
の時間は過ぎ去っていった。

定時が来ると、亜莉沙はデスクの上を片づけ、すぐ
に席を立った。

その顔には、やはり翳りが見て取れた。

部屋を出て行きかけた亜莉沙がちよつと振り向く
と、その視線の先で、中村が、かすかにうなずいてい
た。

そんな二人の姿を見ながら、琴美は、いよいよ憂鬱な気分になっていった。

「おい、お前、何にもできてないじゃないか。いったい何やってたんだ」

しばらくして、先輩社員が出先から帰り、まだデスクの上に積み残されたままの未整理の資料の山を見て怒鳴った。

「……すみません」

琴美が謝っていると、席を立ててきた中村が言った。

「いくらはりきりボーイの大沢だつて、勤めて三ヶ月たらずだ。調子が出ないときもあるさ。新入社員を、そういびるなよ」

中村は、助け船を出してくれたのだが、琴美はその言葉を素直には聞けなかった。

と、案の定、中村は、それをいい機会にするように、課全体に聞こえる声でつぶけたのだ。

「悪いが、今日、俺、先に失礼させてもらうよ。じつは、ワイフの誕生日でさ」

そう言い残し、出口に向かう中村の後ろ姿を、琴美は、にらむように見やった。

その視野のはしに、やはり帰り支度を整えて一課の席を立った拓也が見えた。こちらにも、なぜか浮かかない顔をしていた。

エレベーターを降りたところで、拓也は、旅行代理店に続くドアに、ちらりと目を向けた。そのドアが開き、今にも実香が現れるような気がしたのだ。

勤め先が一階である実香が、上の階に来るようなことはまずないだろうから、仕事中は安心していられるにしても、出退社の時は、どうしてもこのエレベーターホールを通らなければならない。しかも、このドアは、どうやら旅行代理店の社員たちの通用口としても

使われているらしい。今後も、実香と顔を合わせる可能性は、じゅうぶんにあった。きっと毎日、こんなふうに緊張することになるのだろう。

そんなことを思いながら、ビルの自動ドアをくぐった拓也は、大きなため息をついて、歩道に出た。幸い、駅の方角は、ガラス張りの旅行代理店とは反対側だ。その前を通らなくてもいいのだけは、ありがたい。

そう感じ、緊張を解いた瞬間だった。

「拓也」

斜め後ろから聞こえた声に、拓也は思わず振り向いた。そして、「あっ」と小さく叫んでいた。

ビルの前の植え込みの陰に隠れるようにして、実香が立っていたのだ。

「……！」

拓也は、先刻にも増して体全体を緊張させ、その顔を見つめてしまった。

実香の方も、自分から声をかけたにもかかわらず、驚いたようにその顔を見ていた。

二人はしばらく、呆然とお互いの顔を見つめ合っていた。

動転と、そして、急速につのつていく羞恥のせいで、ワンピースの下の拓也の膝は、ぶつかり合うほどがくがくと震えていた。

しばらくして、実香が口を開いた。

「やっぱり……そう……なの？」

その口調はまだ、驚きから覚めていない。

そこで拓也は、やっと、ビルの入り口から出てくるサラリーマンやOLたちが、自分たちの様子を不審そうに眺めていくのに気がついた。その中には、平安トレードの社員もいるようだ。いずれにしても、ここでこんなふうに行っているのはまずいだらう。

「……あ、あの……わけを……話すから」

目を泳がせながら言った拓也の言葉に、実香もその意図がわかったらしく、うなずいた。

「……なるほどね。でも、思い切ったことやったもんね。拓也も、その琴美さんって人も」

駅前のハンバーガーショップのテーブルで、拓也が声をひそめていきさつを話すのを黙って聞いていた実香は、今の話を、もう一度咀嚼するとでもいった表情

でつぶやいた。まだ、多少の驚きは残っているようだが、少なくとも、消え入りそうなほど身を縮めている拓也よりは、ずっと落ち着いたように見える。

「なんか、めちやくちやな話：：だろ」

拓也は、語尾につまりながら答えた。

実香を目の前にして話すには、高校時代の口調の方が自然なのだろうが、こんな格好だと、かつての「彼氏」としての話し方は、意識しないと出てこない。

「私も、まさかと思ったもん。今朝、店に来た時、どつかで見たことある人だなって感じ、したのよね。でも、どうしても思い出せないの。だけど、考えれば考えるほど、身近な人だったような気がして……。気になつて、仕事中もずっと、ぼーっとしてたんだから」

「……うん」

「で、勤務時間が終わる頃になつて、やっと拓也の顔思い出したの。その顔と、今朝の女の子の顔が、頭ん

中ですんなり重なったんで、驚いちゃったわ。でも、まだ、自分の考えてることが信じられなかった。それで、試してみようと思って、ちようど今日は早番だったし、出てくるの待ってたの。名前呼んだら、ほんとに振り向くんだもん。そりゃ、びっくりしたわよ」

「う、うん。だろうね」

拓也がまた短く答えると、実香は、テーブルの上に出た拓也の上半身をあらためて眺め、ため息をつくよ

うにした。

それで、実香はあきれているにちがいないと感じ、拓也は、恥ずかしさに顔を伏せ、さらに肩をすぼめた。

「……なんか、情けないよな」

それでも言わなければ場が持てない感じがして、拓也は、小さな声で同意を求めるといふやいた。と、実香は、「どうして？」ときいてきた。

「……え？」

顔を上げると、実香は、最前までの驚きからも、今のため息からも、すっかり覚めたように、いたずらっぽい笑顔で笑い返していた。

「……？」

「今ね、じつは私、ちよつと嫉妬したんだ。だって、拓也、そのワンピース、すごく似合ってるんだもん」

「……は？」

「今朝も、最初に見て思ったのは、なんて美人なんだ

ろうってことだったんだよ。私、それが、ちよつとうれしかったりもするの」

どこか弾んだ口調でそんなことを言い出した実香の意図がわからず、拓也が見返すと、実香はさらにつづけた。

「高校時代、私が感じてたことって、やっぱりまちがってなかったんだなって気がして」

「……どういう、こと？」

拓也がきくと、実香は、さらにいたずらっぽい笑顔
を向け、話を変えろというように言った。

「ねえ、せつかく、もと恋人が四年ぶりに偶然再会し
たんだから、場所変えて、ゆっくり話さない？」

残業して、できなかつた仕事を片づけようと思った
のだが、その作業は、やはり、はかどらなかつた。ど
うしても、亜莉沙のことを考えてしまうのだ。

琴美は、資料をチェックする手を止め、人影もまばらになった夜のオフィスを見渡した。

今頃、亜莉沙は、中村とともにホテルのベッドの上にいるはずだ。

表面はどう振る舞ってしようと、じつは、亜莉沙は弱い子だ。それは、琴美の、女の目から見ればよくわかる。中村のような男に抱きすくめられれば、心の中でいくらそれを嫌悪していても、拒否できず、結局は

体が応えてしまうのだろう。

琴美には、それが、どうしようもなく悲しいことに
思えた。

そして、今、苦しむ亜莉沙を救ってやれることがで
きるのは、自分しかないのではないかという思いが、
琴美自身をも苦しめた。

こんなふうには、仕事も手が着かないほど、そのこと
に過敏になってしまうのは、生理の二日目だからだと

いう気もしたが、やはり、それだけではないだろう。

琴美は、先刻とは逆に、今度は、自分が本物の男だったのならと考えてみた。それなら、亜莉沙を救う手は、確実にある。でも、それも、今の琴美には絶対にできないことだった。もし、恋愛対象として亜莉沙に接し、亜莉沙をその気にさせてしまえば、結局は、すべてがわかったとき、亜莉沙をさらに傷つけることにしかならないはずだ。

そう考えていると、今度は、別の思いが琴美を責めた。

男であろうが女であろうが、じつはそんなことは関係ない。事実を知ってしまった以上、人間として正しいことをすべきではないのか。直接、中村に意見し、そんな行為をやめさせるのが、本来、人としてとるべき態度だろう。

でも、今の琴美には、それもできそうになかった。

そして、そうできないのは、会社という組織の中で、どこかに保身の気持ちがあるからだという気がした。それは、男であろうが、女であろうが、情けない話だ。

そんな自責の念の中で、次に琴美は、次善の策として、社内の誰かに相談するという手はあるなと感じた。もしかすると、それこそが、組織人としての正しい対処のしかたなのかもしれないという気もした。

でも、そんなことを相談できる人が、新入社員である自分のまわりにいるだろうか。

そこまで考えたとき、背後から声をかけられた。

「早朝から出社して、その上、残業？」

振り向くと、ゆかりが立っていた。自分の仕事を終え、帰る前に、営業フロアをのぞいたにちがいなかった。

それで琴美は、思わず言っていた。

「あの、ゆかりさん、ちよつと相談があるんですけど」
「それって、どういうことよ」

少々酒がまわりはじめた拓也は、実香の言葉にちよつと気色ばんで言った。

「だからさ、あの頃、私は、拓也のこと、ほんとに大好きだったんだって。それはまちがいないの。それに、拓也って、基本的に美少年だったし、友達からもけっ

こううらやましがられたりしたんだから。でもね、なんて言うかな……。ずっと、どっかちがうって感じ、してたのよね。拓也といると、すごく気が楽で楽しかったんだけど、はらはらするような感じって、一度もなかったんだ。キスしてるときでさえ、すごく気持ちいいとは思ったけど、全然どきどきしなかった。こんなもんかなって思いながら、どっかちがうんじゃないかって。そんな感覚に確信もったのは、じつは短大に

入って、他の男とつき合ってからだけどね。男って、ふつう、もつと、いつ襲ってくるかわかんない感じ、あるんだよね」

「ばかにしてるの？」

「だから、そうじゃないって。あの頃は、私だって、そんなこと、正直には言えなかったよ。それに、今だって、もし拓也が、あの頃のまままで私の前に現れてたら、こんなこと言っていないよ」

そこまで言つて、自分のぐい飲みにまた酒をつごうとした実香は、徳利がからになつてゐるのに気がつき、カウンターのの中の男に声をかけた。

「おじさん、もう一本ちようだい」

「あいよ」

店に入る前に実香が言つていたとおり、本当になじみらしく、その焼鳥屋のおやじは、気軽に返事を返してきた。そして、カウンターの上に目を走らせ、つけ

足した。

「砂ぎもとねぎま、もうちよつと焼こうか。そっちの美人のねえさんの皿、からじやない」

おやじの言葉に、実香がからかうような顔を向けてきたので、拓也は——さつきからの話の流れもあり——、ちよつとふてくされた表情で目を泳がせた。それがさらに面白かったらしく、実香は調子に乗って、おやじに同意を求めた。

「ね、ほんとに美人でしょ。私も久しぶりに会って、あんまり変わってるんでびっくりしちやったの」

「あ、会社の人じゃないんだ？」

「うん、高校時代の友達。うちのビルに入ってる会社に、偶然、入社してたんだって」

「へえ、なるほどね。事実は小説よりも奇なりってね。親友の再会ってわけだ。あ、それで、さつきから、高校時代のボーイフレンドの話ししてんだ」

「あれ、きいてたの？」

「べつに、聞くつもりはなかったけどさ。キスして気持ちよかったとか言われりゃ、どうしても耳に入っちゃうじゃない」

おやじは、ちよつと照れたようではあったが、ずけずけと言った。しかし、いずれにしても、拓也と実香の会話を、ここにはいない男の話をしているのだと誤解しているようだ。

「あ、もしかしたら、親友っていうより、恋敵だった
りして」

「ふふ：：、それに、近いかな」

実香はまた、いたずらっぽいな笑顔でそう答えた。

「そりゃ、まずいな。相手がこれだけ美人じゃ、実香
ちゃん危うしってわけだ。どうやら、女同士の話に、
これ以上首つっこまない方が身のためだな」

おやじは、そう言って、別の客の前へと移動した。

と、実香が「ほらね」と言った。

「なんだよ」

「拓也、どう見ても女の子にしか見えないのよ。私も、なんか、この方が、あの頃よりずっと自然な感じするんだよね。思ってること、なんでも話せそうで。それで、よく考えてみると、結局、あの頃も、私、女友達みたいな感覚でつき合ってたんだなって思ったの」

「やっぱり、ばかにしてんだ」

「ちがうってば。もしさ、拓也が男の子のまままで再会したとしたら、私、困っちゃったと思うんだ。あの時、なんか、あいまいなままで別れちゃったし。いちばん話の通じる友達だと思ってたのに、そのあと、私の方が他の男とつき合ったせいで会いづらくなっちゃったんだから、ちよつと後ろめたいところ、あるしね。でも、こうやって女同士ってことなら、あの頃とおんなじように、ううん、あの頃以上にいい友達になれるかなっ

て気がするの。それで、私、さつきからうきうきしてるんだよ」

そう言って顔を向けた実香を見返し、拓也は、どんな顔をしたらいいのか困惑した。高校時代から、実香は、変に言葉を飾らない正直な子だった。言っていることに、嘘はないだろう。でも、それを、かつての「恋人」としては、どう受けとめたらよいのか。

拓也にとっても、あの頃、実香は、なにより話の合

う友達だった。そういう意味では、実香の言っていることは、あながちまちがってはいない気もする。まわりからそう見られることで、二人ともその気になってはいたが、やはり、「恋人」というには昂ぶったところのない関係だった。それに、今はもちろん、実香とよりを戻そうなどとは思っていない。

それにしても……

「私たち、これからもいい友達でいましょうね、なん

て、なんか、女の子が別れるときの常套句みただけ
ど、私、今、本気でそう思ってるんだよ」

男としてはやはり、そんなふうに言われるのを甘ん
じて受け入れるわけにはいかない気もする。

そんな複雑な思いで実香の顔を見返して、そこ
で拓也は、あることに気がついた。

その顔が、あのころより大人びて見えるのは、実際
に年齢を重ねたことも確かにあるが、それ以上に、メ

イクのせいらしいのだ。眉もきれいに整えられ、シャドーも、不自然な感じなく実香の目を魅力的に見せている。拓也がつけたことのないマスカラも使っているようだ。

「ん？：：どうしたの？」

拓也が見つめてくるのを不思議に思ったのだろう。実香がきいた。

「うん、あのさ：：」

拓也は迷ったが、思いきって言うてみた。

「よかったら、お化粧のしかたとか、教えてくれな
い？」

実香は一瞬、驚いた顔をしたが、すぐにうれしそう
に笑い返した。

拓也にしても琴美にしても、思わぬ出来事が「てこ」
となつて、さらに奇妙な方向へと導く作用が働いてい

る
よ
う
だ
っ
た。
。

第7話 成り行き

「はい、平安トレードでございます」

「荒木ともうしますけど、大沢：：あ、いえ、岡崎さんいらっしやいますか？」

拓也が電話をとると、相手が言った。実香だった。昨日の今日で、拓也はすぐ気軽に答えそうになり、そこでいったん言葉を飲み込んでから、返事した。

「……は、はい。あたし、です」

「ふふ、会社じゃあ、ちゃんと女の子やってるわけね」
実香は、そう言って面白そうに笑った後、「どう、出られそう？」ときいてきた。

「じつは、まだ、言ってない……の。なんだか言い出

しづらくって」

他の人間に聞こえないように、送話口に手を添え、声を落としてしゃべっているのだが、それでも、やはり男言葉は使いにくい。

「なに言ってるの。できるだけ早く髪カットしたいって言ったの、拓也の方じゃない」

「だけど……」

「だいじよぶだって。まだ新入社員なんだし、女の子

なんだから、体調悪いとか言えば、早退くらいさせてくれるよ。昨日言ってた場所で待ってるからね」

実香の電話はそう言って、一方的に切れた。

そのあと拓也は、受話器を持ったまま、しばらく迷っていた。

昨夜、メイクを教えてほしいという拓也の言葉に、実香は俄然乗り気になった。そして、「じゃあ、いつそのこと、明日、二人で半休とつちやおか」と言い出

した。実香の方は、店舗の勤務シフトのせいで、定休が来週の水曜までないというのだ。それで拓也は、「それなら、ついでに美容院にもつき合ってほしい」と言ったのだった。

しかし、今日入社してみると、それは、思ったほど簡単なことではなかった。入社二ヶ月半で、まだ有給休暇もついていない身。同じ課の新卒社員に、これまで休んだ者はいない。そんな中で一番最初に、課長に

早退させてくれと言うのは、やはり気が重い。

それにもうひとつ、今日は、さらにそれが言い出しづらい雰囲気があった。

隣の二課では、今日、亜莉沙が突然休んだのだ。そのことで、亜莉沙がアシストについている二課の主任が、朝からさんざん文句を言っている。手持ちの顧客から大量の成り行き注文が出たらしく、その対応に追われているのだ。その声が、一課にも聞こえてくるの

である。

そんな事情もあり、受話器を置いた後、拓也はまだ迷っていた。

でも……。さっきの実香の電話は、会社を出てからかけてきたものだろう。つまり、もう、待ち合わせの場所へ向かっているということだ。こちらから頼んだことなのに、待ちぼうけを食わすわけにもいかない。

そう思った拓也は、意を決して席を立った。

「……あの、課長」

声をかけると、山木課長が顔を上げた。

「ん、なに？」

「ちよつと……、体調がよくななくて……」

拓也がおずおずとそこまで言ったところで、山木は、「あ、そう。じゃ、早退しろよ。今日は柳田もいないことだし」と、すぐに言葉を返してきた。

そのあまりのあっけなさに、拓也は意表をつかれ、

ぽかんとした。

たしかに、亜莉沙と拓也では、今日は立場がちがった。今朝入った電話によれば、柳田は、やはり昨夜広島に泊まったらしく、今頃は東京に帰る新幹線の車中のはずだ。そして、東京に着いた後も、そのまま営業先へ直行すると言っていた。柳田がいなければ、拓也にやらなければならぬ急ぎの仕事はない。

それにしても……。

まだ呆然としている拓也をよそに、山木は、「気を付けてな」と言いながら席を立ち、壁のメンバーボードの一番下にある「岡崎」の欄に、さっさと「早退」と書き込んだ。

苦言のひとつもあるだろうと思っていた拓也は、拍子抜けしたまま、「すみません。じゃあ、失礼させていただきます」
と課長の席を離れた。

デスクを片づけ、コンピュータを落とし、——と

りあえず、そうした方がいいかと思いいかに調子が悪いという顔をつくって部屋を出た。早退がいとも簡単に許されたことに、「どうせ自分なんて、そんなもんなんだな」という気持ちで、どこかで働いたせいもあった。

いったん廊下を更衣室に向かいかけたところで、拓也は立ち止まり、もう一度部屋の入り口のところまで戻った。ふだんは着替えてからタイムカードを押すの

だが、早退するのに、着替えまで勤務時間に入れてしまうのは申し訳ない気がしたからだ。

と、その時、キャビネットの向こうのフロアから二課の主任の声が聞こえてきた。

「なんなんだ。今年の子の新人は、生理日までいっしょかよ」

山木が書いたボードを見て言ったにちがいない。

タイムカードを押しながらその言葉を聞き、拓也は、

実香が「女の子なんだから」と言っていた意味が、やっと理解できた。この早退もきつと、「生休」として扱われるのだろう。

それに愕然としながらも、拓也は顔をしかめていた。そんなこと、なにも、あんな大きな声で言わなくてもいいのに。

そう思ったのだ。

そんなこと、大きな声で言うことじゃないだろう。今日は研修が早めに終わり、自分のデスクに戻っていた琴美も、主任の言葉にそう感じていた。

亜莉沙が急に休んで仕事に支障を来した腹立ちまぎれとはいえ、オフィス全体に聞こえるような声であることを言うなんて、非常識だ。女が休むと、すぐ「生理」だと連想する中年男の感覚もいやらしい。そして、それを許してしまうこの職場の雰囲気も、やはりおか

しい。

昨日、亜莉沙と中村の関係を知ってしまった琴美には、そんなことすべてが、いちいち気にさわった。

だいいち、二人が生理日だなんて、主任は確かめたわけでもないだろう。そもそも拓也は生理のわけはな
いし、亜莉沙だって多分ちがう。

元気なさげに出ていった拓也のことも気にはなつたが、琴美は、それ以上に亜莉沙のことが心配だった。

琴美がちらりと見やると、中村課長は、今の主任の言葉を聞いてもいなかっただように、自分の席で経済紙を広げていた。その姿に、琴美は冷たい眼差しで舌打ちした。

おそらく亜莉沙は、精神的に追いつめられているにちがいない。昨夜、中村との間に何かあったのかもしれないし、そうでないとしても、職場で中村と顔を合わせるのがつらいのだ。

琴美自身は昨夜、ゆかりに、自分が知ったことのすべてを話していた。人事課員であるゆかりは、やはり、それを深刻な問題として受け止めたようだ。「とりあえず、私に任せて」と言ってくれた。

ゆかりがどうするつもりかはわからないが、会社として解決策を考えるとということだろう。どんな関係であれ恋愛は自由なのだから、会社がそれに介入することとは出来ないにしても、セクシヤルハラスメントとし

ての事実はまだがいなくあるのだ。調査の上で、なんらかの手が打たれるにちがいない。

琴美は、今は言われたとおり、それに任せるしかないと思っていた。

ただ、だからといって、それで気分が晴れたわけではない。むしろ、どこか後ろめたい、この場にいたたまれないような気持ちがつけ加わっていた。なにしろ、上司の悪行を密告した形になってしまったのだ。

そんなこともあり、昼休みの時間が来ると、琴美はすぐに席を立った。

と、廊下に出たところに、そのゆかりが立っていた。

「磯村さん、今日、休んでるみたいね」

琴美の顔を見ると、ゆかりは、顔を近づけるようにして言った。

「ええ」

「昼休みに、彼女と話してみようと思ってたんだけど

……」

どうやら今日は、亜莉沙のかわりに、琴美がゆかりと昼を共にすることになりそうだった。

「前髪、ちよつと長めにカットして、流す感じがいいんじゃない。サイドはレイヤー気味にしてさ。それから、いっそのこと、ブラウンに染めたら」

「え、染めるの？」

ヘアサロンの椅子に並んで座り、鏡越しに顔を見合
わせながら、拓也は実香に聞き返した。

「うん、その方がぜったいにいいよ。……ねえ」

実香は、振り返るように首をまわし、拓也についた
美容師に同意を求めた。

「ええ、つやがあってきれいなストレートですけど、
わりと太めだから、このままだと、どうしても重たい
感じだよ。ヘアカラーすれば、もっとやさしい感じ

になりますよ」

その男性美容師は、接客口調とタメ口がごつちやになつた言い方で、シャンプーあとの髪を櫛でそろえながら言った。

「でも……」

拓也は迷ったが、いわば「専門家」である美容師の前で女の子を演じつづけなければならぬ緊張に、まともな反論などできそうもなかった。

「今日、話せなかったの、むしろちようどよかったか
も知れないわね」

会社近くの喫茶店でオムライスを口に運びながら、
ゆかりが言った。

「いっそのこと、私、明日、彼女の家まで行ってみよ
うと思っ」

「えっ、明日、ですか？」

琴美が聞き返すと、ゆかりは、「ええ」とうなずいてつづけた。

「彼女だって、会社じゃ話しにくいこともあるでしょ。

明日の土曜なら、プライベートってことで話せるし」

「すみません。せつかくの休みだっていうのに、変な話持ち込んで」

「いいのよ。そういう事実があるとしたら、新入社員担当で、しかも人事課唯一の女子社員としては、見過

ごせないもん。それに、こういう問題って、デリケートに運ばないと、おかしなことにもなっちゃうと思うのね」

「おかしなこと？」

「うん。中村課長は、一般的な意味では、けっして悪い上司じゃないわ。それなりに人望もあるし、会社の評価も低くない。だから、へたな問題の出し方をするのと、逆に、磯村さんの方が傷つくことになると思うの。」

私、それだけは避けたいと思ってるのよ。明日会って、まず、彼女がどうしたいのかをはっきりと確かめてから、できるかぎり、彼女にとっていいようにことを運びたいって考えてるの」

その言葉に、琴美は、ゆかりに相談してよかったと思った。しかし、ちよつと心配になつて言った。

「あの、でも、僕から聞いたってことは……」

「ええ、もちろんそんなこと言うつもりはないわ。そ

れこそ、彼女がいちばん傷つくことでしょ」

琴美は、それにうなずいたあと、もうひとつつけ加えた。

「あの、よかったら、彼女と話したあとで、土日のうちに、その結果を教えてくれませんか。話せる範囲でいいですから。やっぱり気になって」

「そうよね。月曜に、私と大沢君が会社でこそこそ話してたなら、磯村さんだって余分な気をまわすだろうし」

「ええ」

「それなら、明日、彼女と会ったあとで、どこかで会いましょ。私の方から電話するから」

「あ、それなら、携帯の方にください。僕、出てるかもしれないし」

琴美はあわててそう言い、ペンを取りだして、テーブルにあったペーパーナプキンに、携帯の番号を書きつけた。

人事課のデータベースには、履歴書から起こした拓也の部屋の電話番号が書き込まれているはずだ。ゆかりがそれを見て電話したらまずいと考えたのだ。

結局、琴美は、拓也が柳田にしたのと同じ対応を、ゆかりにしたわけだ。

ショーケースの上に置かれた鏡に、ブラウンのサラヘアが揺れるのが映った。

それに気づき、拓也はちよつと膝を曲げて、その鏡に自分の顔を映した。先刻、ヘアサロンの鏡でさんざん見たのに、このコスメショップで偶然目に飛び込んできた自分の姿に、またちよつと驚きを感じていた。

実香や美容師がすすめたように、その明るい髪は、拓也の顔によく似合い、さらに女らしさをつけ加えている気がした。

と、拓也のワンピースの背中あたりを引っ張るよ

うにして、実香がきいた。

「：：ねえ、どうなの？」

「え、なに？」

鏡を見ていたせいで、話しかけられたのに気づかなかったようだ。

「だから、エナメルは持ってるの？」

「：：エナメル？」

「マニキュア」

「あ……ううん」

「一本も？」

「うん」

「まったく、ほとんど何もそろってないってことじゃない」

実香はあきれたようにそう言って、ネイルエナメル
の瓶を二本ほど選び、手に持った店備え付けのかごの
中に入れた。すでにその中には、他の化粧品がいくつ

も入っている。

「それにしても、二十歳過ぎの女としては落第ね。その琴美さんって人も、それに、こっちの……琴美ちゃんも」

からかうような実香の視線に、拓也は肩をすくめて照れた。

かつての「彼女」と、こんなふうになんか女の子どうしとして買い物しているのは、くすぐったくはあったが、

そんなに悪い気はしなかった。この間、女を演じることにいつもどこか不安を抱えていた拓也にとって、自分のことをすべて分かった上で、あれこれ相談に乗ってくれる人間がいるというのは心強いことだ。それこそ、実香が言っていた「いい友達」ということなのだろう。

「ここ、デイスカウトショップだからまだいいけど、それにしても、これだけ買っちゃうと、けっっこういく

よ」

「いいよ。もうじき、ボーナス出るから」

「そっか。じゃあ、家庭教師代として、私もごちそうしてもらわなくちゃね。：：：琴美」

実香はまたそう言って、からかうように笑った。

化粧品を買った後、実香の提案で、アクセサリーション
ヨップに寄ってピアスをあけてもらった。もつと痛い

のかと思っていたが、耳たぶがちくりとしただけで、あつという間にすんでしまった。

そのあと、さらにもう一軒ブティックに寄って、ノースリーブのカットソーとスカートを買った。そのせいで、いっしょに部屋に着いたときには、もう五時をまわっていた。

「へえ、そっちが、本物の琴美さんの部屋なのね」

六月も後半。日中閉め切っていれば、部屋の中は蒸

し暑い。エアコンがききはじめるまで風を通しておこ
うと窓を開けると、実香がのぞくようにして言った。

「うん、そう。いつも帰ってくるの、八時過ぎだから、
まだいないけどね」

そう言いながら、立て膝でのったベッドから降りよ
うとすると、実香は、それこそ女の子どうしのような
気楽さで、そのベッドに腰かけた。

「ふうん。でもさ、はっきり聞いちゃうけど、拓也と

琴美さんの間には、そういう関係、あるの？」

「……へ!？」

一瞬、実香の言葉の意味がわからず、拓也は立て膝のまま、実香を見下ろした。

「だって、これだったら、まるで同じ部屋に住んでるようなもんじゃない。それに、二人でこんなすごいことしてることとは、よほど深い関係になってるってことですよ。どっちがリードしてるかはべつにしても」

「そんな……。へんなこと言わないでよ」

思ってもいかなかったことを言われ、拓也は、あわててそれを否定し、実香と並んでベッドに腰掛けた。

「でも、ふつうはそう思うよ。まあ、やってること、ふつうじゃないんだけどさ。だって、服だって交換してるわけでしょ」

「最初はね。でも、この頃は、自分たちで買ったりもしてるんだ。それにもちろん、下着とかは交換してる

わけじゃないし」

「あ、そうなんだ。じゃあ、あれは拓也のなのね」

実香は、そう言っつて、ベッドの上の天井から吊された小物干しを見上げた。そこには、いつものように、ブラとショーツが干してあった。

「あ、……」

拓也は、実香がそんなことを言い出した理由がやつとわかって、さらに顔を赤らめた。

実香は、どきまぎする拓也を、また面白そうに見ていたが、すぐに買ってきた化粧品の紙袋を開けながら言った。

「さあ、じゃあ、始めよか。まず、今してるメイクのクレンジングからね」

「眉のカット、今日は鋏でやっどくけど、できれば毛抜きで抜いた方がいいわ。伸びてきたらそうして。こ

んなふうにならぬ内側から三分の二くらいの位置に山がで
るようにするのね」

「フアンデはただ均一に塗ればいいってもんじやない
の。Tゾーンはちよつと厚めにして、そこからまわり
に伸ばしていくようにすると、顔全体に立体感が出る
わ」

「ちがうちがう。アイペンスルを目がしらの方から引
くと、まぶたがよれて、ラインががたがたになつちや

うでしょ。目じりから目がしらに向かって少しずつ重ねていくように描くの」

「マスカラは、上まつ毛の下側に三度、上から三度塗って、下まつ毛は、マスカラブラシを立てるようにして一度塗るくらいが適当ね」

「口紅は、リップブラシでちゃんと外側の線に沿ってラインを入れてから、中を塗るの。ほら、口角寄りをはつきり描けば、あごが細く見えるでしょ。その日の

服に合わせて、ピンクとレッドとコーラル系をうまく使い分けるのよ」

：：微に入り細にわたるそのアドバイスは、とても一度でマスターできそうになかったが、なんだか楽しそうに教えてくれる実香の言葉に従って自分の顔をつくっていくうち、その驚くほどの変化に、拓也自身も、メイクというものの楽しさがわかった気がした。

そして、そんな共感が、二人の間にまだ残っていた

「異性で、もと恋人」という遠慮や照れを忘れさせていくことにもなった。

改札口を出た琴美は、どこかで夕飯を食べていこうかと思ったが、すぐに思いとどまり、そのままマンションに帰ることにした。

体調が悪そうな様子で早退した拓也のことが気になつたのだ。

だいじょうぶだとは思うけど、とにかく一度、部屋をのぞいてみよう。

以前、自分が悪酔いしたときには、拓也が介抱してくれたのだ。もし病気にでもなっているのなら、あの時のお返しもしなければならぬ。

それにしても……、まったく、私のまわりって、世話の焼ける子ばかりなんだから。

亜莉沙のことも含め、琴美はそう思った。

そんなことを考えながらマンションに帰り着いた琴美は、自分の部屋に入ると、すぐに窓を開けた。

と、拓也の窓のカーテンの向こうから、思ってもいなかった女性の話し声が聞こえてきた。

「……最初はね、会社の発券システムが全国的にバージョンアップするから、その研修もかねて、しばらく本社に出向してくれって話だったの。ところが、そこで、全社的なリストラがあつてね。採算の悪い名古屋

支社は、いちばんたくさん人員削減しなきゃならない
ってことになって」

「ああ、それで帰れなくなっただってこと？」

どうやら、相手は拓也のようだ。つまり、拓也のと
ころに女性が訪ねてきているということだ。

でも、いったい、誰が……？

琴美は、ノックしようとした手を宙に浮かせたまま、
首を傾げた。

「うん。私にしてみれば、親もと離れて東京でひとり暮らしなんて、夢だったから、ちようどよかったんだけどね。親は、約束がちがうって怒ってる。もう、こっち来て一年になるから」

「ふうん、帰って来いって言われてるんだ」

「そう。毎日のように電話がかかってきてる。それも、たいてい、お見合いの話とセットにして。東京で虫がついちやたいへんだとか、思ってたんでしょ、きつと。」

あ、拓也、マニキュア、もうそろそろ乾いたんじゃない？」

その言葉を聞いて、琴美はさらに首を傾げた。相手の女性は、拓也のことを「拓也」として認識しているわけだ。

「あ、ほんとだ。いい感じ。でも、次から、自分だけでこんなにきれいに塗れるかな。やっぱり、口紅とかと、色あわせて塗り替えた方がいいわけでしょう」

拓也の声がそう言った。ということとは、たぶん、拓也は女装したままなのだ。琴美はいよいよわけがわからなくなった。

「毎日やってりや、すぐうまくなるわよ。女の子の中には、そういうの、めんどくさいって子もいるけど、どうやら、拓也、きらいじゃないみたいだし」

「……そ、そうかな」

その会話を聞きながら、琴美は迷ったが、思い切っ

てノックした。いったいどうなっているのか、知りた
い気もあったのだ。

「……あ、帰って来たみたい」

拓也の声がして、すぐにカーテンが開いた。

つづけて窓を開けた女性を見て、琴美は一瞬、彼女
が、その訪ねてきた女性なのかと思った。ブラウンの
さらさらヘアとぱっちりした目もとが印象的な美人だ
ったからだ。

ところが、その向こうに、さらにもう一人、見ず知らずの女性がいるのが見えた。

「お帰り」

手前の女性が、拓也の声で言った。

「えっ？」

琴美は、その美人——拓也の顔を、穴が空くほど見つめてしまった。

と、今度は、もう一人の女性が、琴美の方を驚いた

ように見ながら言った。

「わっ、かっこいいんだ」

「なんか、まわりの男たちが、うらやましそうに見てるよ」

テーブルの向かいに座った実香が面白そうに言ったので、琴美は店内に目を走らせた。

確かに、他の席の、男だけのグループが、こちらを

チラチラうかがっているような気がする。

三人で食事に行こうということになって、マンションと駅の間にあるこのファミリーレストランに入ったのだが、琴美と拓也は、それぞれ男装と女装のままだった。実香が、「べつにそのままでもいいじゃない」と言ったからだ。

確かに、しつかりメイクし、マニキュアまで塗っている拓也が、それを落とすのは時間がかかりそうだった

たので——べつに、琴美までがつき合う必要もないの
だが——、実香の言葉に従った。

でも、実香は、あきらかに、この状況を楽しんでい
るようだ。

「そりゃ、こんなかつこいい男が、一人で女の子二人
独占してちゃ、やっかみたくもなるよね。しかも、女
の子の一人はびっくりするぐらいの美人だし」

先刻、紹介し合ったばかりだというのに、まるで友

達のような口調でからかってくる。

実香の言葉に照れながら目を戻すと、実香の隣では、拓也が恥ずかしそうに苦笑していた。ただ、それは、からかわれて照れているという感じでもない。実香の言った「美人」というのが自分のことだと承知した上で、どこかそれを楽しんでいる感じさえあった。

高校時代の友達だって言ってたけど、いったいこの二人、どういう関係なんだ？

琴美はちよつと不思議に思いながらも、その拓也の顔を、また、まじまじと見てしまった。

たしかに、実香の言ったことは本当だ。

レイアーカットしたブラウンの髪。形を整えた眉。

それに、アイシャドーやマスカラで仕上げた印象的な目もと。けっして厚化粧した感じはないのに、そのメイクは、拓也を、今日の昼間までとはまた、まるで別人のように見せていた。眺めているだけで、心が弾ん

でくるほどチャーミングな「女性」なのだ。

琴美自身は、まさに、先刻実香が言っていた「お化粧なんて面倒くさい」というタイプだが、たしかにこれだけ美人になれるなら、化粧に手間をかける意味もあるだろう。

もともと最初に口紅を塗り、拓也をこんな道に誘い込んだ張本人だというのに、琴美はあらためて感心していた。

「でも、こんなに美男美女だと、二人とも、会社でそうとうモテそう」

実香がそう言っただけで同意を求めると、拓也が、いたずらっぽい笑顔で「あたしはともかく、この人はね」と応じた。

正体を知っている実香と琴美の前でも、平気で「あたし」などと言っている。まわりを気にしてのことかもしれないが、髪やメイクのせいで、本人もかなりそ

の気になってしまっているようだ。仕草や表情も、これまで以上に女の子っぽい。そして、実香の方も、それを自然のことと受け止めている。

「同期の子でね、夢中になってる子がいるんだよ。もう、露骨なくらい『タツ君、タツ君』って」

「やっぱりね」

亜莉沙の話を持ち出され、琴美はちよつと複雑な表情になったのだが、それにおかまいなしに、拓也と実

香は話をつづけた。

「この頃は、さすがに人の目も気にしてるみたいだけど、最初の頃なんて、お弁当まで作ってきたりして」

「愛妻弁当、ってわけ？」

「そう。あたしにも『彼、とっちやだめだよ』なんて釘さすんだよ」

「へえ、そうとうね」

「それなのに、この人、その子と二人きりになったり

するの、一生懸命避けてるの。あの子、確かに自己チ
ューのとこあるけど、あれだけ一途なんだから、いつ
そのこと、その気になってあげればいいのに」

今度は拓也までがからかうような目を向けてきたの
で、琴美は、ぶすつとして「そんなこと言うなよ」と
答えた。

早退して、じつはこんなことをしていた、お気楽の
しそのものといった拓也に、ちよつと腹も立っていた。

この子には、亜莉沙が今どんな立場に立たされているかなんて、まるでわかっていないんだ。

と、次は、実香が冷やかしてきた。

「へえ、なんか、照れ方まで男っぽいんだ」

そう言われてはじめて、琴美は今、自分までがおかしな言葉づかいをしていたのに気がついた。もちろん今のは「照れた」からではないのだが、結果として、「女の子の脳天気なおしやべりに巻き込まれ、ふてく

「されている男」という役まわりになっている。

「まあ、とはいっても、向こうは男だと信じ切っただけで、追っついてるわけでしょう。たしかに問題あるよね。エッチはできないんだしさ」

さらに実香は、平然と露骨なことを言う。

と、拓也も、その想像にのって話をエスカレートさせた。

「もし、なんかの間違いでそんなシチュエーションに

なっちやって、ベッドの中で、大好きなタツ君がじつは女だったって知ったら、あの子、ものすごいシヨツクだろうな」

「うわ、こわい」

今の琴美にとって、それはけっこう辛辣な会話だ。

それで、さらにいらついた琴美は、そんな話題から逃れたくて言った。

「そんな話、どこが面白いわけ。いい加減にしなよ」

さほど強く言ったつもりはなかったのに、いらついでいるぶん、琴美の声音は冷たくとがったものになったのだろう。

面白そうに笑い合っていた二人が、驚いたように琴美の顔を見た。

なんだか、気まずい沈黙の時間が流れた。

わけがわからないなりに、実香は、琴美を怒らせてしまったと感じたらしく、一転して、おろおろと目を

泳がせている。

それを見て琴美は、今度は、この雰囲気をどうにか取り繕わなければいけないと感じた。

琴美にとっては悪ふざけがすぎるものだったとしても、そんな事情などなにも知らない拓也と実香にとっては、ほんの他愛ない冗談だったのだ。

と、琴美がなにか言うより先に、実香が「ごめんなさい」と口に出した。

「……そうだよね。拓也はともかく、琴美さんの方は、おもしろ半分で作ってるわけじゃないんだもんね。女でもちゃんとした仕事をしていく道を探して、必死なんだよね。私なんか、おもしろがってからかったりしちや、いけないよね」

琴美のいらだちを、実香はそう解釈したようだ。

この子も、大沢君と同じで、脳天気なところはあっても、きつと根は気のいい子なのだろう。

しゅんとしてしまった実香を見て、琴美はそう感じ、自分がなにか悪いことをしたような気がしてきた。

と、拓也も、テーブルを見つめてぼそぼそとつぶやいた。

「ごめん。あた……僕も、なんか調子に乗っちゃって」
えっ、あんたまで、そんな、ほんとの女の子みたい
なしよげ方をするわけ？

これじゃあ、まわりから見れば、泣きそうにしおれ

た二人の女の子を前にして、男である自分が横暴に怒っているという凶じやないの。

琴美は、いよいよよろたえた。一方で、こんな「美人」の拓也が「僕」などと言っていることにも違和感を感じ、それさえも、自分のせいだという気がした。

それで琴美は、最前までの雰囲気をなんとか取り戻そうと、頭をめぐらせ言った。

「あのさ、ここ、お酒もあるんだ。ビールでも追加し

ようか」

まるで、二人の機嫌をとるように。

と、「女の子二人」は、ちよつと顔を見合わせてから、二人揃って「うん」とうなずいた。

実香とシンクロすることで、拓也がますます女の子っぽくなっていることにあきれながらも、琴美は、結局この三人の取り合わせでは、自分が「男」としてリードする役割を負うのだなと、観念した。

最終的にはビールの中瓶三本を空にすることで、その場の雰囲気はふたたび和やかさを取り戻し、拓也と実香は、また女の子同士のような会話をつづけた。その内容は、今日、拓也がレクチャーを受けたらしいメモイクの話のつづきだったり、時には、高校時代の共通の友人の消息だったりしたので、琴美はもっぱら聞き役にまわった。

時計が十時をまわったところで、実香が「私は明日も仕事だから、もう帰らないと」と言い、そこで、拓也に向かって、もう一度確認するようにきいた。

「明日から、自分で、ちゃんとメイクできるよね」

「うん、自信ないけど、何とかなると思う」

「わかんないことあったら、いつでも電話して」

「うん、そうする」

やっぱり、どう見ても女の子どうしだよな。

琴美は、そんな二人を見ながら、またそう思った。と、さらに、拓也を見る実香の目に、ちよつといたずらっぽいまなざしが混じった。

「ま、とにかく、明日はがんばってね」

「えっ、：：なに？」

「とぼけなくたっていいわよ。拓也、どうしても今日のうちに美容院に行きたそうだったもん。わからないと思った？」

と、実香の言葉に、拓也はどこかうろたえるような表情をした。

「最初は、琴美さんとなのかなと思ったんだけど、どうもそうじゃないみたいだし」

実香はそう言って、琴美の方をちらりと見た。

実香がなにを言い出したのかよくわからず、琴美がきよとんとしていると、実香は、さらに拓也に向かつてつづけた。

「さっきの、琴美さんとその女の子の話以上に、拓也だって気をつけなきゃだめなわけでしょ。男って、その気になったら、けっこう力ずくだよ」

「……な、なんの話？」

拓也はさらに必死にとぼけているようだが、その動揺は、会話の内容がよく理解できていない琴美の目にも、はっきりと見て取れた。

と、今度は、そんな拓也の顔をしばらく見ていた実

香が肩を震わせて笑い出した。

「……ふふふ、まだまだ甘いな、こ・と・み、ちゃん。ちよつとかま掛けただけで、バレバレだよ」

それに対して、拓也はきよとんとしたあと、「えーっ」とあきれた顔をした。でも、すぐに「だ、だからさあ……」と、まだなにか言い訳しようとしている。

実香の言った「こ・と・み、ちゃん」というのが拓也のことなのだというのはわかったが、琴美には、二

人がなにについて話しているのか、見当がつかなかった。

「いったい、なんのこと？」

しびれを切らして聞いた琴美の言葉を無視して、実香は、さらに楽しそうに、「どう？　女どうしのつき合いっていうのも、けっこう油断ならないでしょ」と笑顔で言って、立ち上がった。

その言葉に、ついに拓也は観念したように肩をすく

め、「もお……」とすねた口調で言った。そして、やはり笑顔に戻り、実香と視線を交わしながら、つづいて席を立った。

結局、琴美だけが、なんだか取り残された気分だった。まるで、少女たちの秘密めかした会話についていけなかった少年のように。そして――

……ま、いつか。どうせ、さつきとおんなじで、どうでもいいような他愛ない話さ。

やはり少年のように、そう思った。

これで、実香にはもう、なにも隠し事ができなくなつちやつたな。

食事代とビール代を三等分し、——約束どおり、実香の分はおごりということ——そのうちの二人分を払いながら、拓也はそう感じていた。

明日の柳田とのデートを含め、実香にすべてを見透

かされ、確かに動揺はしていたが、それは、そんなにいやなことではなかった。あれこれ説明しなくても、実香はわかってくれているという気がしたからだ。

そんな実香とのつき合いで、自分の中に、どんどん女としての人格ができあがっていく。

拓也自身、それに気づいているのだが、それもまた、さほど抵抗のあることとは感じていなかった。実香とこんなふうには振る舞っていることには、これまでの人

生では感じたことのない居心地の良さがあつた。自分には、これが向いているという気さえした。

それに、少なくとも、今、拓也が置かれている立場から言えば、それはけっして悪いことではない。むしろ、都合のよいことだろう。

そうも思った。

ところが、そのファミリーストランを出たところで、実香は、もうひとつ、拓也が動揺するような爆弾

を仕掛けてきた。

レストランを出ると、実香は琴美に、「同じビルに勤めてるわけだし、これからもよろしくね」と言葉をかけたあと、拓也に「じゃあね」と言った。

駅と拓也たちの部屋は反対方向だから、ここで別れることになるのだ。

それで、なんとなく、拓也と琴美は並んで、去っていく実香を見送る形になった。

と、いったん行きかけた実香が、なにかを思いついたように、また振り向いた。

そして、こう言ったのだ。

「もう、いつそのこと、二人が恋人どうしになっっちゃえばいいのに」

「……え？」

「それなら、何も問題ないわけでしょ。こうして見ても、なんかうらやましくなるくらい絵になるカップ

ルだよ。もし、その気になったら、私、ぜったい応援するからね」

それだけ言って、実香はくるりと振り向くと、夜の道を駅に向かって歩きだした。

拓也と琴美は、その後ろ姿をしばらく呆然と見つめていた。実香の言葉で、二人とも動き出すきっかけを失ってしまったのだ。

……もう、実香ったら、なんてこと言うのよ。

拓也は、知らず知らず女言葉で、そう考えていた。

実香が駅につづく商店街のアーケードを曲がり、見えなくなつたところで、それをきっかけにして、やつと二人はきびすを返した。

歩き出した後も、拓也は、琴美の方が見られないよ
うな感じだった。それは、琴美も同じらしく、どこと
なく、歩き方がぎこちない。

そんなふうに、ファミリーレストランの駐車場の前

を通り過ぎた時だった。

二人が通った直後にそこから出てきたらしい一台のスポーツタイプの車が、車道の側を追い越すようにして走り、そして、二人より少し前方に止まった。

それだけだったら、べつに気にもしなかつたのだが、すぐにその車の歩道側のウインドーが下がり、中から「ビュー」という口笛が聞こえた。さらに、それに重ねるように、「やっぱ、本命はそっちかよ。あーあ、

もう一人の子、かわいそうに」という声がした。

それとなく見ると、車内の暗闇で、四人の男たちがこちらを振り向いていた。

どうやら、先刻、ファミレスで拓也たちのテーブルをチラチラうかがっていた男たちらしい。彼らも飲んでいたようだから、酔いに任せて、からかってきたのだろう。

ちんぴらや暴走族というほどには、たちは悪くなさ

そうだが、それでも拓也は緊張し、あわてて目をそらして歩を進めた。へたに関わらない方がいい。

と、その時、それまで歩道の建物側を歩いていた琴美が、さっと拓也の前を遮るよう移動し、車道側に位置を変えた。まるで、男たちから拓也を守るとでもいうように。

拓也が、琴美のその行動に驚いていると、男たちもそれに刺激されたらしく、一人がまた口笛を鳴らした。

そして、拓也たちがちようど車の真横を通った時には、別の男が「いいなあ、これから、二人でお楽しみつてわけ？」とからかってきた。

拓也は、さらに緊張し、そちらを見ないようにして通り過ぎた。

しかし結局、男たちはそんなにワルではなかったよ
うだ。

拓也たちが過ぎ去ると、すぐに車を発進させ、ふた

たび追いつき、今度は停車することもなく走り去った。

拓也はやっと緊張を解き、そっとため息をついた。

やはり緊張していたのだろう。琴美からも、肩の力を抜く気配が伝わってきた。

そこでまた、拓也はあ然とした。

……えっ!?

そんな琴美の気配がすぐに分かったのには、理由があつた。

いつのまにか、拓也は、琴美の背広の袖を後ろ側からつかみ、握りしめていたのだ。まるで、怖がって、男にすがっている女の子のように。

拓也は、そのことにうろたえ、あわてて手を離した。と、それで、琴美の側も、それに気づいたようだ。琴美が、驚いたように拓也の顔を見た。

一瞬、目と目が合った。

こちらを見た琴美の顔は、斜め上方から照らしてく

る街路灯の光で、頬や鼻の凹凸に沿ってくつきりと陰影ができ、はっとするほど力強く見えた。

急に、心臓が高鳴った気がした。

第8話 逆ざや

…走った。

ただ、やみくもに走っていた。

その、得体の知れないなにかから逃げるために。

やつらはもう、すぐ後ろまで迫っている。

それは、わざわざ振り向かなくても肌で感じ取れた。耳障りな気管音がすぐそばで聞こえる。腐臭に満ちた息が首筋にかかるほどだ。

湿っぽい暗闇の中をずっと逃げつづけているというのに、僕には、自分がどつちに逃げているのか、どつちに逃げたいのかさえ、よくわかっていない。

それでも、やつらは、確実に近づいてくる。

立ち向かう……？

そんなこと、できるわけがない。

僕には……あたしには、そんな力なんてない。

……誰か……助けて。

……えっ、……誰？

助けを求めて暗闇に差し出した手に、温かい感触が伝わった。

誰かが、その手をぎゅっと握り返してくれたのだ。

救われた。

そう感じ、その手にすがって走る。

力強く、かばうように導いてくれるその人と並んで走りながら、そこで顔を見た……。

久しぶりに、変な夢見たな……。

ベッドで目覚め、拓也はそう思っていた。今のは、就職活動をしていた頃、何度か見た夢だ。

でも、その結末がちがっていた。あの頃は、追ってくるなにかから逃れるために、拓也は、いつまでも一人で走っていた。今の夢の中では、誰かが手を引いてくれたのだ。その手の力強さ、温かさに、拓也は不安から逃れることができた気がした。

今のは、誰だったのか……？

拓也は、夢の中で最後に見た顔を思い出そうとした。と、すぐに、昨夜、歩道で見つめ合ったときの琴美

の顔が浮かんだ。

そうか。ゆうべ、あんなことがあったから、こんな夢を見たんだ。

そう感じると同時に、あの時の胸の高鳴りがよみがえってきた。

あのドキドキは、何だったのか……？

しかし、そんな疑問は長くつづかなかった。次の瞬間、思い浮かべていた顔がすっと揺らぎ、別の人物に

変化したのだ。

柳田だった。

：：あつ、いけない。

拓也は、ちよつと焦ってベッドから身を起こし、机の上の目覚まし時計を見た。

七時四十五分。

その表示に、いったんは安心したようにため息をついたが、それでも拓也は、すぐにベッドを出た。

柳田は「土曜の朝、電話する」とだけ言っていた。

さすがにこんな早い時間ではないだろうが、それにしても、いつかかってくるかわからない。それまでに出かける準備を整えておいた方がいいだろう。

そう思い、洗面台に向かって歯ブラシをとったところで、拓也はちよつと手を止めた。

鏡の中の姿は——いつもの朝同様、パジャマ代わりの古Tシャツを着ているのだが——、メイクもしてい

ないのに男には見えないのだ。染めた髪と、カットした眉のせいだ。

これじゃあ、もう、ふだんでもはつきりした男物は着られないかも……。

そう感じ頬をなでた指には、昨日塗ったピンクのマニキュアが残ったままだった。

シャワーを浴び、髪を乾かしてブローしたあと、拓

也は、ミラーの置かれた机の前に座った。昨日の実香のレクチャーをひとつひとつ思い出しながら入念にメモイクする。

一人で昨日と同じようにできるか心配していたが、まずは満足できる仕上がりになった。

それにうなずいて、立ち上がった拓也は、オイルブラとショーツをつけた。

これまで、休日にはこんなものはずけずに過ごしてい

た。だから、湿気の多いこの季節でも、数少ないブラとショーツだけでなんとか順に回すことができていたのだ。でも、これからは、そうもいかないかもしれないらしい。

やっぱり、もう少し買いそろえた方がいいな。

ブラのホックを留めながら、拓也はそう思った。

そのあと、昨日買ってきたカットソーを着、スカートを履いた。

ノースリーブのカットソーは白で、シンプルなデザインのものだ。これを着るため、先刻シャワーを浴びたとき、拓也は脇毛を剃っていた。両腕を頭の後ろで組むようにしてもう一度鏡に映して確かめると、涼しげな脇の下がのぞいた。

ただ、今日はどんよりと曇った梅雨空のようだ。雨でも降ればちよつと肌寒いかもしれない。そうは思ったが、髪の色と合っている気がして、やはりこれを着

ていくことにする。

スカートは、オリーブ色の地にボックスプリーツが入ったミニだ。膝上二十センチ近い。これまで、こんな短いスカートを履いたことがなかったから、買うときはためらったのだが、実香に「ぜったい似合うから」とすすめられ、選んだ。

履いてみると、確かに、これも髪の色と合っていた。腿のあたりまで脚が見えているのが気になり、拓也

は、そこでいったんパンティーストッキングを履いたのだが、カットソーの薄さとちぐはぐな気がして、思い切って、ナマ脚でいくことにした。

そのあと、やはり昨日買った小さな星形のピアスをつけたところで時計を見ると、九時半近くになっていた。

そこで、やることがなくなってしまうた拓也は、また、なんとなく鏡の前に座り、自分の顔を眺めて過ご

した。微笑んだり、すねた顔をしてみたり、いろんな表情をつくった末、もう一度、アイメイクに手を入れたりした。

机の上のデジタル時計が十時きっかりに変わった時、携帯電話が鳴った。

「……はい」

「おはよう。どう？　出られる？」

柳田は、いきなりそうきいてきた。

「え、ええ」

拓也がおずおずと答えると、つづいて柳田は、思ってもみなかったことを言った。

「じつは俺、もう、車で琴美ちゃんのマンションのそばまで来てるんだ。よかったら、部屋まで行こうか？」

「……えっ？」

拓也は一瞬絶句し、すぐに言葉をつづけた。

「い、いえ。あたしの方から出ていきます」

柳田は、会社の帰りに何度かタクシーで送ってくれた。だから、琴美のマンションの場所はわかっている。それで、今日は自分の車で迎えに来たということだろう。ただ、それは、あくまで「琴美のマンション」なのだ。部屋まで来られたら、大変なことになる。拓也は焦った。

「い、今すぐ出ていきますから」

さらに念を押すと、柳田は、「そう。じゃ、待って

るから」と、どこか残念そうな響きをにじませて電話を切った。

とりあえず、そう応対したものの、拓也はさらに焦った。

柳田は「そばまで来ている」と言ったが、それは、どのくらい「そば」なのだろう。もしかすると、すでにマンシヨンの前まで来ていて、そこから電話してきたのかもしれない。「待ってるから」と言ったところ

をみると、きつとそうだ。

とすると、このアパートの玄関を出て、ブロックをまわって通りに入るのでは、おかしなことになる。マンションの玄関からでなく、ちよつと離れた脇道から姿を現すことになるからだ。

猛スピードで頭を回転させ、そう考えた拓也は、玄関まで走り、今日履いていくつもりでいたサンダルを拾い上げると、とつて返してベッドの上に飛び乗った。

そこに置いてあつたバッグをつかみ、窓を開け、琴美の部屋の窓をノックする。

琴美がなかなか顔を出さないので、拓也はさらに焦つた。ああは言つたが、早くしないと、しびれを切らした柳田が部屋まで来ないとも限らない。

：：もう、なにしてるんだらう。

待ちきれずもう一度ノックしたところで、やっと窓が開いた。

「……あ、おはよ。なに？」

琴美がのんびりと言った。まだパジャマのままであるところを見ると、今起きたばかりのようだ。

「あ、あの、悪いけど、ちよつと、そつちから出させて」

あいさつも返さずそう言うと、拓也はすでに窓枠に足をかけていた。

「ど、どうしたの？」

驚いている琴美をよそに、琴美の部屋に飛び降りた拓也は、あわてて部屋を横切り、玄関のドアへと向かった。

「……ごめん。事情は後で話すから」

——と言ったって、この「事情」、どう話せばいいんだ？

そんな思いが頭をかすめたが、拓也は、とりあえずサンダルを履き、足首のストラップを留めようとした。

でも、焦っている分、スナックがうまくはまってくれない。厚底で、しかもヒールが高くバランスがとりづらいのだ。その上、ミニスカートだから、しゃがむこともできなかつた。

と、その姿をあ然と見ていた琴美が、なにか思いついたように言った。

「あ、そうだ。あのさあ、男物の普段着……たとえば、夏物のブレザーとボタンドアウンのシャツとか、持って

ない？」

「う、うん。あると思うよ」

やっとストラップを留め終わった拓也は、適当に答えていた。

「借りてもいい？」

「窓、開けたままだから、勝手に入って、使って」

部屋を出ながら、拓也は、意味など深く考えず、そう返事した。

マンションを飛び出すと、やはり、目の前の歩道に寄せてグレイメタリックのカーペファイアットが停まっていた。そして、その車体にもたれるようにして長身の柳田が立っていた。

「やあ」

ふだんの背広とは違うTシャツにジャケット姿だ。

動揺を必死に抑え、にっこり笑って会釈した拓也は、

できるだけ普通の反応をしようと思い、言った。

「すごーい」

その車に驚いたからでもあった。

と、柳田の方も、ちよつと驚いた表情で「琴美ちやんこそ、すごーいよ」と言った。

「えっ？」

「いや、いつも会社で会うときと、全然違うから。髪、染めたの？」

「え、ええ」

「すごく似合ってる。かわいいよ」

柳田は、そう言いながら、さらにまぶしそうに眺めてくる。

直前まで焦っていて、自分の髪や服装のことを忘れていた拓也は、その視線にどぎまぎとし、自然に顔が上気した。柳田がずくそれに気がついてくれたことが、どこかうれしい気もした。

と、柳田は、車の助手席のドアを開け、「さあ」と拓也を招き入れた。

ミニスカートであるぶん——それに、車高が低いぶん——、乗り込むのに気を遣った。映画などのそんなシーンを思い出し、腰から先に座席に入り、そのあとで揃えた足を車内に引き入れるようにした。どうやら、うまくできたようだ。

外からドアを閉め、回り込んで運転席に乗り込むと、

柳田は、シートベルトを締めながら「きのう、早退したみたいだけど、だいじよぶだったか？」と聞いてきた。

昨日の午後、会社に電話して知ったのだろう。

髪を染めているのだから、柳田にずる休みがばれてしまったと思い、とがめられたような気がして、拓也は「え、ええ」と小さく答えた。と、柳田は、そんなことを気にもとめていないという顔で窓の外を眺め、

話題を変えた。

「一階なんだね」

部屋のことを言っているのだ。マンションの正面側は、廊下が吹き抜けになっているから、柳田は、拓也が部屋を出てくるところから見ているにちがいない。

やっぱり、こっちから出てきてよかったな。

拓也はそう思ったが、同時に、柳田に（琴美の）部屋の位置まで知られてしまったことに、いよいよ困っ

たことになったと感じた。今後、そのことで、またいろいろとごまかさなければならなくなるのだろう。

さっきの電話の様子では、なんだか部屋まで来たそうにしていたし……。

「焦らせちゃって、悪かったかな」

ギアを入れながら、柳田はそう言い、また、さっきと同じ言葉をつづけた。

「でも、だいじよぶだったか？」

今度の「だいじよぶだったか？」の意味がわからず、拓也は聞き返した。

「えっ、なにが……ですか？」

「ドアの鍵もかけずに出てきたような気がしたから」

「あ、……え、ええ。オートロックなんです」

もう、「ごまかし」が始まっていた。

静かなエンジン音のわりに強い加速感が、ノースリーブの拓也の肩をシートに押しつけた。

今のは、何だったんだ？

パジャマ姿のまま、部屋の中央に立ち、琴美は、まだポカンと拓也の出ていったドアを見ていた。

もちろん、寝起きにいきなりの、拓也のわけのわからない行動に対してそう思ったのだが、じつは、それだけではなかった。

……まったく、ゆうべから、あの子の姿には驚かさ

れっぱなしだ。

昨夜、髪を染めメイクを変えた顔を窓越しに初めて見たときも、あのファミレスでまじまじと見たときもそうだったが、帰りに、街路灯の下で見た拓也の表情にはかなりどぎまぎした。

ちよつと上目遣いの大きな瞳で、すぎるように見つめてくるその顔に、琴美は、なんだか、そのまま抱きしめてしまいたいような衝動さえ覚えたのだ。

そして、さっきのノースリーブとミニニスカート……。琴美の目には、昨夜の拓也の顔とともに、先刻、窓から飛び降り、目の前を駆け抜けて行った素肌の肩や脚が焼きついていた。

「それにしても、男なのに、なんであんなに脚きれいなんだ」

思わず独り言が出た。

それが、あきれてのことなのか、それとも女として

の嫉妬なのか、あるいは、何か他の感情なのか、自分でもよくわからないまま、琴美はかすかに首を振り、やっと我に返った。

振り向くと、目の前の窓が開き、さらに、拓也の部屋の窓も開けっぱなしになっている。

「もう、あの子、なに考えてんだろう？」

また独り言を言いながら、琴美は、窓に近づいた。

やっぱり、戸締まりしておいてあげた方がいいよね。

そう考えてから、琴美はすぐに、じつはそれが無理なことに気づいた。

窓は内側からしか鍵がかからないのだから、拓也の部屋の窓の戸締まりをするには、あちらの部屋に入らなければならぬ。すると、今度は玄関のドアを通って出ることになる。その戸締まりをするためには、部屋の鍵がいのだ。

窓から出入りできることもあって、お互い、部屋の

鍵までは交換していない。

こんな時のために、やっぱり、スペアキーも預かつ
といた方がいいな……。

さつき拓也に言いかけた用件もあつて、どのみち今
日は、向こうの部屋に入らなければならぬと思ひ、
琴美はそう考えた。

今日は、たぶん、ゆかりと会うことになる。まさか、
休日まで背広姿はないだろう。

それで、拓也から、カジュアルな男物の服を借りるつもりでいたのだ。

「どれにする？」

「柳田さんは？」

何本かの映画のポスターと上映時間が掲示してある切符売り場で、拓也と柳田は、お互いに聞きあつた。

午前中は映画でも見ようということになり、ホール

がいくつもあるコンプレックス形式のこの映画館に来たのだ。

「ほんとのこと言えば、俺、これ見たいんだけどさ。どう考えても女の子の好きな映画じゃないしな。だから、琴美ちゃん選んでよ」

柳田は、ハードなSFアクションが話題になってる映画のポスターを見ながら、そう言った。

それは、じつは拓也も前から見たいと思っていたも

のだったのだが、柳田にそんなふう言われ、逆に、「これがいい」とは言い出しにくくなった気がした。それで、ちよつと迷ったが、「じゃあ、これ」と、ニューヨークを舞台にした恋愛映画を指さした。

……えっ、僕、泣いてる？

頬に涙が伝ったのに気づき、拓也自身が驚いた。

映画を見て泣くなんて、何年ぶりだろう。それも、

こんな大甘の恋愛映画で。

ミニスカートの前を隠すように膝に置いたバッグからハンカチを出しながら、拓也は自分でもあきれてしまった。

前半の男女の出会いを描いた部分は、むしろ「やっぱり、かったるい映画だな」くらいにしか思っていないなかつた。それが、恋に落ちた主人公二人が、あれこれの行き違いでけんか別れしたあたりから、けっこう真

剣に画面を見つめていた。そして、他の人との恋愛や仕事上で傷ついた二人が、最初に出会った場所でふたたびめぐりあうシーンまで来て、涙があふれたのだ。

アイメイクが崩れないように気にしてハンカチで涙をおさえ、一方で画面を食い入るようにつめながら、拓也は、自分がこんなふうになってしまったのは、いつのまにかヒロインに感情移入していたからだど気がついた。そして、それはたぶん、こんな格好で映画

を見ているせいだとも思った。

と、その時、隣の席の柳田が、ちらりとこちらを見た気配があり、ちよつと体を動かした。それと同時に、バッグに添えて膝に置いた方の手に、なにかが触れるのを感じた。

柳田が手を伸ばし、掌を重ねてきたのだ。

……えっ！

手を握られ、拓也はまた驚いたが、振り払うことも

逃げることもしなかつた。

その手に、今朝の夢と同じ、力強さと温かさを感じたからだ。

そのおかげで、むしろ拓也は、自分自身の涙に対する違和感も忘れ、安心して、ヒロインとともにハッピーエンドを迎えることができた。

傘をたたみながら階段を下り、ビルの地下にあるコ

―ヒー専門店に入りかけたところで、琴美は、ガラスドアに映った自分の姿を確かめた。

ダンガリーシャツにチノパン、そして、エンブレム入りの紺ブレザー。

なんだかデザインが古い気がするけど、しかたないか。

拓也の部屋にあったカジュアルな服は――社会人になつてから男物を買っていないせいだろう――、今ふ

うのストリートファッションがほとんどで、トラッドな組み合わせは、これくらいしかなかった。ユニセツクスなストリートファッションでは、逆に、女であることがばれそうな気がして、琴美はこれを選んだのだ。

季節から言えばシャツだけでも十分なのにブレザーを羽織ったのも、体の線が出ることを用心したからだ。まあ、外は先刻からしとしとと雨が降り出していたから、ちようどよかった気はするが。

店内に入ると、ゆかりは、壁際の席で腕を組むようにしてテーブルのコーヒーカップを見つめていた。会社で見るとは違うワンピース姿だったので、いつもより若い感じはするが、表情は逆に、いつもより沈んで見えた。

しかし、琴美が近づくと、すぐに気づいたようで、顔を上げ笑いかけた。

「すぐわかった、ここ？」

「ええ」

席に着いた琴美は、注文を取りに来た店員が立ち去るのを待って、さっそく、身を乗り出すようにして聞いた。

「で、どうでした？」

と、ゆかりは表情を曇らせ、かすかに首を振った。

「……ん？」

どういふことなのかわからず首を傾げた琴美に、ゆ

かりは、脇に置いたバッグを取り、その中から白い封筒をちらりと覗かせた。

「辞表、預かってきた」

「えっ！」

「辞めるにしても、自分で持って来たらって言ったんだけど、中村課長の顔、もう見たくないからって」

「でも、いきなり辞めるなんて……。どうして、止めなかったんですか？」

琴美が言うのと、ゆかりは、今度は怒ったような顔で琴美を見返した。

「……すみません。当然、止めたんですよね」

「ええ。でも、止めきれなかった。たとえば、どこか他の部署に移ったとしても、もう、うちの会社じゃ、ふうに働けないって言われちゃって。それに……、じつは、私に知られたこともショックだったみたい」

ゆかりはそう言って、唇をかんだ。

「……そうですか」

琴美も、うつむいて、ため息をついた。

「まだ入社して三ヶ月だし、今なら、これまでのこと
引きずらずにやり直せるだろうって、私も思ったし：

」

そのゆかりの言葉に、琴美は、亜莉沙自身にしても、
また、ゆかりにしても、考えた末の結論なのだろうと
思い、返す言葉を失った。

しばらくの間、二人とも、黙ってテーブルを見つめていた。

しかし、琴美は、自分の中で次第に高まってくる憤りに、「でも……」と口に出した。

「中村課長は、どうなるんですか？」

と、ゆかりが、ちよつと自嘲的な笑いを浮かべた。

「……さあ。お相手がいなくなつて残念だらうけど、ある意味、安心するんじゃない。辞めたんなら、あき

らめもつくし、家族や会社に隠す心配もなくなるし」

「だけど、それじゃあ……」

「磯村さんが訴える気になれば、裁判で十分に勝てる話だけどね。でも、まだ二十歳だし、そんなことすれば、将来が台無しになる。それに、もちろん、会社も喜ばないでしょうね。人事課員としては、そんなことすすめられるわけもない」

ゆかりの口調は、どこか投げやりな感じさえした。

自分の無力さに、やりきれない思いを抱いているのだらう。

そのあと、また黙り込んでしまったゆかりを、琴美はただ見ていることしかできなかつた。

琴美がコーヒーを飲み終わった頃だつた。ゆかりが「外に出ない？」と言つた。

「この店、窓がないから、息が詰まりそう」

それは、なにより、今のゆかりの気持ちを表してい

るのだらうと、琴美は感じた。

午後から雨の湾岸道路をドライブしたあと、ふたたび都心に戻り、ファッションビルの中のパーラーで話しているとき、また、柳田の携帯電話が鳴った。車の中でも何度か——それに昼食に寄ったレストランでも——かかってきたから、これで四度目か五度目だ。

「ごめん」

柳田は、うんざりしたような顔で拓也にそう言って、携帯を耳に当てた。

「柳田です。……あ、お世話になってます」

そのあと、柳田はしばらく、相づちを打ちながら相手の言葉を聞いていた。さっきまでとはちがう、仕事の顔になっている。

ある程度相手にしゃべらせたあとで、柳田はやっと口を開いた。

「……ちよつと待ってください。『もうは、まだなり』
つて言うでしょ。もう少し、がまんしましょうよ。：
：ええ、わかってます。でも、今は、どの建て玉も逆
ざやになってるんです。要するに、円高だからですよ。
中国の異常気象と南米の紛争の方が、材料としてはま
ちがいなく強いはずです。為替は来週には必ず反転し
ますから、もう少し眺めた方が……：そうですか、わか
りました。寄り付きで売りに出ます」

電話を切ったあと、柳田は、さらにうんざりしたようにため息をついた。

「今度のは、近藤さん？」

拓也がきくと、柳田はちよつと驚いたように、「よくわかるなあ」と言った。

「トウモロコシの短期物をやつてて、せっかちなお客さんっていったら、近藤さんかなと思って。月曜朝イチで売り注文ですね。枚数指示してくれば、あたし、

やっときます」

「今の電話の応答だけでそれだけわかりやあ、アシスタントとしては一人前だよ。もう、俺のやってること、全部見透かされてる感じだな」

「そんなことないですよ。だいいち、休みの日にもお客さんからこんなに電話が入るなんて、あたし、全然知りませんでした」

拓也がそう言うと、柳田は、携帯をしまったポケット

トをポンとたたたく仕草で「まったくな。初めてのデー
トだっていうのに」と言った。

拓也は、それにちよつと照れて笑ってから、いつも
疑問に思っていたことをきいた。

「でも、柳田さんって、お客さんの売り買いの注文、
ずいぶんとめますよね」

「そうでもないさ。俺たちの商売、注文受けてなんぼ
なんだから」

「だけど、他の営業の人見てると、お客さんから注文の電話入っただけで、もう、にこにこですよ」

「けつきよく、客は、最終的な損得でしか判断してくれないからな。自分で注文出して損しても、こっちのせいにする。目先の手数料ほしさに、客の言いなりになってるようじゃ、相場屋としては半人前さ」

「時にはお客さんに嫌われても、長い目で見た信頼の方が大事……？」

「ふ、それほど、きれい事じゃないさ。せっかくつかんだ客、離したくないだけ。だから、客がどうしてもって言えば、無理強いはしない」

確かに、そんなところが、柳田がトップセールスとしてやっていられるコツなのだろうと、拓也は思った。「もちろん、琴美ちゃんにだって、無理強いはしたくないよ」

「……えっ？」

柳田の言ったことをつながりがよくわからず、拓也は、その顔を見た。

「つまり、それ、俺の下心だなんて、勘ぐらないでほしいんだ」

柳田はそう言って、テーブルの上に置いた拓也の腕を指さした。

その手首には、プラチナのブレスレットがはまっている。先刻、このファッションビルの宝石店で柳田が

買ってくれたものだ。

「でも、こんなに高いもの……」

拓也は、そう言っつて、また困惑気味に自分の腕に目を落とした。

もちろん拓也は固辞したのだが、柳田は有無を言わず、店員にクレジットカードを渡していた。

「琴美ちゃん、なんだか欲しそうに見てたし、それに、よく似合ってる」

確かに、そのブレスレットは、拓也の白い肌の手首を細く見せていた。アクセサリなしではどこかさみしく見えるノースリーブのカットソーを、引き立ててもいた。

「ここんどこ、買い基調で攻めてたのに、逆ざやで、ついてないなと思ってたんだ。でも、今日、琴美ちゃんのおかげで、やっぱり俺はついてるんだって思えたから、そのお礼さ」

「……ついでる？」

また話を変えた柳田の言葉に、拓也が聞き返すと、柳田は笑いながら、こうつぶけた。

「どうしようもない女の子だと思ってた新しいアシスタントが、仕事をやらせたら、かなり気の利く子だった。しかも、デートに誘ってみたら、びっくりするくらい美人になって現れた。逆ざやどころか、予想以上の大暴騰だったってこと」

「……」

その言葉に、拓也はまた、顔を伏せたまま赤くなつた。

と同時に、ちよつと不安にもなっていた。

柳田は、確かにトップセールスだ。「下心」を否定しながら、しつかり「下心」の存在をアピールしている。昨夜、実香が言っていたような「力づく」の「無理強い」はしないだろうが、いつかそのセールス――

クに負けて、自分の方から「いいわ」とうなずいてしまいそんな気さえした。

もちろん、男である自分に、そんなことはできるはずもない。

誘われるまま、のこのこ出てきてしまったが、こんな「火遊び」は、早めにやめた方がいいかもしれない。

と、そう思っていることが表情に出たのだろう。柳田が、さらに言った。

「だいじょうぶ。俺、ぎりぎりまで待つタイプの相場師だから」

プラチナのブレスレットは、ガラス越しの雨空の光をめいっぱい、しかし、柔らかく集めていた。

公園の池沿いにつづく遊歩道を歩いていたゆかりが、急に立ち止まった。

朝、家を出てきたゆかりは、傘を持っていなかった。

それで、琴美は、先刻から自分の傘をさしかけ並んで歩いていたのだが、自分だけ先に行きそうになって、あわてて足を止めた。

ゆかりが濡れないように、振り向いて傘を差し出すと、ひとつの傘の中で向かい合う格好になった。

見ると、うつむいたゆかりの肩が、かすかに震えている。

「どうした？」

琴美が聞くと、ゆかりは、少しだけ視線を池の水面の方に移し、言った。

「彼女、昨日休んだの、病院に行ってたんですって」
亜莉沙のことだ。

「……病院？」

「産婦人科」

「……え？」

「ずっと用心はしてたらしいけど、初めての時に、も

う……」

「初めて……花見の……？」

「そう。それがわかって、おとといの夜、彼女、迷った末に言ったらしい。そしたら、中村課長が、墮ろせ
って……」

琴美は言葉を失っていた。さらにそんなことがあつたのだとすれば、亜莉沙が会社を辞める決心をしたのも理解できた。

もちろん、琴美自身に経験はないが、墮胎がどれほど心を傷つけるものか、女の琴美にはよくわかる。

それにしても……。

琴美は、亜莉沙がそんなつらい目をみていた昨日一日、——おそらくそれを知っていながら——会社でなに食わぬ顔で過ごしていた中村を思い出していた。

やるかたない憤懣が、心の中でくすぶった。

……女は、悲しい。悲しすぎる。

と、目の前のゆかりの肩が、さらに激しく震えだした。泣いているのだ。

「女って、悲しい」

ゆかりは、まるで琴美の思っていることを言い当てるように、涙声で言った。

琴美は、傘を持つ手をゆかりの背中側にまわし、そつとその体を引き寄せた。

ゆかりは、一瞬、体をこわばらせたが、すぐに琴美

のブレザーの肩に頭を預けてきた。

雨の公園には、二人の他、誰もいなかった。そのせいもあつたのだらう、ゆかりは声をあげて泣いていた。

さらしを巻いた胸のシャツの上に、ゆかりの手が当たられているのが気にはなつたが、琴美は、あいている方の手も背中にまわし、ゆかりを抱きしめた。

自分自身が泣きたかつたから、そのぶん、ゆかりに思い切り泣かせてやりたかつた。

日の長い六月とはいえ、雨のせいでふだんより一時間ほど早く暗くなり始めた街に、ついたばかりの街路灯の白い光が、ぼんやりとかすんでいた。

この服、やっぱりちよつと早すぎたな。

拓也は歩きながら、一方の手のひらを、ブレスレットをした方の手の二の腕あたりにあてがった。細かい雨のしぶきがかかるせいだろう。その肌は気温以上に

冷えている。

ミニスカートの方の脚の方もそうだ。すれ違う人が跳ね上げる雨水が、くるぶしや、時にはふくらはぎあたりにもかかったし、それに、濡れた舗道に厚底のサンダルでは、足もとも心もとない。

ファッションビルを出たあと、どこかで食事しようということになり、拓也と柳田は——街中でもあつて車を駐車場に停めたまま——、レストランを物色して

いるのだ。

と、その時、傘の骨の先から落ちた滴が、むき出しの肩にぽとんと落ちた。長身の柳田とひとつ傘に入り、しかも遅れ気味についていくせいで、どうしてもこういうことになる。

六月の雨だからひどく冷たかったわけではないのだが、その滴が肩から背中にもわったことで、拓也はびくりと身震いした。

と、柳田がそれに気づいたようだ。

「あ、ごめん」

そう言うと、柳田は、傘をさらにさしかけるようにし、それと同時に、片方の手を、今しがた雨粒が落ちた拓也の肩にのせて、歩調を合わせた。

結果、柳田に肩を抱かれた形になり、拓也は緊張した。なんといつても、裸の肩を握られているのだ。

それでも、拓也は、それをいやだとは思っていないか

った。柳田の手のひらはやはり温かく、肌に心地よかつた。

男にこんなことをされている自分に心の中で照れながらも、拓也は、雨の街で温かい腕に包まれている感覚を、どこか楽しんでいた。

そういえば、さつき見た映画にも、こんなシーン、あつたな……。

「何時まで、いいの？」

柳田が聞いてきた。

「え：：ええ。八時には家へ帰りたい。見たいテレビもあるし」

時間が遅くなれば、さらにこんな感覚が増してくる気もして、拓也は警戒しながら答えた。

「そう。じゃ、イタメシだな」

柳田は、拓也の素っ気ない答えにこだわる素振りも見せず、あっさりそう言うと、肩を抱いた方の手にさ

らに力を込め、角を曲がるように誘導した。

拓也はまた、その力にどぎまぎした。

と、その時だった。

ちようど、拓也たちと反対向きに角を曲がろうとした人たちとぶつかりそうになったのだ。

やはり、ひとつの傘に二人で入ったカップルだった。

「あ：：：」

お互いどうしが驚いて足を止め、そこで顔と傘をち

よつと上げ、前のカップルの顔を見た。

「……あ」

四人が四人とも、また、驚いて声を上げていた。

前の二人は、琴美とゆかりだった。

「えーっ!？」

むこうも、琴美がゆかりの肩を抱いている。

四人とも、目を合わせたあと同時に目を泳がせ、そしてまた顔を見合わせ、しばし絶句した。

「……な、なんか、お互い、まずいとこ見られちゃった感じだなあ」

まず、柳田が、そう口を開いた。

「……え、ええ」

驚きの中にもどこか複雑な表情を残していたゆかりが、無理して笑顔をつくる感じで答えた。

「つまり、そういう……こと？」

「い、いえ、べつにそんな……でも、そっちも」

二人はさらに、まともな文章になっていない会話を交わした。

そんな会話を聞きながら、拓也はまだ呆然としたまま、琴美たちを見ていた。本来なら襲ってくるはずの、琴美にこんな現場を見られたことへの恥ずかしささえ感じず。

琴美もまた、ゆかりの肩から手をはずすことも、照れ笑いすることも忘れたように、拓也の顔を見返して

きた。

「それにしても、さっきは焦ったよな」

夜の幹線道路を走る車の中で、柳田がまた言った。

あのあと、イタリアンレストランで食事をしていた時もそうだったが、どうしてもすぐ、その話題になるのだ。

「休みの日に会社の人間に会うことだって珍しいのに、

カップル同士でばったりだもんな」

その言葉に、助手席の拓也は、どこか浮かぬ顔でうなずいた。

ハンドルを握る柳田は、そんな拓也の顔をちらりと見やっってから、ちよつと考え込むようにした。そして、こうつけ加えた。

「でも、べつに気にすることないんじゃないか」

「……え？」

「やつらだって、二人連れだったわけだし」

「……？」

先刻からずっと、頭の中の考えがまとまらない状態がつづいている拓也は、柳田の言葉の意味がとっさにはわからず、首を傾げた。

「社内で言いふらしたりはしないさ」

「あ、いえ、そういうことじゃあ……」

「でも、それを気にしてるんだろ。夕めし食ってると

きから、なんか元気ないからさ」

「そんなこと、ないですけど……」

拓也はまた、煮え切らない感じでそれを否定した。

たしかに、相合い傘で柳田に肩を抱かれて歩いている姿を、あの二人に見られたことはショックだった。

ことに、こちらの正体をよく知っている琴美に、あんな姿を目撃された恥ずかしさは強い。

でも、先刻からの動揺は、どうもそれだけではない

気がした。

拓也の頭の中には、自分自身が見られたということより、むしろ、自分が見た光景の方が強く残っている。

ゆかりの肩を抱く琴美——柳田がそれを話題にするたびに、そのシーンが何度もフラッシュバックされてくる。そして、そのたびに、自分でもつかみきれない感情がわき上がって、心が波立つのだ。

拓也は、そんなわけのわからない動揺を抑えようと、

目をフロントガラスに戻し、前方を見つめた。

対向車のライトが濡れた路面に反射していたが、いつのまにかワイパーが止まっている。雨は上がったようだ。

「でも、あの二人、そうとうデキてる感じだったよな」
「……え？」

その言葉に、拓也はふたたび柳田の方に目を戻した。
あの時の琴美たちの像が、ふたたび頭に浮かんだ。

「最初ぱつと見たとき、二人とも、どっか深刻そうな感じだっただろ。それに、大沢が、三谷君の肩、まるで守るみたいに抱いてた。三谷君だって、あんな甘えたような顔、会社じゃ見たことないしな。大沢の方が後輩なんだし、昨日今日のつき合いじゃ、たぶん、あはならないだろ」

柳田さんも、やっぱり、そう感じたんだ……。

拓也は、柳田の言葉で、先刻から自分の中でくすぶ

っていた思いが、やっとまとまりかけた気がした。

先刻の琴美とゆかりの二人の姿は、どう見ても「親密な男と女」だった。

拓也は、なにより、それにショックを感じていたのだ。

あの二人は、いつの間にあんなふうになっていたんだらう。僕の知らないところで……。

実香を除けば、今の琴美の正体を知っているのは自

分だけだ。だから、琴美のことは、すべてわかってい
るつもりでいた。それなのに今日、自分の知らなかつ
た姿を突きつけられた気がした。それが、心が騒ぐ原
因だった。

しかも、ゆかりの肩を抱く琴美の姿は、優しさと包
容力に満ちた「男」そのものだったのだ。

亜莉沙のことはあんなに避けていたのに、ゆかりさ
んとはあんなこととして……。いったい、どういふつも

りなんだろう？

そんな考えにとらわれていたせいで、車が停まったのさえ気づかなかったようだ。

「着いたよ」

柳田の言葉に、見ると、すでに琴美のマンションの前だった。

「八時二分钟前。タイムリミットぎりぎりだな。この車がかボチャに変わる前に、なんとか間にあっただってわ

けだ」

その冗談に、やっと我に返った拓也は、「それって、シンデレラの化けの皮がはがれる前につて、ことですよね」と返した。

「ふふ、じゃあ、そのサンダル、片いっぽう置いてつてくれないかな。来週、会社へ行つて、誰だったのか、探してみるよ。ほんとに、今日の君は、シンデレラみたいだった。楽しかったよ」

それに照れながら、拓也は、腕のブレスレットを示して微笑み返した。

「こちらこそ。それに、これ、ありがとうございます
た」

そんなふうには、二人は助手席と運転席で見つめ合っ
た。

拓也は、さつきまで抱いていた琴美に対する疑念さ
え忘れ、今日、映画を見ているときから何度も感じた、

どこかロマンチックな感情に引き込まれそうになつた。

と、次の瞬間、冗談めかしていた柳田のまなざしに、ちよつとマジな光が混じつた。

あ、まずい……。。

そう感じた拓也は、すかさず「じゃあ」とその視線を振り切るように向きを変え、ドアのレバーに手を掛けた。たしかに、これ以上進めば、シンデレラの正体

が露呈するシチュエーションにもなりかねない。

ドアから出るとき、もしかしたら後ろから抱きしめられるのではないかとちよつと不安を感じた——そんな気配もたしかにあつた——が、やはり、柳田は「無理強い」する気はないらしく、「じゃ、また月曜に」と声を掛けてきた。

そんな柳田の様子に、今度はちよつと後ろめたいものを感じながら、車外に出た拓也は、「おやすみなさ

い」と言って、マンションのエントランスへと向かった。

ところが、そこで困ったことに気がついた。

拓也の背後で、柳田の車が発進する気配がないのだ。どうやら柳田は、今朝と同様、拓也が部屋に入るまで見送るつもりらしい。

琴美が先に帰っていればいいが、そうでなければ、玄関ドアは開かない。いや、たとえ帰っていたにして

も、ドアの鍵はかけているだろう。

道路とマンションの間はある程度の距離があるから、後ろ向きでドアの鍵を開けるふりはできるとして、でも、そのあと、どうしたらいいのか……。

エントランスに入ったところで、もう一度振り向いて微笑み返ししながら、拓也は必死に頭をめぐらせた。

外の廊下に、サンダルらしい足音が聞こえた。

トレーナーとジーンズに着替え、ベッドに腰掛けていた琴美がそちらを見やると、思った通り、灯りを消したキッチンの小窓を影が通りすぎ、足音が玄関ドアの前で止まった。

そのあと、ドアノブのあたりががちゃがちゃ揺れる音がし、ドアが開いた。

顔を見せた拓也は、一瞬、ほっとした顔でこちらを見た。そして、すぐに廊下の向こうの道路に向き直り、

手を振った。ふたたび振り向いた時には、道路にいるはずの人に向けた無邪気な笑顔のままだった。

部屋に入りドアを閉めるその顔を見て、琴美は、先刻から感じていたもやもやした気分が、腹立ちへと変わっていくのを感じた。

「よかった、ドアあけててくれたんだね」

拓也は、そう言いながら、ミニスカートのそろえた膝をちよつと折り曲げるようにして、サンダルのスト

ラップをはずした。その仕草が、妙にかわいらしい。琴美は、そのことに、なぜかよけいに腹立ちが募った。そして、言った。

「どういふつもりよ」

「……えっ？」

「ノックもなしにいきなり人の部屋に入ってくるって
いうのは、ちよつとひどいんじゃない」

「で……でも、そのつもりで、鍵をあけててくれたん

でしょ」

「冗談じゃないよ」

琴美は、思わずベッドを立っていた。

「だ：：だって、キッチンの灯りも消えてて、こっちの窓やドアからじゃ、中に人がいるのもわかんないよ
うになってたし。きつと、岡崎さんが気を遣ってくれたんだなと思って」

「なんで私が、そんなこと、気を遣わななきゃならない

のよ」

じつは拓也の言ったとおり、拓也が柳田に送られてくることを予感して、そうしていたのだが、琴美の口からは、そんな言葉が出た。

「ご、ごめん」

琴美の剣幕に気圧されて、拓也は、玄関のたたきに立ちつくしている。

「だいたい、なんで、会社の人をここまで来させるわ

「けよ。今朝だって、あれ、迎えに来てもらったわけだしよ。つまり、あんたが、この場所教えたってことだよ。会社の人間に秘密が知れたら、どうなるかわかってるでしょうが」

「う、うん。でも……しようがなかったんだ。成り行きで……」

「へえ、成り行きで、男とデートするわけ？ あんなふうにいそいそ出かけたりするわけ？」

琴美は畳みかけるように言った。言いながら、自身、なぜこんなにも、拓也を追いつめるような言い方をしているんだろうと、不思議に感じた。

「だから、誘われて、断り切れなくて……」

「あれが、断り切れなくてって感じかな。さつきだつて、まるで恋人同士だったじゃない。だいたい、わざわざ、そんな短いスカートで出かけるなんて、男の気を引きたいからとしか思えないよ。あんた、ほんとは

男のくせに、かつこよくて仕事もできる柳田さんなら抱かれないとか、思ってるんじゃないの」

「そ、そんな……」

琴美の言葉に、拓也は、うつむいて顔を真っ赤にしていた。それは恥ずかしいからというより、怒りをこらえている感じだ。

「まあ、あんたがなに思おうと勝手だけど、あんたと私は、いわば運命共同体なんだから、秘密でこそこそ

するのは、やめてほしいよ」

「で、でも、それは、そつちだって……」

「なによ」

「そつちだって、おんなじでしょ。知らないところで、
こそこそとゆかりさんとつき合ってたわけじゃない」
がまんできかないというように、拓也も反撃に転じて
きた。

「仲よさそうに、ゆかりさんの肩抱いたりして。そつ

ちこそ、恋人同士にしか見えなかつたけど。いつのまにか、僕の服持ち出したりしてさ」

「いつのまにかって：：、今朝、借りるってことわつたじゃない」

「そうだっけ。でも、どっちにしても、美人のゆかりさんと釣り合うようになって、わざわざ男っぽい格好で出かけたわけでしょ。それを棚に上げて、こっちの方向ばかり責めるのはおかしいと思う。少なくとも、あ

た……僕は、この服、自分で買ったんだから」

「あ、そういうこと言うわけ。こっちの給料使ってるくせに」

「えっ!? だって、それは、岡崎さんの方が……」

「そんなに服着られるのがいやだって言うなら、いいよ。こんなダサイ服なんか、すぐ返すよ」

琴美は、そう言うと、ベッドの上に置いてあった服を、拓也の足もとに放り投げた。そして、さらにタン

スを開け、数着の背広を取り出した。

「それに、これも、これも、もう返すから、持っ
て。もうじきボーナス出るんだから、明日の日曜に
も、自分のカードでまとめて買ってくるよ。それから、
私の方の服は、返してくれなくていいから。あんたが
着た服なんて、私、もう着る気ないからね。男のあん
たが着ただけでも気持ち悪いのに、その上、その服で
どこの男に抱かれたか、わかったもんじやないし」

いったい、私は、なにを言っているんだろう……。そうは思ったが、琴美は、もう自分自身がコントロールできなくなっていた。

と、琴美が投げ出した服を見つめていた拓也も、言葉を返した。

「こつちだって、こんなもの、返してくれなくていいよ。もう、男物なんて、着るつもりないから」

「あっそう。そういうことなの。好きな人ができて、

女の子として暮らしていくってわけね。そんなら、もう、二人であれこれやりとりする必要もないよね。窓から話したり、行ったり来たりするのも、もうやめよ。そうと決まれば、すぐ出てってよ、そのドアから。そんな、男に媚びることしか考えてないバカ女の顔なんて、二度と見たくないから」

吐き捨てるように言った琴美の言葉に、拓也はまた言い返そうとしたが、そこで、大きなため息をひとつ

つき、「わかったよ」と琴美の顔を一瞥すると、ドアをあけた。

「僕の方も、必要ない限り、話す気ないから。そっちも、好きにしたらいいよ」

拓也は、そう言って、出て行ってしまった。

琴美は感情の昂ぶりがおさまらず、しばらくそのドアをにらんでいた。

やがて、少し冷静になったところで、自分はいった

い、今なにを怒っていたのだらうと思った。

最初に拓也を責めていたことと、最後に出した結論とでは、論旨がずいぶんずれていたような気がする。

自分が腹を立てていたのは、どうやら、自分の知らないところで、拓也が柳田とつき合っていたこととだ。こんな暮らしをしている以上、そんな重大なことを秘密にしているのは、契約違反だと思ったのだ。

でも、それなら、二人の間を断絶するという結論は

筋が通らない。

それに……。

拓也が知らないところで誰かと親密な関係を持った
ということでは、昨日の実香とのことも同じだろう。

いや、実香には二人の秘密さえばらしていたのだ。

それなのに、昨日は、そのこと自体にはなににも腹が
立たなかった。今日は、なんでこんなに苛立つのだろ
う。

琴美は、自分の心がつかみきれず、しばらくそこに立ちつくしていた。

茶色の髪とミニスカートのがよく似合った拓也の姿が、やたらに脳裏にちらついた。

今朝、していなかったところをみると、あの高そうなブレスレットも、きつと柳田にねだって買ってもらったものにちがいない……。

そう思うと、わけのわからない腹立ちが、またぶり

返
し
た。
。

第9話

乱高下
らんこうげ

「暑っちー。もう、死にそう」

外から帰ったばかりの営業マンが、オフィスに入るなりそう叫び、壁の空調コンソールをのぞきこんだ。

それをちらりと見たデスクの拓也は、半袖ブラウスの上に着た薄手のカーディガンの襟を合わせるようにして、前の席の先輩女子社員二人を見やった。その女子社員たちも、うんざりした顔で見返してきたが、結局あきらめたように肩をすくめ、自分の仕事に戻った。もう少しすると、きつと二人のうちのどちらかがそっと立って行って、空調の設定温度を二七度くらいに戻すのだろう。でも、たぶん、すぐ次の営業マンが帰

つてきて、また二〇度前後にしてしまはずだ。

夏場になって以降、ずっと、そんな無言の攻防が繰り返されていた。

もう九月後半だというのに、今年は真夏日が続いている。炎天下、背広姿で客先をまわってくる営業マンたちに——たとえ全社的な省エネ令が出ていようと——正面切って文句は言えないのだ。なにしろ、この会社で稼いでいるのは彼らだ。会社のシステムそのもの

が彼らを中心に動いていることは、勤めて半年近くたつ拓也にはよく分かった。

でも：：、と拓也は思う。

彼らは、社内であれば、カッターシャツ一枚で袖をまくっていられるのだし、体が冷めれば、また背広を着ればすむ。いつも半袖ブラウスの夏服で冷房の吹き出し口の真下にいる女子はそうはいかない。だからみんな、しかたなくカーディガンを羽織ったり、膝掛けを

したりしているのだ。

そんな姿を毎日目にしていくはずなのに、男子社員たちは、いっこうにそれを気づかう素振りも見せない。あたかも男が基準になるのが当然だと言わんばかりに。

なにより、それがひどいと思う。

このカーディガンだって、売ってるところを探すの、大変だったんだから……。

男である拓也には、もちろん冷え性などないのだが、この冷房のせいで七月は体調を崩し、ひどい風邪をひいた。それで、盆休みに東京中の店をまわって、季節はずれのカーデイガンを探したのだ。

誰かに借りようかとも思ったのだが、実香は「そのうち名古屋支社に帰れるつもりでいたから、冬物、実家に送り返しちやった」と言うし、亜莉沙は夏前に挨拶さえなしに辞めてしまった。だから、頼むあてもな

かった。

もちろん、琴美なら、たぶんカーデイガンくらいは持っているのだろう。でも、それはぜったいにしたくない。

あの日言い争って以来三ヶ月近く、拓也は琴美といっさい口をきいていなかった。

むかしから人に対してさほど感情的になったりしない拓也だが、あの時の琴美の言いぐさだけは、今思い

出しても腹が立つ。

僕がこんな暮らしをしているのは、もとはと言えば、琴美の都合なのだ。それをまるで、僕が好きでやっているような言い方をされた。その上、僕が男を誘惑する「性悪女」とでも言いたげだった。自分の方こそ、ゆかりさんとなんだか親密な関係になっっているようなのに、そのことを棚に上げて……。あんなやつ顔なんて、もう見たくもない。

ずっとそんな感情がつづいている。

そして、そう思っているのは、どうやら拓也だけではないようだ。琴美の側から、拓也を避けている気が伝わってくる。

職場が同じなのだから、結局は毎日顔を見るわけだが、拓也だけでなく、琴美の方も視線を合わせてこない。課がちがうと、平社員の二人には仕事上話さなければならぬ用件もなかった。

家でもそうだ。九月とはいえ、毎日熱帯夜がつづいていたから、夜もほとんどクーラーを使っている。お互い窓を開けることもなく、だから、以前のように窓越しに顔を突き合わせることもない。

おまけに、拓也の側は、実香という「女同士の親友」ができたおかげで、通常は、服にしろなんにしろ、当初のように助けてもらおう必要もない。休日やオフタイムも含め、今ではほとんど女物を着て暮らしているの

だが、困ることはほとんどなかった。

ただ、そんな拓也の行動が矛盾を含んでいることもたしかだ。

冷静に考えてみれば、琴美との関係が断絶してしまつた以上、拓也には、もうこんな生活をつづけなければならぬ理由はどこにもないはずだ。

それなのに、こんなふうになっているのは、やはり、この暮らしに、どこか心地よさを感じているからだろ

う。

やっぱり、実香と、それに柳田さんとの今の関係を、こわしたくないってことかな……？

拓也がそんなことを考えているとき、ちやうど「ただいま」という柳田の声が聞こえた。今日はいつもとより早い。

柳田は、他の営業マンのように冷房の設定温度を気にしたりはせず、そのまま、まっすぐ拓也のデスクに

近づいてきた。

「おかえりなさい」

「これ、審査にまわしといて」

そう言ってカバンから書類を取り出した。

「また新規ですね。おめでとうございます」

口座契約書と売買注文書を受け取りながら、拓也はその内容に目を通した。最初からこれだけ大口の注文が出たとすると、この新規客も、やはりそうとうな資

産家にちがいない。

「近藤さんの紹介なんだ。だから、荒っぽい売り買いするかもしれない。もし俺のいない時に電話入ったら、すぐに連絡入れて」

「はい、わかりました」

拓也がそう言って、さっそくコンピュータに入力しようとする、柳田が、腰をかめるようにしてささやいた。

「今日、早く終われそうだから、また食事でも行かないか？」

「え、ええ……」

拓也は、そこでちよつと迷った。

あの最初のデート以来、すでに三度ほど休日にデートした。こんなふうに柳田が夕方仕事を終える時は、いっしょに食事に行ったりもする。その間、柳田は、あの日と同じように紳士的で、強引に迫ったりはして

こない。それで、拓也も安心しているのだが、一方で、このところ、二人で歩いている時、柳田は——そして拓也の方も——、肩に手を添えたりするのが当たり前になっていく。

そういう点では、もうぎりぎりのところまで来ている気がした。

それで、拓也は——じつはちよつと気をひかれながらも——柳田の誘いをことわった。

「すみません。今日は友達と先約があつて」

実際、実香と約束もしていたのだ。

「そう。じゃ、また今度」

柳田は、やはりそれ以上強引に誘う様子もなく、自分のデスクにカバンを置くと、山木課長のデスクに今日の報告に向かった。

拓也は、複雑な後ろめたさを感じながら、その姿を目で追った。

その時、二課の女子社員の「お帰り、どうだった？」という声が聞こえた。

見ると、オフィスの入り口を背広姿の琴美が入ってくるところだった。

疲れた表情で入ってきた琴美は、声をかけた女子社員に力無く首を振った後、ネクタイをちよつとゆるめるような仕草をしながら、冷房のコンソールをのぞき込んだ。

琴美は、本来女なのだから、オフィスの中で女子社員がどんな状態に置かれているか気がつきそうなものだ。それを、上着すら脱がないで、室温を下げようなんてどういうつもりだ。

あいつって、やっぱりそういう自分勝手な奴なんだ。拓也はそう思い、舌打ちした。

背広の上着を脱ぎたいのはやまやまだが、そうでき

ない事情が琴美にはあった。

午前中、電話でアポイントを取り、午後から新規客開拓に出るといのが、外務員資格を取得して以来の琴美の日課なのだが、半日歩き回ると、カッターシャツは汗でぐっしよりだ。その下に秘かに巻いたさらしは、まるで水に飛び込んだように濡れている。上着を脱げば、肌に張りついたカッターシャツを透かして、そのさらしが見えてしまうのだ。それで、前ボタンさ

えしめた状態で、背広を着ているしかないのだった。

毎日が我慢大会のようなこの暑さは、やりきれなかった。おまけに最近では、さらしで押しつぶされた乳房のまわりにあせもさえできている。そのむず痒さにも耐えているのである。できれば、今すぐにでも、すべてを脱いで裸になりたいくらいだ。

そしてじつは、そんな肉体的な不快感以上に、琴美の気持ちを落ち込ませているのは、その「営業成績」

だった。営業に出るようになって二ヶ月。琴美はまだ一件も契約を取りつけていない。今年、営業関係に配属された新入社員中、商品ファンドすら売っていないのは、もう琴美だけになっていた。

まだ二ヶ月だから、中村課長などもあれこれ言ったりはしないが、社内にいると無言の圧力を感じる。ことに、外務員試験の成績がダントツだったらしいという評判が立ち、期待されていただけに、毎日がまるで

針のむしろの上にいるようだ。今は大目に見られていても、この状態があと二ヶ月も続けば、その無言の圧力は「もう辞めたら」という視線に変わるはずだ。

そして、いちばんの問題は、どうしてこうなのか、自分でもさっぱりわからないことだった。

自分のデスクに着き、そこで大きなため息をついてから、琴美は、そんな自分を誰かが見ているような気がして、目を上げた。

二課の人間は、誰も気にとめていないようにそれぞれの仕事をしている。

と、一課のデスクで、拓也がこちらを向いていた。一瞬目が合い、双方ともがあわてて視線をはずした。

ちっ：：なんであいつまでが、私のことをあんな目で見るんだ。こつちが売れないことが、そんなに面白いのか。

琴美には、拓也の視線は、そんなふうにししか感じら

れなかった。

いまましい思いでデスクの引き出しから日報用紙を出し、書き始めると、今度は背後から声が出た。

「よおっ、どおよ？」

振り向くと、そこに、志村が立っていた。

「……なんだよ？」

そう返事してから、琴美は、その語調がちよつととがった感じになったのを、自分ながら気にした。これ

では、こちらの劣等感が丸出しではないか。

「うん。また、新規の売買契約とつちやったんだ。ちよつとむずかしそうな客なんで、柳田さんにアドバイスしてもらおうと思つてさ」

志村は、琴美の口調などまるで気にしていないように、にやにや笑いながらそう言った。

つまり、志村はまた、本来の自分の仕事である商品ファンドではない通常の契約を取り付けたということ

だろう。

リスクが少なく先物未経験の一般客にも抵抗がないことから、今、業界各社とも商品ファンドに力を入れている。平安トレードでも、営業部の中に商品ファンド推進課を特別に設け、独自の取り組みをしている。

また、新入社員も——琴美のように通常の営業課に属していても——、まず売りやすい商品ファンドから売って得意客をつくれと指導される。

とはいえ、中堅商取である平安トレードには、自社でファンドを組む企業力などない。大手の商取と商社が提携して作っているファンドを、代理店として扱っているだけだ。ファンドは小口が多いし、当然、通常の売買契約より会社の利益は少ない。通常の契約が取れるなら、それに越したことはないのである。

そして志村は、商品ファンド課に配属されながら――さらに、外務員試験はぎりぎりを通ったらしいにも

かかわらず——、そのファンドはもとより、すでに数件の通常契約を取り付けていた。新入社員の中でも群を抜いた営業成績を上げているというわけだ。

「お前、まだ苦勞してるみたいだな」

にやにや笑いながらそんなことを言う志村に、琴美はいよいよ苛立ったが、言い返すこともできず、しかたなく愛想笑いのような顔で「ああ」とうなずいた。

「お前さ、真面目すぎるんだよ。そんな深刻な顔して

たら、客だって不安になって構えるだろ。もっと気軽に考えた方がいいんじゃないの」

志村はそう言うと、琴美のそばを離れ、一課の方へ歩いていった。

くそっ、やっぱり嫌味なやつだ。

志村は同期のよしみで本気で心配してくれたのかも
しれないのに、琴美はそう感じながら、その後ろ姿を
目で追った。

と、一課のデスクまで行った志村は、拓也の脇に立ち、なにかしきりに話しかけだした。

なんだ、柳田さんにアドバイスしてもらいにきたとか言っつて、けつきよく目的はそれかよ。

そうは思ったが、よその課にずかずかと入り込み、しかも相手があきらかに迷惑そうにしているのに平然と話し続けられる志村の性格に、営業マンとしてのねたみを感じたのもたしかだった。

と、その時、琴美のデスクの電話が鳴った。見ると「内線」のランプが点滅している。

「はい、営業二課です」

「大沢君？　仕事終わった後、時間とれない？」

どこか沈んだその声は、ゆかりだった。

途中でスーパーに寄り、今日つくる予定のパスタの材料を買い込んだ拓也と実香の二人は、それでも七時

前には実香のアパートについていた。

部屋に入ると、あたかもそれが当然のように、拓也はキッチンに立ち料理にかかった。

その間、実香の方は、平然とバスルームに入り、シャワーを浴びたりしている。

最近、実香がたびたび拓也を自分の部屋に誘うのは、これが目的なのだ。

外食ばかりだと栄養がかたより、金銭的にも苦しい。

かといって、自炊しても、ひとり暮らしでは食材が余ったりしてなにかと不経済だ。それなら、二人でいっしよに作って食べようというわけだ。しかし、「いっしよに作った」のは最初の数回だけで、拓也の方がずっと料理がうまいのを知った最近では、実香は——材料費を出すだけで——すっかり拓也におまかせなのである。

「……うわ、いい匂い。もうできたの？ うまい、早

い、安い。まるでヨシギユウね」

着替えてバスルームを出てきた実香が言った。

その言葉に苦笑しながら、ボンゴレとシーザーサラダの皿をテーブルに並べようと振り向いた拓也は、そこで実香を見てポカンとした。

「え？　：：なに、それ？」

実香が、ゆかたを着ていたからだ。

「ふふ、けっこう似合うでしょ。この前の休み、実家

に帰ったときに、新しいの仕立ててくれたの。東京で着る機会なんてないって言ったんだけど、せっかくだから持ってけって」

じつは実香の実家は、岐阜市の目抜き通りに店を出す老舗の呉服屋なのだ。高校時代からのつき合いでそれを知っている拓也は、実香をまじまじと見つめながらうなずいた。

「ふうん……」

そんなことに詳しくないからよくわからないが、その、コバルトブルーの地にオレンジ色の花をあしらった同じ色の帯を合わせた和装は、ゆかたといってもモダンなデザインで、生地も仕立てもそうとう高級そうだ。こんな1DKのアパートで部屋着に使うのは、なんだかもつたいない気がする。

「あれえ？　なんか羨ましそうな顔してる。もしかして、着てみたいんでしょ、琴美も」

こんなふうにからかうような時、実香は拓也のことを、かならず「琴美」と呼んでくる。最近ではそれが普通になって、ふだんでもそう呼ぶことが多い。拓也の側も、そのこと自体にはさほど抵抗がなくなってしまう。

「そんなこと……」

今度は自分の皿をシンクから移しながら言った拓也の否定は、あいまいなものになった。

「……あ、そうか。琴美って当然、着物なんて着たことないんだよね。これ食べたら、着てみる？ 私が着つけてあげるから」

戸棚から二人分のフォークとスプーンを出しながら、実香が言い、そして、こうつけ加えた。

「もし似合ったら、帯とかもいっしょに、琴美にあげてもいいよ」

「えっ？」

小さなダイニングテーブルに向かい合って腰掛けながら、驚いて拓也が顔を上げると、実香はまたからかうように笑った。

「いつも、夕ご飯作ってくれるお礼に。どうせ、私のところ、家に帰れば売るほどあるんだしさ」

拓也は、その冗談に、肩をすくめるように笑い返した。

その笑顔は、この柄だったら実香より自分の方が似

合うなど、秘かに思ったせいもあつた。

「えっ、中村課長が転勤!？」

いつものバーで、ゆかりと並んで飲みながら、琴美は思わず大きな声を出した。

「……しっ！」

その声にまわりを気にし、人差し指を唇に当ててから、ゆかりはつぶけた。

「今度の異動で広島営業所へね。あれから三カ月もたつて、上が出した結論は、けつきよくそんなことだったのよ」

ゆかりは、亜莉沙に対するセクハラのことを言っているのだろう。本来、人事異動の内容は、今月末の発表までには部外秘のはずだ。それを、わざわざ琴美に言うのだから、中村の異動は、ペナルティとしての左遷を意味しているということだ。

「私が磯村さんのことを問題にしたのは、なにも、中村課長に仕返ししたかったわけじゃないのよ」

ゆかりは、まるで独り言のように言いながら、水割りを口にした。それは、相談したいというより、ただ、誰かに思いを聞いてほしいという感じだった。

「私が言いたかったのは、そういうことが起こる会社の体質とシステムを変えなければいけないってことなのに、課長ったら、『中村君には、転勤前に営業部長

からひとこと言い含めるそうだから、君もこれ以上、事を荒立てないように』なんて……。それじゃあ、やっつてることが、まるで逆じゃない」

おそらくゆかりは、亜莉沙の退職のあと、それをほうっておくことができず、人事課の中で経緯を報告し、セクハラ防止策を提起したのだらう。ところが会社は、臭いものにはふたをして情報を閉ざしてしまいう方向に動いた。

ゆかりには、それがやりきれないにちがいない。

女である琴美には、その気持ちはよくわかった。しかし一方で、自分の中に、以前ほどそれに共鳴しきれない冷めた部分も感じていた。目下のところ、琴美にとっての最大の問題はそんなことではないのだ。

早く帰って、担当エリアの高額所得者リストをもう一度洗い直してみよう。

琴美がカウンターを見つめて、そんなことを考えて

いると、ゆかりはグラスの水割りを一気にあおり、吐き捨てるように言った。

「私は会社のためを思ってるのに、あいつら、女は好き嫌いや個人的な感情でしかものを言わないって、きつとそう思ってるのよ」

「お前はいつも、好き嫌いでものを言わないって、お父さんたら、怒るのよ。お見合いなんだから、好き

嫌いでももの言うしかないじゃない。ねえ」

帯を締めてくれながら、実香が言った。

「だけどさ、夏場のお見合いだし、格式張らないようにとかいろいろ考えて、せっかくこんなに高いゆかたまで仕立てたのに、『あんな人、きらーい』のひとことでかたづけられちゃ、怒りたくなる親の気持ちもわかるけどね」

そう答えながら、拓也は、姿見の自分自身のゆかた

姿を見つめた。そのゆかたは、思った通り拓也によく似合った。拓也の方が背が高いぶん、実香よりすらりとして粹に見える。それなのに、かわいらしさもあるのだ。

「それにしても、相手、三十三だよ。あんまりうるさいから、一回くらいはいいかと思って、お見合いしに帰ったのに、十歳も上のおじさんはないんじゃない」

「でも、あの大ホテルの御曹司なんですよ。玉の輿じ

やない」

実香は先刻、お見合い相手の家として、長良川沿いにある全国的にも有名な観光ホテルの名をあげていた。

「親同士が市の商工会の幹部だなんて、それだけでもぞっとするわよ。きつと、市長とか市会議員とかいっぱい集めて、ごてごてした式挙げるのよ。呉服屋だし、そんな式だと、ドレスはダメって言い出すに決まっ

るし。やっぱり、式はウエディングドレスでしょ」

「そんなの、あたし：：僕には、わかんないよ」

「あ、ずるーい。そういうときだけ、男の子に戻るんだから」

実香はそう言って、帯の結び目をポンとたたいた。

どうやら、できあがったようだ。

実香といっしょに鏡の中の姿をあらためて見ながら、拓也は、やっぱり、実香とはへんな関係だなと思

った。実香が、こんなふうに変わった子だとは、高校時代は想像もしなかった。

「ねえねえ、髪の毛、アップにした方がいいよ。やっ
たげるから、ここ座って」

「うん。そうね」

そう答えて、裾に気をつかいながら鏡の前に正座し、
拓也は、やはり、変わっているのは自分の方なのだと思
い直した。こんな会話を平気で交わしていられるの

は、拓也の感情がすっかり女の子になりきっているからだろう。実香は、「同性」として、それに素直に反応しているだけかも知れない。

「けどさ、この歳になると、結婚とかって、どっかで考えるよね。私なんて、会社勤め二年半やって、もう全部見えちゃった感じだし」

拓也の髪をブラッシングしながら、実香はちよつとしみじみした口調で言った。

「琴美は、仕事面白い？」

つづけて実香がきいてきたので、拓也はちよつと考えてから「うん、まあ」と答えた。

「そうか。琴美には、柳田さんがいるもんね」

実香は、またからかうような調子に戻り、そう言った。実香には、たいていのかことは隠さずに話していたから、柳田のことも知っているのだ。

「いや、だからそれは……」

「仕事上の好意だって、言いたいわけでしょ」

「うん、そうだよ。それ以外になにがあるっていうの？」

「じゃ、なんで、デートの誘いにのったりするわけ？」

「それは……。仕事うまくやってくためには、冷たくもできないじゃない」

「ほんとに、それだけ？」

「そりやそうよ。だって、あたし……。僕は、男なんだ

し」

「ふーん。いいよね。そういうことも含めて、すごくドキドキする毎日があつて。楽しそう」

拓也の髪にゴムをかけ、それを「おだんご」にまとめながら、実香は、今度はからかいとマジがない交ぜになつた、ちよつと皮肉な口調で言つた。

「それって、非難してるわけ？」

「ふふ……、おもしろがつてるに決まってるじゃない。

恋愛とかも、まだ責任持たずに楽しんじやっていい歳だと思ふしさ。ゲイとかいうことだって、気持ちとしてはわかる気がするし」

「ゲイだなんて……」

「でも、客観的にはそういうことでしょ」

「……」

どう反論しても、自分の気持ちに正確には伝わらない気がして、拓也は口をとがらせた。

「だけどさ、なにより根本的などで柳田さんをだましてるわけだし、このままいけばすぐに、私のお見合い攻撃以上に追い込まれた立場になるんじゃないのかな、拓也は」

実香は、あえて「琴美」でなく「拓也」とつけ加えたようだ。それで、拓也は黙ったまま、しかし、うなづくように首をうなだれた。

と、まとめた髪にかんざしを挿していた実香が「で

きたよ。立ってみて」と言った。

拓也がふたたび立ち上がり、姿見に向かうと、その後ろに立った実香は、ちよつとあきれたように首を振った。

「めっちゃ色っぽいなじ。こんなの見たら、柳田さんだって、今度こそがまんできずに襲いかかるだろうな」
その言葉に、意に反して顔を赤らめてしまった拓也を笑って見ていた実香は、さらにこうつけ加えた。

「琴美さんだって、抱きしめたいとか思うんじゃない」

「……え？」

実香が「琴美さん」と「さん」づけして言うのは、
正真正銘の琴美のことだ。実香はいつも、そう呼び分
けている。

「前にも言ったように、二人ができちやえば、話は簡
単なのに」

「そんな。やめてよ、あんなやつのこと」

拓也が振り向いて言うと、実香はまた、マジとからかいの混じった表情で言った。

「ふうん、まだケンカしてるんだ。だけど、琴美さんのこととなると、どうしてもそんなにムキになるのかな？」

……やっぱり、着替えてくればよかったな。

夜の車窓に映る、自分のゆかた姿を見ながら、拓也

はそう思っていた。

電車内の人の目を気にしてドアの前に立ち、ずっと外を見るふりをしているのだが、それでも、背中に視線を感じる。実香におだてられるまま、ゆかたなんかで帰ってきたのがまちがいった。会社帰りのサラリーマンやOLがほとんどの車内で、この格好は目立ちすぎた。素足に赤い鼻緒の塗り下駄も、ちよつと場違いだ。

それで、電車が駅に着くと、拓也は逃げるようにホームに降り立ち、そのまま小走りに階段に向かった。しかし、裾のさばきやホームに響く下駄の音が気になって、思ったほど早く歩を進められない。そのせいで、すぐに同じ電車から降りてきた人たちに追いつかれる格好になってしまった。

おまけに、やっと階段のところまでたどり着いて、そこをのぼろうとしたときには、下駄の歯を引っかけ、

バランスを崩した。

ちよつとよろけた拓也は、隣で階段をのぼりかけていた男に体をぶつけてしまった。

「あ、すみません」

そう言って、その男に顔を向け、そこで――

(……あっ！)

拓也は固まった。

やはりこちらを驚いたように見ている背広姿の「男」

は、琴美だった。

琴美はポカンとした表情のまま、ちよつとの間見つめてきたが、目の前のゆかた姿の女性の正体に気づいたのだらう。倒れかかった拓也の体を支えるように添えていた手を、あわてて離れた。

しかし、なぜか視線だけははずせないようで、いまだ驚きの表情を向けている。

こんな姿をいちばん見られたくない人間に見られた

ことで、拓也の方はあせって目を泳がせた後、その視線に間が持てず、かすかに会釈するような仕草をしていた。

「……や、やあ」

琴美も、どこか間の抜けた返事を返した。

赤いかんざしが、目の前で震えている。

背後から抱きしめ、うなじに寄せた唇をかすかにう

ぶ毛が光る首筋に這わせると、女の口から吐息が漏れた。

ゆかたからのぞく細い肩を噛むようにしたあと、アップの髪から幾筋か降りたほつれ毛に導かれ、ふたたびその白い肌の上に唇を這わせて、今度はかわいい耳たぶをもてあそぶ。

同時に、喉もとにまわしていた手を、ゆかたの襟に沿って静かに降ろしていく。

それに気づき、女はいやいやをするようにかすかに体を揺すった。

かまわず、さらに首をまわして、唇で女の赤い唇をとらえる。

手の方は、襟の合わせから、その中に滑り込ませていく。

女は、さらに体を震えさせた。

安心させるために、唇にやさしくふれ、襟の手をさ

らに奥へと入れる。

と、その手のひらに、少しだけ冷ややかな、でも、やわらかな弾力を返すかたまりが触れた。

ゆかたの下の乳房を握られたとたん、女は「ああーっ」とかすれた声を発し、今度は自分の側からすすんで唇を押しつけてきた。

それで、舌を入れ、強くキスしながら、その体を抱きとめるように倒していく。

乳房を包んだ手に力を込め、もみしだくと、女は、少し身もだえたあと、まるで腰が砕けたように体重全体をあずけてきた。そのせいで、ゆかたの襟が乱れ、白い乳房があらわになった。

たまらず、女を寝かせ、その上には：：：琴美は：：：覆いかぶさった。

バスが信号で停車したひょうしに座席からずり落ち

そうになり、琴美はやっと目を覚ました。

一瞬、はっとし、窓の外を見る。

：：あ、やばい。降りなきや。

琴美は、あわてて降車ボタンを押した。

バス停から幹線道路沿いに歩きながら、琴美はまだ
呆然としていた。

真昼の太陽に照らされたアスファルトから立ち昇る

熱気のせいで、道に映った自分自身の影さえもが陽炎のように揺れている。

そして、そこに、先刻の夢の残映が浮かんでは消える。

まったく、私ったら……なんて夢、見てるんだ。

あのかんざし、ゆかた、そして、うなじ……、夢の女は、まちがいなく昨夜の拓也だろう。

昨夜、偶然駅で会い、無理に離れて歩くのも不自然

な気がして、お互い無言のまま、並んで帰った。

その間、琴美は、拓也の横顔やゆかたからのぞく首筋を、つい、ちらちら見ていた。意識的には無視しようとしているのに、視線が自然にそちらに向いてしまったのだ。

その上、じつは、部屋に帰った後も、その姿が目の前にちらついたりした。

あの拓也に対して、そんなふうに感じている自分に

腹は立つが、しかし、まあ、そこまではよしとしよう。

たしかに、拓也のゆかた姿は、印象的だったのだ。

たとえその正体を知っていても、また、たとえ反目し合っている仲だとしても、そして、たとえ自分が女であつても、あれだけかわいらしく、しかも色っぽい姿を見せつけられれば、残像が脳裏に焼きついて離れないということだつてあるだろう。

でも、さっきの夢はなんなんだ。

ゆかた姿の拓也を、抱きしめ、唇を奪い、組み敷いていた自分。なんと、襟元に手を入れ、その乳房をのみしだくまでしていたのだ。夢だというのに、手のひらには、冷ややかで弾力あるその感触さえ残っている。

拓也の胸に乳房があるのも、もちろんおかしなことだが、それ以上に、その乳房をつかみ、表情をうかがいながら反応に興奮していた自分自身も、さらに異常だ。たとえ夢の中の出来事だとしても……。

今の自分は、精神的に、かなりおかしくなっているにちがいない。

琴美は、そう考えて、自分を納得させようとした。

きつと、このばかばかしいほどの残暑のせいだ。それに、仕事の面で追いつめられているストレスのせいだ。さらに言えば、この半年間、無理をして男として生活をしてきた、副作用みたいなものかも知れない。

ただ、そう考えても納得できないものが、自分の中

に残った。

さっきの夢を、琴美は、けっして嫌なことだとか、
気味悪いことだとか感じていないのだ。いや、むしろ、
窮状に追い込まれている今の自分を、どこかで奮い立
たせるような感じが、あの夢にはあった。切なそうに
身もだえ、体をあずけてきた拓也に対して感じたいと
おしさが、ぼろぼろの自分に、力を注ぎ込んでいるよ
うな気さえした。

えっ……あの子が、いとおいしい？ ……冗談じゃない。

琴美は、自分の中に芽生えたそんな感覚をあわてて否定した。

そこで、道路から目を上げると、派手な装飾が施された駐車場の入口があった。その駐車場の向こうには、大きなパチンコ店が建っている。

琴美は、あれこれの思いを振り切るように、そのガ

ラス張りの店へと向かった。

「また来たのか。あんたも懲りんな」

表の店から聞こえる派手な音楽やあおり立てる店内放送に負けないほどエネルギーギツシユな声で、木村剛造は言った。

事務所の壁には、店内各所のモニターや、他の店もふくめた今現在の売り上げと出玉率を表示するディスプレイ

プレイがはめ込まれている。

このパチンコチェーンの社長である木村が、琴美の今日の営業相手だった。けっして、仕事をさぼってパチンコをしにきたわけではない。

「今日は、こちらの店にいらっしやるとうかがったもんですから」

「この前も言ったろう。何度来ても無駄だぞ。俺は、二十年前に相場からは足を洗ったんだから」

ここへ来るのは、今日で四度目だった。

最初に訪れた時、他の営業先のようにすぐ追い返したりせず、「あんた新人か？」と木村は聞いてきた。

それをきっかけに、それなりに会話になったので、脈があると思いつているのだが、最近の二回は「忙し
いから」と相手をしてもらえなかった。

「いえ、市場のことをよくご存じの社長だからこそ、お時間をいただいで、私自身も勉強させていただけきた

いと……」

「そんなら、あんたにとっても時間の無駄だ。俺の勘なんて、大昔のもんだ。今の相場は、あの頃ほど単純じゃないからな。それに、こんな商売してるが、店をチェーンにしたときから、俺はもう博打には手を出さんと決めたんだ」

「いえ、商品取引はけっしてギャンブルでは……」

「やめろよ、俺の前で、そんなマニユアルどおりのト

ークは。現物の当業者筋以外の人間にとっちゃ、相場なんて、博打以外のなににもんでもないだろ。みんな、自分だけがラクしていい目を見ようと、やってんだから」

「はあ、まあ、そう言ってしまえば身もふたもありません：：」

「ところが、人間、自分のことだけ考えてるうちは、けっきょくは成功なんてできんのよ。たまたまにラッキー

なことはあつたとしても、そんなあぶく銭はすぐすつちまう。俺だって、この仕事がなんとかうまくいきだしたのには、家族や従業員のことを本気で考えだしてか
らだからな。で、そうになると、おいそれと博打なんて
できなくなる」

「いえ、とはいえ、資産にゆとりがあるなら、そのお
金をただ遊ばせておくのはもったいないということだ
つて……」

「ああ、それはそうかもしれない。ただ、俺は今、その気にはなれん。多少の金が余ってるとしても、その金は、家族や従業員の将来の保障だ。それに手を着けるとなれば、昔以上の覚悟がいる。たとえ、博打をするとしても、遊び半分じゃだめなんだ。本気にならんな。今の俺には、そんなエネルギーもゆとりもない。男はけつきよく、大事な人間のためを思ったとき、初めて真剣になれるんだ。たとえばだな……」

木村は、そこで言葉をとめ、なぜかにやりと笑って、デスクの前に立った琴美を見上げた。

「あんた、今、ここへ来る道で、好きな女のこと、考えてただろ」

「……えっ？」

琴美は思わず声を上げていた。いきなりそんなことを言われて驚いたのと、ある意味で凶星にされたせいだ。琴美が考えていた拓也は、「女」ではないし、も

ちろん「好き」でもないが。

「ふふ、やっぱりな。入ってきたときに、これまでの坊ちゃん坊ちゃんした顔とは違う、男の顔をしてたからな」

「いえ、そんな……」

琴美はあわてて否定したが、木村はそれを無視してつづけた。

「あんたも、早く一人前になりたかったら、まず、そ

の女のことを真剣に考えることだ。その女をどうやったら幸せにしてやれるかってな。営業のノウハウを覚えるより、そっちの方が先なんじゃないか」

いったん、木村の言ったことの意味を考えそうになつて、琴美は、あわててその思考を振り払った。多くの修羅場をくぐってきたらしい手練手管の木村が、琴美をからかって、煙に巻こうとしているのだらう。

「ええ、人生勉強はまだまだ足りないと思ってます。

ですから、これからも、社長にいろいろ教えていただけたらと。でも、博打をしたくないとおっしゃるなら、今はいちばん手頃な時期なんじゃないですか。こここのところ、相場はずっと順さやで安定してますし」

そんな琴美の言葉に対し、木村は、今度はあきれたように首を振った。

「だからあんたは、まだまだ半人前だって言ってるんだ。新聞をすみからすみまで真剣に読んでみるよ。今

ほど危ない時はないぞ。こういうのを波乱含みの相場
って言うんだ」

そう言うと木村は、デスクの上に市況面を表にして
置いてあつた新聞をつかみ、投げてよこした。

「来週中には、あんたの会社も大騒ぎになるぞ。ま、
会社にとつちやあ、もうけ時ってことだがな」

けつきよく煙に巻かれたようなかたちで木村の会社
を退散した琴美は、帰りのバスと電車の中で、持って

いた経済紙を熱心に読み直してみたが、木村が言いたいことはよくわからなかった。

九月末のその日の朝、拓也が出社すると、営業フロアは、これまで見たこともないような騒然とした雰囲気

に包まれていた。

デスクの上で、ひっきりなしに電話が鳴っていた。

いつもは定時ぎりぎりに来るような営業マンももう

出社していて、一課二課の全営業マンが、忙しく電話に
対応している。そして、電話を切ると、担当の女子社員に
矢継ぎ早に指示を出す。その指示の声はもちろ
ん、顧客と話しているはずの電話の声さえもが怒号に
近い。

「おい、琴美、なにしてる。早く手伝え」

入口のところに呆然と立っている拓也を見つけ、柳田が怒鳴った。

柳田から初めて呼び捨てにされたことで、一瞬面食らったが、とりあえず、たぶんそれどころではない状況なのだということだけはわかり、席に着いた。と、電話に出ていた柳田が、次々に乱暴に書き殴ったメモを渡してきた。とにかく、わけもわからないまま、その指示に従って売買注文をコンピュータに入力していくしかなかった。

前場の市場が開くと、その状況はさらにヒステリック

クなものとなった。どうなっているかを聞くゆとりさえなくコンピューターのキーをたたきつづけながら、営業マンたちが顧客と話しているのを聞くことで、前場が終わる頃になって、拓也にも、やっとおおよそのことが把握できた。

要するに、昨日市場が引けた後、今朝までに、世界中でさまざまなことが同時に起こったということらしかった。

ニューヨークの株が急落したらしい。それに反して、アメリカ農務省は、秋の穀物の作柄予想を大豊作と発表した。しかし、世界気象機関は、ペルー沖のエルリ―ニョ現象の発生を確認し、世界的な異常気象を警告した。また、金の産地である南アフリカでは大規模なストライキが提起された。他にも、中国内モンゴル自治区で反政府勢力と警官隊との小競り合いがあつたし、エルサレムではまた、イスラエル軍とPLO系ゲ

リラとの戦闘があつた。ヨーロッパでも、EU統合に批判的な左翼と極右が大連合を組むかも知れないというニュースが流れていたし、さらに、この機に乗じて、欧米の大手ヘッジファンドが、やっと安定してきた東南アジアの通貨にふたたびアタックをかけるのではないかという噂までとんでいた。

とにかく、さまざまに解釈できる材料が一挙に出てきたということだ。そのせいで、世界的な規模で先物

市場が混乱していた。国内の各取引所でも、すべての銘柄が乱高下しているらしい。それに呼応して、激しい勢いで売買注文が出されているということだ。

昼休み、つまり前場が引け後場が寄りつくまでの間だけは、オフィスもやっと幾分か静かになった。電話は相変わらず鳴っていたが、それでも、全員が一息ついた雰囲気になった。

「おい、誰か、まとめて弁当買ってきてくれないか」

山木課長がそう言った。

今は落ち着いているというものの、みんな、社外に
昼食をとりに行っている余裕はないということだろ
う。

と、柳田が「そうですね」と答えたあと、「琴美ち
ゃん、悪いけど、みんなの注文とって行ってきてくれ。

二課の分も頼むよ」と言った。

「あ、はい。わかりました」

それで、拓也がオフィスに備え付けてあるほかほか弁当のメニューを持って、一人ずつに注文を聞いてまわっている、また、柳田の声が聞こえた。

「おい、大沢、全員分だと、彼女ひとりじゃ持って来れないだろう。お前もいっしょに行ってくれ」

……え？

その言葉に、拓也は、ちよつと不可解な感じがした。

たしかに、お客さんのひとりもない琴美が、今日

いちばん手が空いていることはまちがいない。それにしても、なんで一課の主任の柳田さんが、琴美に、つまり二課の「大沢拓也」に命令しているんだらう？

それに、なんで柳田さんが「二課の分も頼むよ」などと言うのだらう？　そういえば、こんな日だって言うのに、中村課長の姿が見えない……。

とりあえず全員分の注文をまとめ、拓也は、琴美と

ともに部屋を出た。

この前の晩もそうだったけど、なんでこんなやつと
いっしょに歩かなきゃいけないんだろう……。。

そうは思ったが、今日はどうやら、そんなことを言
っていられる状況ではないようだ。

それでしかたなく、先夜同様、無言のまま廊下を並
んで歩いた。

しかし、琴美の方は、この前と少し様子がちがった。

なんだか呆然として、考え込んでいるような顔をしていた。

自分のお客さんがいなくても、人のを手伝ってるうちに、あの雰囲気にもまれたってことだろうか？

そう思いながら、エレベーターの前まで来たときだった。

エレベーターのドアが開き、そこからゆかりが降りてきた。

「あ、ちようどよかった」

顔を見るなり、ゆかりがそう言ったので、琴美に用があるのだと思い、拓也はすつと身を引こうとした。

ところがゆかりは、「あのさ、琴美ちゃん」と、拓也の方に声をかけてきた。

「あ、はい……？」

「こんな日に悪いけど、来週までに、みんなに予定聞いて、これまとめられるかな？」

そう言って、ホチキスどめした書類と、もう一枚、なにかの表組みの記入用紙を差し出した。

拓也が受け取りながら「何ですか？」と聞くと、ゆかりはこう説明した。

「毎年十月に入るとすぐに、健康診断があるの。各課順番に、契約してるクリニックに行って半日人間ドックを受けるんだけど、営業部はいつも、忙しいとかあれこれ言ってサボる人が多いのよ。それで、メンバー

の予約日を把握して、チェックしたいと思ってるの。
営業二課は、この三日間だから、みんなに行く日を決
めさせて、ここに書き込んでくれないかな」

「……は、はい、わかりました。だけど……」

「なに？」

「どうして、二課のを私がやるんですか？」

「え？ ……あ、そうか。今日、朝からこんなだから、

まだ、人事発令見てないのね」

拓也の不可解そうな顔に納得したようにうなずくと、ゆかりは、ちようどエレベーターの向かいの壁にある四階の社内掲示板を指さした。

「え：：？」

拓也だけでなく、琴美もそれに驚いたようで、二人そろってその掲示板に近寄り、見入った。

そこには、十月一日付の人事異動の内示が貼られていた。

その内容を見て、拓也は、さらに驚きの声をあげる
ことになった。

「えーっ!？」

全社的には大きな異動はないが、本社営業部と広島
支社を中心に人が動いていた。

二課の中村課長と、もう一人、やはり二課の営業マ
ンが広島に転勤。

そして、一課の柳田が二課の課長として昇格、さら

に「岡崎琴美」、つまり拓也と、商品ファンド推進課の志村が、二課に配転になっていた。

そうか、それで柳田さんは、二課のこととも気をつかって、僕にあんなふうに言ったんだ。中村課長はきつと、転勤の準備をしているか、先に広島にあいさつに行ったかのどちらかなのだらう。

驚きの中にも納得し、さらに拓也は、琴美や、それにあの志村と同じ課になることに憂鬱な気分も感じ

た。

「……ということなの。こんな荒れ相場の時に、それに、まだ異動前だっというのに頼んじやって悪いけど、お願いね。あ、それから、新入社員は、初めての健診なんだから、ぜったいに受けなきやだめよ。志村君とかにもよく言っといてね」

ゆかりは、そう言うと、オフィスの方に歩いていった。他の課にも頼みに行くのだろう。

今朝からの騒ぎ、それに、今見た異動内容に呆然と
したまま、拓也と琴美は、エレベーターに乗り込んだ。
そのせいで、エレベーターの中でも、二人とも、さ
つきまでとはまたちがう理由で無言のままだった。し
かし、一階に着く直前、二人とも同時にあることに気
づき、同じタイミングで同じことを言い、顔を見合わ
せた。

「……えーっ、健康診断!? ……どうしよう?」

それが、あのケンカの日以来、二人が初めてまとも
に口をきいた言葉だった。

第10話 一巡

「はい、次は左へ傾きまーす」

背後に倒れた検査台が、かすかなモーター音とともに、今度は三十度ほど左に回った。

とたん、また、先刻飲んだ発泡剤が、胃の中のバリウムを押し上げた。

その、みぞおちあたりが重く張った感じは不快だったが、琴美は、それとは別の心地悪さも感じていた。

体が傾くとともに、乳房が揺れ、上に着た医療用ガウンの生地とこすれ合っただのだ。

この間、昼間はさらしで固定していて、それに慣れてしまったせいだろう。こんなふうに乳房が頼りなく

揺れる感覚には、ひどく違和感がある。ましてや今は、検査台の上で上下左右に回されているのだから、なおさらだった。

平安トレード株式会社の定期健康診断は、本社からひと駅離れた場所にあるこの契約クリニックで、「半日人間ドック」という形で行われる。会社に医務施設はないし、営業会社が一度に全業務をストップするわけにもいかないから、課ごとに決められた期間中、各

人が都合のよい時に出かける方式だ。つまり、会社の人間がいつぺんに受けるわけではないのである。琴美も拓也も、それで救われた。

なにしろ健康診断となれば、二人とも、ふだんのように名前と姿を交換したままで受けるわけにはいかないだろう。当然、琴美は本来の「岡崎琴美」名で女として、拓也は「大沢拓也」名で男として受診しなければならなかった。

それで、二人で相談し——つまり、この健診のおかげで二人はまた会話を交わさざるを得なくなつたというわけだが——、同じ日に、本来の性にもどって受診することにしたのだ。好都合なことに、営業二課の受診予約の管理は拓也に託されていたから、今日の午前中に他のメンバーの予約を入れないようにし、そこに、「大沢拓也」と「岡崎琴美」の二人分をはめ込むことができた。

そんなわけで、今朝久しぶりに、琴美は女姿で、拓也は男姿で部屋を出て、いつしよにここまで来たというわけである。

「そこで大きく息を吸ってー。はい、とめてください」
スピーカーから聞こえる検査技師の指示どおりすると、またゲップが出そうになり、琴美はそれを必死でこらえた。そして、その気持ち悪さを忘れるために、別のことを考えようと、昨日初めて開かれた課会のこ

とを思い出した。

九月末から始まった乱高下での激しい売り買いが一巡し、相場がやっと落ち着いたのは、今月に入り、土日の取引所の休みを経過した後だった。

そのせいで、配転後の新体制での定例課会が延びていた。

昨日の夕方になり、やっと、営業第二課の全営業マ

ンと事務員が会議室に招集され、新たに課長に就任した柳田から今後の方針を聞いた。

その話によると、まだ現役営業マンとしてたくさんの顧客を抱えている柳田は、当面、営業をつづけながら管理業務をも兼任するということだった。つまり、プレイング・マネージャーというわけだ。

「しかし、上からは、できるだけ早く課長職に徹しろと言われている。今後、君たちの仕事ぶりを見ながら、

順次、適任者に俺の客を引き継いでいくことになる」
柳田の言葉を聞いて、琴美は、これはうまいやり方だと思った。

柳田は、まだ三十歳前。二課には、柳田より年長の社員もいる。そんな社員たちに言うことを聞かせるためには、こんなふうにインセンティブをちらつかせるのが最も効果的だろう。資産家の優良客が多い柳田の顧客を譲り受けられるとなれば、みんな張り切らざる

を得ない。もちろんそれは、琴美自身にも当てはまることだが。

さらにその席で、柳田は、今後の課内のチーム編成を発表した。

二課に限らず、通常、平安トレードの営業部隊は、四人で一チームを組む。営業マンが三人と、それをアシストする女子事務員が一人という組み合わせだ。琴美は——それに拓也も——、これまでは新入社員とい

うことで変則的な扱いだったが、今後はこの形のチームに属することになる。

柳田は、自分をも含む「Dチーム」の営業メンバーとして、大沢拓也——つまり琴美——と志村誠二を指名し、そしてアシスタントとして岡崎琴美——つまり拓也——を選んだ。柳田以外はすべて新入社員というチーム編成は、新課長として、自ら新人を育てようというつもりなのだろう。

これは、琴美にとってけっしてうれしいことではなかつた。柳田の指導を直接受けられるというのは望んでもないことなのだが、問題はあと二人のメンバーだ。この間、また言葉を交わすようになったとはいえ、拓也との関係は依然ぎくしゃくしていたし、それに何より、あの志村とともに働くのが気が重い。なにしろ、志村は新入社員中ダントツの契約を取っている。それにくらべ、自分はいまだに売上ゼロなのである。

：：なんで、こんな露骨な組み合わせ方をするんだ。
琴美は、柳田に対して、ちよつと恨みがましい感想
さえ持った。

ところが、課会の後、それぞれに分かれて持たれた
チーム会議で、柳田は思わぬことを言った。

志村の顧客リストを見ながら、その現状分析をして
いるとき、ちよつと志村に客から電話が入り、中座し
た。

と、電話で調子よく話す志村を見ながら、柳田がその場にいる琴美と拓也にだけ聞こえる声でつぶやいた。

「大沢、俺は、お前については何の心配もしてない。

今は数字が出てないが、お前のやり方を貫いていけば、そのうち客は自然につくはずだ。むしろ、心配なのはあいつの方だ」

志村とくらべられ、こき下ろされるとばかり思っ

いた琴美は、その意外な言葉に柳田の顔を見やっただ。

「このリスト、見てみるよ。客はみんな、七十過ぎのじいさんばあさんばかりだ。おかしな営業してなきやいいが……」

ドアにつけられた番号プレートの順番どおりに検査室をまわり、琴美が最後の内科検診までたどり着いたとき、ちようど診察室から出てきた拓也と出合った。

「もう終わった？」

「うん」

「じゃあ、さつき言ったところで待ってて」

「うん」

どこか心もとなげにうなずくと、拓也は廊下を突き当たりまで歩いて行って、そこにある「男子更衣室」のドアノブに手をかけた。

琴美が見ていると、拓也はそこで、ちよつとためら

うような素振りを見せた。

もちろん、今日は化粧はしていないし、マニキュアなどもとっている。それでも、ポニーテールにしたブラウンの長髪と、医療用ガウンの後ろ姿は、とても男には見えない。「男子更衣室」に入るのをためらう気持ちはよくわかった。

できるかぎり急いで着替え、拓也はその男子更衣室

をそそくさと出た。

会社の女子更衣室で着替えるときはもう何も感じないのに、ここでは奇妙な緊張感があつた。本来自分は男で、着替えた服も男物の背広なのだから何の不思議もないはずなのに、着替え中、まわりの男たちの視線がやたら気になったのだ。

それはなにも、拓也が意識過剰になっているせいばかりではない。

今日ここへ来てから、ずっとそうなのだ。

自社の人間はいないものの、企業健診専門のクリニックだから、よその会社の社員たちもたくさん受診している。検査室をまわる間、いつしよになったそんな人たち、それに検査技師や医師たちまでもが、みんな不思議な生き物でも見るようにこちらを見てきた。検査票の名前を確かめてから、あらためて全身に目を走らせた技師もいるし、最後の内診を担当した老医師な

ど、カルテを見ながら露骨にこんなことまで言ったのだ。

「ああ、ふつうの会社にお勤めなんだ。私はまた、その手のご商売の方かと思いましたよ」

そしてそれは、クリニックを出たあとも同じだった。

今朝来るときに琴美と打ち合わせた待ち合わせ場所まで来た拓也は、やはり人の視線が気になって、電柱の影に身をひそめるようにして立った。

人通りの少ない裏路地なのだが、それでも時たま通る買い物帰りの主婦などが、みんなうかがい見るような視線を向けていくのだ。

今の時代、こんなふうにはロン毛をゴムどめしている背広姿の男も珍しくはないだろう。しかし、やはり拓也の場合は、まともには見えないのだ。もしかすると、表情や仕草についてしまった女としてのクセが、服装にそぐわない雰囲気醸し出しているのかもしれない。

った。

こんな落ち着かない服なんて早く脱いで、着替えたいな。

拓也は——本来なら筋の通らない——そんな思いを抱いた。

いずれにしてもこんな格好で、クリニツクのそばに長くいるのはまずかった。

拓也自身がつくった予定表によれば、今日は、午後

から柳田の健診が入っているはずだ。午後の受付開始にはまだ間があるが、早めに来ることだって考えられる。こんな姿を柳田に目撃されたら、それこそとんでもないことになる。

自分と琴美の秘密がばれるというだけではない。昨夜、柳田からうち明けられた思いを、最悪の形で否定することにもなるのだ。

昨夜、課会とチーム会が終わった後、柳田は拓也を食事に誘ってきた。

翌朝の健診のため半日間の絶食が言い渡されていたし、マニキュアを落とすなど準備も必要だったから、拓也はそのまま帰るつもりでいたのだが、柳田に「どうしても話しておきたいことがあるんだ」と言われ、「飲み物だけなら」と返事した。

会社近くの喫茶店に入り、ジュースを飲んでいる間、

柳田は、仕事にも自分の心情にもあえて触れないという感じの軽い会話を つづけた。

通勤用のワンピース姿の拓也も、いつもどおり、若い女性らしい表情と仕草でそれにこたえていた。

しかし一方で、「どうしても話しておきたいこと」という柳田の言葉が気になっていた。それで、さじを向ける意味もあり、急に思いだしたように言った。

「……あ、そういえば、あたし、まだ課長昇進のお祝

いを言っ
てませ
んよね」

と、柳田はちよつと照れくさそうな顔をした。

「柳田課長、昇進、おめでとうございます」

「やめてくれよ、プライベートの時まで、課長なんて」

柳田はそう言っ
てさら
に照れ、
そして、
こうつけ
加
えた。

「それに、俺にとつちや、必ずしもおめでた
いって話
でもない
んだから
さ」

「……？」

拓也が首を傾げると、柳田はちよつと言いにくそうな顔で目をそらしながらつぶやいた。

「月収は、半減するわけだしな」

その意味がすぐにはわからず、ちよつと考えてから、拓也はやつとうなずいた。

トップセールスである柳田は、固定給以外にかなりの歩合給を取っていた。しかし、管理職になれば、そ

の歩合部分がなくなるわけだ。ベースアップはするの
だろうし、管理職手当もつくのだろうが、それでもそ
の減った分には追いつかないということだ。ふつうの
会社の「昇進」とは意味がちがうのである。

「だから俺、上から昇進の話があったとき、ずいぶん
迷ったんだ」

やはり、今の会話をきっかけにするように、柳田が
テーブルに身を乗り出しまじめな表情で話し始めたの

で、拓也にも、話が核心部分に入ったのがわかった。

「だけど、そろそろ、切った張ったの世界じゃなく、安定した生活ってやつをしなきゃいけないって気がしてさ。出世とか、これからのことを考えて、堅実な生き方をしようなんて思ったんだ。それで、ひとつだけ条件をつけて課長を引き受けることにした」

「ひとつだけ？」

拓也がきくと、柳田はあらためて拓也の顔を見て言

葉を継いだ。

「君もいっしょに異動させてほしいって言ったんだ。

琴美は、俺にとって、もう欠かすことのできないアシスタントだからってな」

入社半年で、しかも通常は異動の少ない事務員である自分が——亜莉沙の退職という事情があつたにせよ——、どうして課を替わることになったのか不思議に思っていたのだが、それが柳田の意向だったときいて、

拓也はやつと納得できた。そして、柳田が自分のことをそこまで信頼していてくれたことがうれしくもあった。

しかし同時に、今柳田が言った「アシスタント」という言葉に、仕事上のことだけではないもっと深い意味をも感じていた。「琴美ちゃん」でなく、「琴美」と呼び捨てにしたことでも、それは感じ取れた。

と、案の定、柳田はこうつけ加えたのだ。

「琴美は、俺にそんなふうに思わせた理由でもあるわけだしな」

昨夜のあれは、明らかに婉曲なプロポーズだったのだろう。柳田の言った「安定した生活」とか「堅実な生き方」とかいう言葉の先には、「結婚」ということが意識されているはずだ。

拓也は———というか、柳田にとっての「岡崎琴美」

は——まだ二十二歳だから、すぐに結婚を迫っているのではないにしても、「俺を信頼してついてこい」という意味にちがいない。そして、それは当然、「信頼して身を任せろ」ということでもあった。

もはや、抜き差しならないところまで来ていることはたしかだった。

柳田はそのために、当面の高収入をなげうってさえいるのだ。

これから、僕はいつたいどうしたらいいんだろう：
：

柳田がそこまで思っていてくれることは、ちよつとくすぐったく、どこかうれしいような気もしたが、もちろん、拓也に柳田の望むようなことはできない。それに、一方でそれとはべつに、柳田の言葉にどこか違和感のようなものも感じていた。

そんなことを考えて、少しの間、思い悩んでいると

声をかけられた。

「ごめん、待った？」

拓也が目を上げると、そこに、女装した——ではなく、本来の服装をした——琴美が立っていた。

「ううん、そんなに」

拓也はいちおうそう答えてから、つけ加えた。

「ここ、けっこう人が通るから、ちよつと恥ずかしかったけどね」

その言葉に、琴美自身もまわりに目を走らせた。ノーマイクで極端なショートカットと、そのフェミニンなデザインのワンピース姿はやはりちぐはぐだ。自分でもそれを気にしているのだろう。

「ふふ、なんか落ち着かないよね、二人とも」

「……うん」

琴美に促され、いつしよに歩き出しながら、拓也は、二人の会話が自然に和やかな口調になっているのに気

がついた。

「そういえば、前にも、こんな感じで歩いたこと、あったよね」

「え？　：：ああ、就職試験の時？」

「うん。あの時もそうだったけど、今日もすごく恥ずかしかった。なんだか場違いなところにいる気がして」

「あの時も今日も、二人とも、なんか、すごく馬鹿なことやってる」

拓也がそう言うと、琴美も苦笑した。

今日二人だけの秘密として、そんな共通の感覚を味わったことで、また心が通じた気がした。もしかすると、「共犯者意識」というようなことなのだろうか。

そんな会話を交わしながら、琴美に導かれるまま人氣のない狭い裏道を選んで歩き、駅の裏手まで来ると、琴美が「あそこ」とある建物を指さした。

その建物を見て、拓也は思わず「えっ!？」と声をあ

げた。

「だって、あれって、ラブホテルじゃないの？」

「そうだよ」

琴美は、こともなげに言った。

「もつとちゃんとしたホテルだと思ってたのに」

「この時間だと、ふつうのホテルは、ちやうどチェックアウトとチェックインの間の時間帯でしょ。男と女が二人で、少しの間利用できるところっていったら、

あんなホテルしかないじゃない。昼間は料金も安いし」
今日のことを打ち合わせているとき、健診後ホテル
を使って着替えることを提案し、どうやらその目途も
ありそうな口振りだったので琴美に任せていたのだ
が、まさかこんなホテルを考えていたとは思ってもみ
なかつた。

「だけど……」

そのラブホテルに向かって歩きながらも、拓也がと

まどつていと、琴美はこう念押しした。

「午後から会社に出なきやいけないんだよ。家に帰って着替えてる暇はないでしょ。特にそっちは、化粧とかいろいろあるわけだから」

それでも拓也が煮え切らない顔をしていると、さらに琴美がつけ加えた。

「これって、人が見たらやっぱり変だよ。女の方がホテルに誘ってて、男の方がごねてるんだもん」

昼間割引の「ご休憩料金」とはいえ、せっかくホテル代を払ったのだから少しは使わなければ損だと思
い、琴美がシャワーを浴びていると、バスルームの外
から「背広、ここに置いとくね」という拓也の声が聞
こえた。

「うん」と返事してから、琴美は、これじゃほんと
に「セックスの後の男と女」だなと、思わず笑ってし

まった。もちろん、自分の方が男ということになるの
だろうが。

この手のホテルらしく広くて豪華なタイル張りの洗
い場で体を拭いた後、バスルームから出る段になって、
琴美はちよつとためらった。もしかしたら、拓也がす
でに外の洗面台で化粧を始めているかもしれないと思
ったからだ。

いくらなんでも、拓也に裸を見られるのはいやだ。

しかし、洗面所に出てみると、拓也の姿はなく、そこには、きちんとハンガーに掛けて背広の上着とズボンが吊されていた。見ると、洗面台の上には、ワイシャツが、まるで新品のようにきれいに畳んで置いてある。このワイシャツも、先刻まで拓也自身が着ていたものはずだから、自分の着替えがすんだあと、わざわざ畳んだのだろう。

ふつうのホテルなどとはちがい、洗面所にはドアが

なく、ベッドルームの半分以上が見えているのだが、そこにも拓也の姿はなかった。たぶん、気をつかって、部屋の奥の方に身を隠しているのだ。

こういふところだけは、気の利く子なんだよね。

琴美はそう思いながら、いつものようにさらしを巻き、ワイシャツを着てズボンをはいた。

やっぱり、この方が落ち着くな。

短い髪をもう一度拭きながら鏡を見て、そう感じた。

背広を羽織り、ネクタイはしめずに首にかけたまま
でベッドルームの方に出ていくと、思った通りベッド
の奥の方に腰掛けていた拓也が、コンパクトを見なが
ら、すでに化粧を始めていた。

それを見たたん、琴美は、なぜか胸の高鳴りを覚
えた。

豪華な夜具のダブルベッドのはしに、ワンピースか
らのぞくきれいな膝頭を揃え座っているその姿が、あ

まりに様になつていたからだ。一方で、コンパクトを見つめるその表情に、なにか見てはいけないものを見てしまったような秘密めいた感じもあった。

「あ、あの、洗面所あいたから、あつちでやれば」

琴美の言葉に、初めて気づいたようにこちらを見た拓也は、あわてて、恥ずかしそうに立ち上がると「うん」と言った。

「そのワンピース、やっぱり、私よりずっと似合うよ

ね」

琴美がそう声をかけると、拓也は、さらに恥ずかしそうに「その背広も」と答えた。

そして、琴美の視線が耐えられないというように目をそらした。

「そんなに見ないで。まだメイクの途中なんだから」
そう言うと、ベッドの上に散らばったさまざまな化粧品の小瓶をそそくさとポーチに押し込み、まるで逃

げるように琴美の脇をすり抜けて洗面所に向かった。

琴美はそれを笑って見送った後、拓也と同じようにベッドに腰掛けて待つことにした。

なんだか手持ちぶさたで、部屋の中をあらためて見まわしながら、さっきの拓也の、どこか緊張したように照れていた顔の理由を考えていた。

もしかすると、大沢君って、こういうところ来るの初めてなのかな？

そう考えて、また、思わずくすつと笑ってしまった。
琴美の方は、もちろん初めてではない。かつて向坂
憲太とつき合っていた頃、憲太が北海道からやって来
たときには、いつも、ラブホテルで一夜を過ごしたも
のだ。

このホテルが、クリニックのそばにあるのを知って
いたのも——そんなことは無論、拓也には話してない
が——、じつは前に一度ここを利用したことがあるか

らだった。

あの時はたしか、この部屋じゃなかったと思うけど
：：。そういえばあの頃、憲太は、いつもこんな感じ
で私を待ってたんだよね。

当時の琴美は、今の拓也のようにメイクに時間をか
けていたわけではないが、それでも、シャワーのあと、
当時は長かった髪を乾かしたりしていると、身繕いに
はそれなりに時間がかかった。そんな時、憲太は、今

の琴美と同じようにベッドに座り、たばこをくゆらし
ていたものだ。

琴美はたばこを吸わないから、その点だけはちがう
が、まだネクタイを結ばず首からたらしただままにして
いるところまで同じだった。

そして、そんなふうに行っているうち、だんだん待ち
きれなくなつた憲太は、けっきよく洗面所の琴美のと
ころまでやって来るのだ。それから、鏡に向かった琴

美を後ろから抱きしめて、無理矢理という感じでキスしてくる。朝起きてからすでに一度、体を交えているというのに、まるで二人きりでいる時間を惜しむかのように。

そんなことを思い出し、今は自分がその憲太の立場にいるのだと思うと、なんだかにわかにおかしな感情がわき上がってきた。洗面所で化粧をつづけているはずの拓也のことが、無性に気になりだした。というか、

さつき、ここで化粧しているのを見た時感じたときめきとも重なって、拓也の顔がまた見たくなくなってきたのだ。

：：えっ、私、何考えてる？

ふと我に返り、そんな感情をあわてて否定した琴美は、またしばらくそのまま待っていたが、それでも、拓也の化粧は終わる様子がない。

：：ったく、何してるんだ。

それで琴美は、先刻感じたことから、もう一度、別の方向へ思考をやり直した。

大沢君って、こういうところ、来たことないんだ……。やはり拓也の方が、自分よりずっと精神的には幼いのだろうと琴美は思った。ものごとに対して無防備なくらい素直なところがあるし、あの「元恋人」だといふ実香との無邪気な関係を見ても、そんな感は強い。そもそも、そんな拓也だからこそ、琴美のこんな突

飛な思いつきにもつき合うことになったのだろう。言葉をかえれば、簡単に巻き込まれてしまったということだ。

そしてまた、そんな邪気のない素直さこそが、知り合ってから折にふれて感じた、拓也の何気ないやさしさにもつながっているのだという気がした。

そう思うと、琴美は、なんだか拓也に対し、自分が一方的に悪いことをしているような気がしてきた。

ものごとを簡単に受け入れてしまう拓也の素直さにつけこんで、私は、自分に都合よく振りまわしているだけなんじゃないか。

そう思った。

そして、あの三ヶ月前のケンカにしても、もしかすると自分は、そんな拓也の無防備さに対して腹を立てたのかもしれないと感じた。

柳田のような男の前で、拓也の素直さは、あまりに

もあぶなっかしい。

いや、柳田がけっして悪い男でないのはわかってい
る。しかし、柳田には、営業で鍛え抜かれた押しが強
さやずる賢さもある。柳田が本気になって拓也の素直
さにつけこもうとすれば、それは琴美の比ではないだ
ろう。拓也などひとたまりもないはずだ。そして、も
しそんなことになり、すべてが白日の下にさらされれ
ば、傷つくのはやはり拓也の素直な心なのだ。

自分はたぶん、それを恐れて、あの時腹を立てたのだ。

琴美はそう感じた。

そして、そう感じると、そんな拓也のことを守ってやれるのは、自分しかないという気がしてきた。拓也を巻き込み、こんな立場に立たせてしまった自分には、拓也を守る義務があるとも思った。

以前の亜莉沙とのことでも、それに近いことを考え

たことはあるが、亜莉沙の場合は、自分から巻き込んだわけではないし、けっして人間として好きだったわけでもない。それに、それこそ彼女を傷つける結末しか考えられなかったから、そうはしなかった。でも、拓也なら、自分はその素直さを全面的に受けとめ、包み込むことができるはずだ。

そう思ったとたん、琴美はベッドを立っていた。

部屋の中を移動し、洗面所の中が見える位置まで来

ると、鏡に映った拓也の顔が見えた。拓也はすでにほとんどの化粧を終え、今は口紅を塗っているようだ。立ったまま洗面所の鏡に顔を寄せ、集中しているらしく、琴美のことにはまったく気づいていない。

それで琴美は、なぜだか自分でもわからないまま、足音をしのばせるようにして洗面所スペースに入っ
ていった。

口紅を塗り終わり、紅筆をポーチにしまおうと手元

を見た拓也は、そこでやっと背後の気配に気づいたようだ。あわてて顔を上げ、鏡越しに驚いた表情で見つめてきた。ファンデーションが塗られ、アイメイクも丹念にされたその顔は、先刻よりもさらに魅惑的に見えた。上方からのミラーライトだけでなく、その光が大理石ふうの洗面台に当たった下からの反射光と合わせ、薄暗い洗面所の中でその表情を浮かび上がらせている。

拓也は、驚いた顔から、いったん琴美に向かって恥ずかし気に笑いかけてみせた。それもまた、こちらの心をかき乱すほどかわいらしい。

そのあと拓也は、琴美が何もいわずに見つめていることに不可解な表情を浮かべ、そしてさらに、そこにかすかなおびえのような翳がよぎった。

それを見た瞬間、琴美の中に、数日前に見た夢の残像がよみがえった。

これまでには経験のない、えもいわれぬ感情が、琴美を支配した。

それは、暴力的な衝動と言ってもいいようなものだった。

琴美は、拓也の片方の二の腕をつかむと、無理やりという感じてこちらを向かせていた。そして、口紅が塗られたばかりのその唇に、自分の唇を強く押し当てた。

一瞬の出来事に、拓也は驚きの目で、間近に迫る琴美の顔を見つめてきたが、その両手はだらりと下げたまま、抵抗することもなく琴美の腕の中に抱きとめられた。

ラブホテルの鏡には、いわばいつもと同じ「男と女の風景」が映し出されていた。

第11話

限月 げんげつ

……さっきのは、いったい何だったんだろう？

午後の定時ぎりぎりに会社に着き、制服に着替えて
デスクに座った後も、拓也はまだ呆然としていた。

琴美が突然あんなことをするなんて、思ってもみないことだった。

それだけに、拓也にはどう対処したらいいのかわからなかった。それで、琴美にされるままになってしまった。

ラブホテルの一室で、男装した女性に抱きすくめられキスされていた女装の自分。

客観的には、ひどく異常な気がする。

でも、不思議と嫌悪感はなかった。

あのあと、体を離した琴美は、一瞬、何か憑き物が落ちたような顔をし、うろたえた感じになった。そして何か言いかけ、すぐ口をつぐんだ。

拓也の方も、そんな琴美を上目遣いにちらちら見ながら、何の抗議もしなかった。それどころか、おたおたする琴美に、どこかいじらしいような感覚を抱いていた。

しばらくそんなふうには、二人ともその場に立ちつくしていたが、やがて琴美が「行こうか」とぽつりと言
い、拓也はそれにうなずいた。

それから、ひと駅ぶんだけ電車に乗り、二人で駅前
のハンバーガーショップで急いで昼食をとり、出社し
た。

その間、二人とも、クリニックを出た直後のような
会話はできず、ほとんど無言のままだった。しかし、

その無言は、ここしばらく二人の間にあつた無言とは大きく違っていた。

たとえば電車に乗っているときも、駅の改札口を出るときも、ハンバーガーショップのテーブルでも、琴美は、つねに拓也のことに気を配り、どこかかばってくれているような雰囲気があつた。拓也の側も、複雑な気恥ずかしさから琴美の顔をまともに見られない感じだったのだが、それにもかかわらず、琴美のそんな

気配りを敏感に感じ取れるほど、琴美のことを気にしていた。

少なくとも、二人とも、無関心であろうとするこれまでとはまったく逆の方向に気持ちかが向いていた。

そして、自分自身のそんなナイーブさもまた、不快ではなかった。というより、むしろ、心が微妙に打ち震えるような不思議な緊張感があつた。

そんなことを思いながら、二課のデスクのいちばん

端に座った拓也は、すぐ前の琴美のことを、それとなく見やった。

琴美は、先刻からずっとアポ取りの電話を入れている。本来は午前中にアポを取り、午後からは営業に出るのが日課だが、今日は健康診断があつたから、今電話しているのだ。

なんだか生真面目すぎるほど言葉を尽くし、相手を説得しようとしている琴美の電話を聞いていて、拓也

はなぜかおかしさがこみ上げてきた。そこまで丁寧にしやべつても、いきなりの営業電話など、きつと相手はちゃんと聴いていてはくれないだろうにと思ったのだ。

琴美の横の席では、やはり志村が電話していた。志村は今日健診に行ったわけではないのだから、午後は営業に出ているべきなのだが、先方からかかってきた長い電話に対応しているらしい。どうやら、手持ちの

顧客からのもののようにだ。

こちらは、琴美とはちがって「限月まではまだ日があるんですから、きつと値は戻しますって。ご心配なく」とか「もつと強気でいきましようよ」とか、妙に調子がいい。そのくせ、その中に、どこか言い訳めいた語調が混じるのも気になった。

志村が同じ課に配属され、しかも、同じチームのメンバーとなったことは、拓也にとっても気の重いこと

だ。

しかし、今のところ、たいした実害はこうむって
いなかった。二課に来て以来——というか、例の乱高下
以来——、志村は、こんなふうに顧客からの電話の応
対に忙殺されている。市場が落ち着き、他の営業マン
のところにかかってくる電話の数は減ったのに、志村
のところには、いまだに電話——それも、どうもクレ
ームめいた電話のようだ——が多い。

しかも、志村はなぜか契約や売買の事務処理をほとんど拓也に頼んでこず、自分でしたがつた。そのせいで、よけいに仕事を抱え込んでいた。そんなふうだから、拓也にちよつかいを出せないほど忙しいのだ。

志村は仕事をまわさず、琴美にはまわす仕事もない。その上今日は、柳田が午後から健康診断に出かけていて柳田に関する仕事もない。だから、拓也は比較的ひまだった。それでよけいに、さっきの琴美との出来事

を考えてしまうのだ。

と、その時、拓也の前の電話が鳴った。

「はい、平安トレードでございます」

拓也が出ると、受話器からは、やたらエネルギー感を感じた。ユな感じの男の声が聞こえた。

「もしもし、木村というもんだが、大沢君はいるかね」
「はい、少々お待ちください」

電話を保留にして琴美の方を見ると、琴美はちよう

どアポ取りの電話を切ったところだった。

「岡崎さ：：あ、大沢君」

一瞬、琴美の本名を呼びそうになって、拓也はあわてて言い換えた。

これまでは別の課だったから、会社で呼びかける必要はほとんどなかったのだが、これからはそうもいかない。でも、本来は自分のものである名前を呼ぶのは、まだ慣れていなかった。

「木村さんという人から」

拓也の言葉に、琴美は一瞬ポカンとした。自分宛に先方から電話がかかってくる経験など、これまでほとんどなかったからだろう。

そのあと、琴美は、まるで飛びつくようにして受話器を取った。

「はい、大沢です。……いつもお世話になってます。

……はい、……はい、わかりました。一時間後にはう

かがいます」

電話を切った琴美は、急いで営業カバンをつかんで席を立つと、拓也が「行ってらっしゃい」と声をかけるより早く、飛び出していった。

「決めた！」

琴美がパチンコ店の事務所に入っていくと、社長席の木村はいきなりそう言った。

「……は？」

デスクの前に立った琴美がポカンとしていると、木村は、琴美の顔を見上げてにやりとした。

「今、あんたの顔を見て、決心した」

なんのことだかわからず、琴美はまだ不可解な顔で次の言葉を待った。

と、木村はまた唐突に別の話を始めた。

「そういえば、この前の荒れ相場、俺の言ったとおり

だったろう」

「……あ、はい。ほんとに驚きました」

「ふふ、それでな。俺のカンも、まだまんざら捨てたもんじゃないと思ったんだ」

木村は、ちよつと得意そうな顔をしてみせた。

「で、もう一度、相場を始めてみようかってわけだ」

「えっ……あ、はい！」

「おい、まだそう単純にうれしそうな顔をするな」

勢い込んで身を乗り出した琴美を、木村はいったん、そう言つて制した。

「ちようどな、次に店を出すつもりで確保してた土地が、住民の反対運動にあつちまつて、話がつぶれた。

それで、その土地を手放した金が宙に浮いたんだ。借りた分を返しても、五億くらい残る。次の出店計画は半年以上先になるはずだし、その間、その金をゼロみたいな金利の銀行に預けとくのもばかばかしい。で、

そのうちの一部で遊んでみようかって気になったんだ」

「はい、ありがとうございます」

「おいおい、あせるなって言ってるだろ。まだ話は終わってない。じつは、そういう気になったのは、あんたに言われたからじゃない。その出店計画がだめになったって噂を聞きつけた証券会社が、昨日、さっそく営業に来てな。そいつに口説かれたからなんだ。とり

あえず、株の先物を五千万ばかりやることにした。さすが株屋だ。こっちの持ち金の額までしつかり調べてたぞ」

有頂天になりかけていた琴美は、その言葉に、一瞬にして肩を落とした。

しかし一方で、その言葉を不思議にも思った。

そう決めたのなら、なぜわざわざ呼びつけてこんな話をするのだらう。

琴美がそう思っていると、その感情の動きをすべて読んでいるという表情で面白そうに見ていた木村が、さらにつづけた。

「ただな。株はここのところ低調だし、先物にしたって大儲けはできんだろう。それに、その営業マンはしっかりとつなげたそつのない奴だったが、もうできあがってる感じで面白味がないんだ。そう考えたら、あんたを思い出した。あんたは、そいつにくらべりや、まだ半

人前もいいとこだが、少なくとも真剣味だけはある。つたないなりに、もがいてる。俺は、ついついそんな人間に肩入れしたくなるんだ。どうせ遊ぶなら、あんなが立派な相場師になるのにつき合ってやるのも、悪くないなという気がしてきた」

二転三転する木村の話に一喜一憂しながら、まだ次がありそうな気がして、琴美は、今度ははやる気持ちを抑えながら待った。と、案の定、木村が言った。

「ただ、あんたには、男として必要な何かが出来てる気がしてた」

琴美は、その言葉にどきりとした。人を見抜く目を持っていてそうで、自らもそのことに自信ありげな木村に、正体を見抜かれているのではないかと思ったのだ。

「あんたの真剣さは、結局は自分のことだけを考えてのもんだ。とにかく、自分の数字を上げなきゃってことばかりでな」

「いえ、そんなことは。私どもはお客様の……」

「そんな型どおりのおためごかしは言うな。俺は、本音で話してるんだ。俺が言いたいのはそんなことじゃない」

琴美の言葉をそう一喝してから、木村は話を継いだ。

「この前も言ったように、男が本当に真剣になれるのは、自分以外の大事なものを持ったときだ。俺は、そんな男にしか賭けたくない。そういうものが、あんだ

には見えんかった。それで、今日、あんたにじっくり話を聞いてみようと思ったんだ。この前の、女のこととかかな」

「はあ……」

とりあえず、正体を見抜かれたのではないことに安心しながら、木村がいったいどこに導こうとしているのかが見えず、琴美はあいまいにうなずいた。

「でも、どうやら、話を聞くまでもなかつたようだな。

今、そこを入ってきたあんたは、この前以上に男の顔をしてた。男の色気って言ったらいいか、そんなもんがぷんぷん臭ってたぞ。きつと、本気で守るべき何かを見つけたんだらう」

木村は結局、ある意味で見抜いているのだ。琴美は、そのことに愕然とした。

それは、今日の昼、あのラブホテルで琴美が感じていたことに他ならなかった。

「そんな男になら、俺の金も預けられる。あの株屋に預けたのと同じ額、五千万円だ。とりあえず三ヶ月、この金であんたの好きなように売り買いしてみろ。一任勘定になるといかんから、いちおう報告だけはしろ。ただ、俺は、あんたの判断にいつさいノーと言わん。責任とれとも言わん。この金は本気で遊ぶつもりだから、十倍二十倍にするつもりで、男らしく思い切ったことをやってくれ」

「えっ、ほんとか!？」

夕方になって健康診断から戻った柳田に、琴美からの電話の内容を伝えると、大きな声をあげた。

その売買契約の銘柄と枚数が——柳田自身の仕事ならともかく——、とても新入社員が初受注するような金額ではなかったからだろう。

「ええ、何度も確かめましたから、まちがいないです」

拓也が言うのと、柳田はまだ驚きからさめやらぬ表情で「あいつ、すげえな」とため息混じりに言った。

「しかし、これでやつも、悩んでた甲斐があったってもんだ」

少し落ち着いた表情でそう言ったところで、やつと柳田は、当の琴美がまだ帰社していないことに気づいたのだろう。「で、大沢は？」ときいてきた。

「お客様の場所が川崎なんで、向こうで契約書まとめ

て、八時までには戻ると言っていました」

「そうか。俺が残って迎えてやりたいけど、あいにくこれから大事な客のそこへ行かなきゃならないんだ。

初めてのことだし、書類に不備がないかチェックも必要だろう。琴美ちゃん、悪いけど、奴のこと待っていてやってくれないか」

「はい」

同じチームの事務員として、もともとそのつもりで

いた拓也は、にっこり笑ってうなずいた。

昨日までだったら、おそらく、琴美の初受注をこんなに喜べはしなかつただろう。でも、先刻、琴美からの電話を受けてから、拓也は、自分の気持ちまでなんだか浮き立つように感じていた。

それはたぶん……今日の昼のあのことのせいだ。

時計は八時を十五分ほどまわっていた。

琴美は、まだ戻ってこない。

この間やり残していたあれこれの事務処理もほとんど片づいてしまい、手持ちぶさたになった拓也は、椅子に座ったまま大きく伸びをしてフロア全体を見渡した。

通常なら、この時間帯には、まだ各課に残業する社員がいるはずなのだが、今日は拓也一人になっていた。みんなが退社してしまっただけではない。かなりの人

間がまだ帰ってこないのだ。

先物の場合、昼間、勤務先などに訪ねられる顧客ばかりではないから——この前の乱高下のアフターフォローのため——、個人客の自宅まで行っている営業マンが多いのである。

広いオフィスに一人で、やることがなくなってしまう。拓也は、最近、日報用紙がないという声を頻繁に聞くのを思いだした。それで、いい機会だから用紙の

ストックを作っておこうと考え、席を立ち、キャビネットからフォーマット集のファイルを出した。

こうした用紙がすぐなくなるのは、全社的に省資源・リサイクルの通達が出ているからだ。社内文書には、できるかぎりコピーのウラ紙を使うように言われている。ところが、コピー機のそばの回収箱に、裏表やサイズも考えずに雑然とつまれた使用済みの紙を揃え、ふたたびコピー機のトレイに入れるのは、思った

以上に時間のかかる作業なのだ。それで、こうした用紙を作るような場合も、当面必要な分だけしかコピーしないということになる。

たぶんこれは、営業マンたちがちよつと気をつかつてくれれば解決できることだ。使用済みの紙を回収箱に入れる段階で——女子事務員たちがそうしているように——、大きさや裏表を揃えて入れてくれれば、こんなに面倒ではない。ところが営業マンたちは、まる

でゴミ箱に捨てるように回収箱につっこむのである。自分たちは、それで、リサイクルに「協力した」というつもりになっているのだろうが、あとでかかる労力を考えれば、かえって無駄をつくっているようなものだ。

要するに、リサイクルなんて面倒で後ろ向きなことは男の考えることじゃないという感覚が、どこかにあるからにちがいない。

オフィス内での営業マンと事務員——男と女の思惑は、いつもこんなふうになすれ違ふ。

ウラ紙を揃えてトレイにセットしながら、拓也はそう思った。

スタートボタンを押し、軽いうなりをあげて動き出したコピー機を見ているうち、拓也は、昨夜の柳田の言葉を思いだしていた。

柳田の考えていることにも、どこかに、そんな「す

れ違い」があるような気がしたからだ。

おそらく、昨夜、柳田が伝えたかったのは「俺がこんな道を選んだのは、琴美ちゃんを思っているからだ」ということだろう。一見それは、やさしくて男らしい行動のように見えるが、本当にそうだろうか。

こちらの気持ちは何もたしかめもせず、自分の思惑だけですべてを決めて、その上で、あんなふう「答え」を迫ってくるのはちよつと卑怯な気がする。そこ

には、柳田の想定するような「答え」しかなく、他には何の逃げ道も用意されていないのだ。

実際の話、男である自分には、それに答えようもない。まあ、たしかに、根本的ところで柳田をだましているわけだから、悪いのは自分の方なのだけれど、たとえば自分が本当の女の子だったとしても、あんなふうにすべてを準備された上で答えを求められれば——うれしいと思う気持ちがあったとしても——、きつと

戸惑うはずだ。

そこには、将来設計とかの前向きなことこそ、男が考えリードすべきだという感覚がある。

そのうえ、たとえこちらが拒否したとしても、「自分の選択は会社のため」という、プライドが傷つかないような逃げ道まで、柳田の側には用意されているのだ。

それはやっぱり男らしさなどではなく、男の思い上

がりだし、男のずるさだ。

それにくらべたら、今日の昼、琴美がとった行動の方が、ずっと気持ちが悪く、ストレートに出た、男らしい———
——とか、人間らしい———もののように思えた。

そんなことを考えていた時だった。

フロアのドアが開き、誰かが入ってくる気配がした。
琴美が帰ったのかと思い、そちらを見ると、そこに立っていたのは志村だった。

「あ、お帰り」

「よー、琴美ちゃんじゃないの。遅くまで、ごくろーさん」

その言い方にちよっと違和感を感じながら、拓也が「今まで、お客さんのところ？」ときくと、志村は口をゆがめて笑いながら、妙な感じに体を前後に揺すつた。

「ふ、客？ 客なんて、バカばかりだ。うまい儲け

話だと思って飛びついたくせに、今ごろになって、だ
まされたとか言うんじやねえよ、バーカ」

その言葉のはしびしが、ひどくもつれている。

「なに？　酔ってるの？」

「脳天気の俺だって、酔わずにいられないこともあんな
だよ」

焦点が定まらないまま見つめてくるその目つきに、
けっして気分よく酔っているわけではない異常さを感じ

じ、そんな志村の気持ちこそらそうと、拓也は別の話題に切り替えた。

「そう言えば、岡：：大沢君が、初受注したわよ」

「：：大沢が？」

「うん、総額五千万だって」

「：：えっ！」

やはりその話題が功を奏したらしく、志村はとたんに、少しまともな顔つきになって絶句した。しかし、

その様子は、けっして、同じ新入社員として、また同じチームメンバーとして喜んでいるというふうではなかった。一点を見つめたまま、何か考え込んでしまっただのだ。

拓也は、そんな志村の様子に、やはりなんだかわからない異常さを感じ、目をそらせ、しばらくコピー機の液晶盤の枚数表示を見ていた。やがて、志村が口の中になにかぶつぶつ言った。拓也の耳には、「そうか、

そういうことか……」と聞こえた。

「え、なに？」

拓也がふたたび目を向けると、志村は、今度は皮肉な笑いを浮かべていた。

「ふ、柳田さんの客を、俺には内緒でもらい受けたつてわけだ」

「えっ、そんなこと……」

拓也があわてて否定しようとする、それにかぶせ

るように、志村が大きな声で言った。

「ああ、どうせそうさ。みんな俺には冷たいんだ。柳田さんは、俺のことが嫌いなんだろ。俺のが売れてるのが気に入らないんで、それで、あんな大沢なんかに……」

その言葉に、拓也は、今度はひどく腹が立った。

「志村君、よく知りもしないで、そんな言い方って、ないんじゃない」

「ああ、そうか。琴美ちゃんも大沢の味方ってわけだ。そうだよな。やつぱり、俺には、ずーっと冷たいもん
な」

「……志村君、なに言ってるの」

志村が一步近づいてきたので、拓也は、思わず後ずさりながらそう言った。

「なんだよ。そっちこそ、俺の気持ちなんて知りもしないで。……いや、知ってんだよな。知ってるくせに、

俺のこと、もてあそんで楽しんでるんだよな。わかったよ、そんなら、今度は俺の方がもてあそんでやろうじゃん」

その言葉に、やっと本当の危険を感じ、拓也は逃げ出そうとした。

しかし、拓也が向きを変え、一二歩踏み出したところで、後ろからタツクルするように志村がしがみついていた。

「いや……、何するの」

拓也は体中の力を振り絞って、その腕をほどこうと
した。

と、拓也が後ろに向かって振った腕が、志村の脇腹
にひじ鉄のような形で強烈に入った。

「……うっ」

本来、同じ年の男同士だ。その思わぬ力強さにたじ
ろいだのだろう。拓也を抱いた志村の腕の力がゆるん

だ。

その隙をついて、拓也は志村を振り払い、デスクの間の通路に逃げた。

ところが、数歩逃げたところで、今度はカーペット
タイルにヒールを引っかけ、つまづいた。おまけに、
よろめいた先に、ひとつだけデスクから飛び出すよう
に置かれた椅子があった。それで肩を強く打った。

その痛さに、拓也は片手で肩を押さえ、床の上に仰

向けに転がった。

とたん、追ってきた志村が、体ごとその上に覆いかぶさってきた。

先刻の拓也の反撃に、酔った志村の神経はさらに異常さを増したようだ。

拓也の両腕を両手で床に押し付け、馬乗りになると、口元に不気味な笑いを浮かべ見下ろしてきた。

その目つきに先刻以上の恐怖を感じ、拓也の体の力

が一瞬萎えた。

今、自分は男に襲われようとしているんだ。

本物の女のようにそう感じた

それは、馬乗りになった志村の体がさらに前ににじり出たことで、スカートが完全にまくれあがったせいでもあった。

その志村の顔の背後では、コピー機から漏れた緑色の光の帯が天井を這うように動いていた。

そちらに目を移したことで、志村の視線から逃れ、拓也はやっと本来の自分を取り戻した。

いけない。このままいけば、いずれにしても、自分の正体がばれることになる。

そうならば、琴美の正体だってわかってしまう。

琴美は、せっかく初めて大きな仕事ができたというのに、それが台無しになるのだ。

そう思ったとたん、また、押さえつけられた腕に力

が戻った。その腕をもがくように動かし、同時に、膝を曲げ足を踏ん張ってブリッジするような形で、志村の体をはねのけようとした。

「ば、馬鹿野郎。かわいいと思つて優しくしてればつけあがりやあがつて。女のくせに」

ふたたび反抗されたことであせつた志村は、大声でそう言った。

と、その声を聞きつけたというように、廊下を走つ

て近づく足音が聞こえた。

「な、なにしてるんだ」

フロアに入ってきて叫んだその声は、琴美だった。

志村が、その声に振り向いた。

「……し、志村？」

琴美は、その顔を見て、今度は呆然とした声をあげた。

琴美も驚いたようだが、志村はさらに動転していた。

夜のオフィスでレイプしようとしているところを同僚に見られたのだ。酔っていても、ことの深刻さだけはわかったようだ。

しかし、その後の状況判断は、完全に狂っていた。

志村は、拓也の腕を振り払うようにして立ち上がる
と、いきなり、わけのわからないわめき声を上げて、
猛然と琴美に突進した。こんな姿を見られたことだけ
でなく、先刻からのねじ曲がった思いが、暴力的に琴

美に向かつて集約されたにちがいない。

「あぶない！」

あわてて半身を起こした拓也は、そう叫んでいた。

尋常でない志村の勢いに、琴美が打ちのめされるのを予感したのだ。

と、次の瞬間、オフィス全体を揺るがす地鳴りのような音がした。

そして、いきなり静寂が訪れた。聞こえるのは、ま

だ動いているコピー機の単調な反復音だけになっていた。

見ると、志村は、床の上にみつともなく仰向けになつて気絶していた。

一瞬、拓也には、今日の前で起こったことが理解できなかつた。しかし、残像を頭の中でスロー再生するようにして、やっと把握できた。

殴りかかった志村を、すかさず腰を落とすような構

えで避けると、琴美は、その腕を下から両手でつかんだ。そして、そのまま無理のない回転で体を回し、右肩に背負った。いったん体を伸ばして志村を吊り上げた後、そのままの勢いで体を前に折り曲げ、背中越しに投げ飛ばしていた。

きれいな一本背負いだった。

「だいじょうぶ？」

琴美に声をかけられた時点で、やっと拓也は、琴美

が柔道の有段者だったことを思い出した。

「う、うん」

そう返事してから、まくれ上がったスカートに気づき、拓也はあわててそれを直した。

と、近寄ってきた琴美が、片手を差し出した。

拓也は、それにすぎるようにして立ち上がった。

「志村君、あのままにして来ちゃったけど、ほんとに、

よかったの？」

駅からの道を部屋に向かって歩きながら、拓也がぼつりと言った。

契約書のチェックもそこそこに、二人そろって会社を出た時から、青白い顔でほとんどなにもしやべらなかつたが、拓也にもやつと、志村のことを心配する余裕が出てきたということだろう。

「うん。ちよつとやり過ぎちやつた感じだけど、単純

に気絶してるだけだったから、きつと、今ごろ気がついてると思うよ。それに、もし目が覚める前に会社の人間が戻ってきたとしても、あれだけ酒の臭いをさせてたら、単純に酔いつぶれてるだけだと思っただろうし」

琴美の言葉に、拓也はこくんとうなずいた。

「だけど、あいつ、あんなことする奴だとは思わなかったな」

琴美がつづけてそう言うと、拓也は、琴美の方にち

よつと視線を走らせた後、恥ずかしげに目をそらせた。もちろん、さっきのことは、拓也が一方的に被害者だったわけだし、べつに恥ずかしがることではないはずだが、やはり、男である自分があんな目にあっていたところを見られたことが恥ずかしいのだろう。

琴美はそう考えた。そして、そのあと、やっつと、今日の昼のことを思い出した。

初受注で大口を取り付け、その後、あんなレイプ事

件があったせいで、興奮してすっかり忘れていたが、あのラブホテルでの出来事はまだ今日の昼のことだ。

そのことに気づいたところで、琴美は愕然とした。

よく考えてみれば、今日、拓也に無理やり襲いかかったのは、志村ばかりではない。

拓也にとって「あんなことをする奴だと思わなかった」のは、琴美だって同じだろう。

あのこと、あやまらなければ……。

琴美は、そう思った。

「あの……、昼間は、ごめん」

「……？」

琴美の言葉に、拓也は聞き返すような目を向けてきた。

「……ホテルで」

琴美が言うと、拓也はちよつとうなずいた後、また恥ずかしげに目を足もとの歩道に落とした。

その表情からは拓也がどう感じているのか、よくわからなかった。それで琴美は、さらに言い訳を加えなければならなくなった。

「あの……大沢君が……、あんまり……かわいかったから」

その言葉にぴくりと肩を震わせた感じはあったが、その後も、拓也は下を向いたまま歩いていた。

そのせいで、琴美は、今の自分の言葉が失敗だった

かと思った。

そんな言われ方をして、拓也がさらにプライドを傷つけられ、気分を害したかと思ったのだ。

ふと気がつくのと、すでにマンションすぐ近くの路地まで来ていた。拓也とは、ここで別れることになる。

拓也は、この角を折れて自分のアパートの玄関側に行くはずだ。

なにかまだ言い残していることがあるような気がし

て、琴美は、あせりにも似た気分を抱え込んでいた。
と、その角まで来たところで拓也が立ち止まり、琴
美の方を向いた。

「今日、おめでとう」

「……？」

拓也の言った言葉に、今度は琴美が聞き返すような
目を向けた。

「初受注」

「……あ、うん。ありがとう」

琴美がそう答えると、拓也は、「おやすみ」と言っ
てきびすを返した。

部屋に入ってきた後も、琴美の気持ちは、どこか落
ち着かなかった。

背広を脱ぎトレーナーとジーンズに着替えた後も、
ベッドに腰掛けたまま、今日一日のことを考えていた。

今日は、さまざまなおことがあった日だった。

自分にとってそうだったように、拓也にも——いや、拓也にとってはそれ以上に——、動揺を繰り返した一日だったろう。

そんな拓也と、あれだけで別れてしまったことを、琴美は悔やんでいた。

今日、私は、あの子のことを守ってやろうと思ったのだ。

もつと、やさしい言葉をかけてあげるべきだったんじゃないだろうか。

そう思った。

そして、拓也の部屋との間にある窓の方を見やった。窓の向こうに拓也がいるのだと思うと、なんだか妙に切なかった。

その切なさは、先刻、志村が拓也に襲いかかっているのを見たときの動揺から来ている気がした。

あの時は、志村の方から向かってきたから、むしろそのことで背負い投げ一本で決めることができたが、もしそうでなければ、琴美の方から殴りかかっていた気がする。そうなれば、もっと前後不覚の泥仕合になっただろう。

それほど、あの光景を見たときの琴美は冷静ではいられなかった。志村に自分の大事なものを踏みにじられている気がして、ひどく動転していたのだ。

そして、そう言えば前にもそんな気持ちになったことがあるなと思った。

あれは、拓也が柳田とデートしているのを目撃したときだ。相合い傘で柳田に肩を抱かれた拓也を見たとき、琴美の心はひどく乱れた。そして、そのあと、前後不覚になって拓也を責めたのだ。

そんな制御不能になってしまいう自分の心情を思い、琴美は、今日の昼、拓也を守ってやろうと考えたのは、

自分が思っているのよりずっと心の奥深くから来ていることなのだと感じた。

今日、木村に言われたことは、本当なのだ。

私は、大沢君のことを……愛している。

琴美は、やっと、自分の本当の気持ちが見えた気がした。

そして、そのことを拓也に伝えたいと思った。

そう考えてベッドを立ち、そこでちよつとためらっ

た。

もしかしたら、自分の考えていることは、拓也にと
って迷惑なことかもしれれない。さっきの「かわいい」
などという言葉と同じように、拓也の男のプライドを
傷つけることかもしれれない。

そんな気がしたのだ。

と、その時、見つめていた窓の向こうで、拓也の部
屋の窓が開く音がした。

琴美がまだためらっていると、今度は、琴美の方の窓がノックされた。

それで、琴美はやっと窓に近づき、開けた。

向こうの部屋で、拓也は窓際のベッドの上に立て膝して、こちらを見返してきた。

「どうした？」

自分の方からやさしい言葉をかけようと思っていたのに、そんな言い方をしてしまった。

「……うん」

拓也はそう言って、先刻と同じように恥ずかしそうにうつむいた。なにかを迷っているようだ。

通勤用のワンピースから部屋着に着替えているが、オイルブラはつけたままなのだろう。白いタートルネックセーターの胸には、二つの丸いふくらみがある。下もチェツクのミニスカートだ。前髪の上をおさえた白のヘアバンドもかわいい。

「ちよつと……相談したいことがあつて」

「なに？」

さらにそんなふうにつっけんどんに問いつめている自分に、琴美はちよつとあせつた。

「じつはね……、昨日、柳田さんにプロポーズされたの」

「えっ！」

拓也の言葉に、琴美は思わず大きな声をあげていた。

「どうしたらいいと思う？」

「どうしたらって……そんなこと、決まってるじゃない！」

また動転し、強い口調でそう言ってから、琴美は「しまった」と思った。これでは、この前のケンカと同じことになってしまう。

と、拓也は、やっと目を上げ、琴美のことを見つめた。それから、なにかを思いきるように言った。

「ううん、そういうことじゃなくて……、岡崎さんは、
どうして欲しい？　つまり、その……男として」
「……えっ？」

琴美は、絶句していた。

そんな琴美を、拓也はさらに大きな瞳で見つめてきた。
た。

琴美は、今日の昼キスしたあとと同じように、また

うろたえるように目を泳がせていた。

じつは、拓也自身もそうしたい気持ちだった。

今自分が言ったことを、ちよつと悔やんでいた。これ以上ないほど恥ずかしいことを言ってしまった気がする。

でも拓也は、琴美の顔を見つめつづけた。

もし、ここで琴美が拒めば、それで、一年近くつづいたこのゲームも、ゲームとして終わるのだという気

がしていたからだ。

しばらくそんなふうに行っていると、目を泳がせていた琴美がうつむき、小さく首を振った。そして、そのあと顔を上げると、今度は覚悟を決めるように、きっぱりと首を横に振った。

「だめ。ぜったいにだめだ。もう、柳田さんとはプライベートではつき合わないで欲しい。私の……僕の方だけ見ていてほしい。男……として」

その言葉に、拓也は、張りつめていた肩の力がすつと抜けていく気がした。

琴美の方は、言い終わったあと、ちよつとだけ照れた顔をした。

そんなふうには、またしばらく、窓越しに見つめ合っていた。

そのうち、拓也はそうしているのがなにか不自然な気がしてきた。

：：：そう。さつきから僕が求めていたのは、こんなことだけじゃない。もっと別のことなんだ。

それで、また口を開いた。

「あの：：：そっちへ、行ってもいい？」

「：：：？」

琴美が聞き返すような顔をしたので、拓也は言った。

「今日、あんなことがあったから、部屋でひとりでいると落ち着かなくなつて：：：つていうか：：：こわいの」

その語尾に、自然に、少しだけ甘えるような口調がつけ加わった。

と、琴美は笑ってみせ、手をさしだした。

窓枠に足をかけたところで手を握られ、それで逆にバランスを崩し、琴美の部屋に飛び降りた拓也はよろけてしまった。

すると、それを支えるように琴美が両肩を抱いてきた。

そんな体勢で見つめ合うと、今度は、琴美はあせつた感じでその手を離そうとした。

「ううん、そのままにしてて」

あわてて拓也が言うと、琴美はその姿勢のまま体を固めた。

「あのね、今、こわいって言ったの、ちよつとだけウソ」

「……？」

「ほんとは……ずっと……こんなふうにしてほしかったの。さつき、会社で助けてもらったときも、それから帰ってくるときも、ずっと」

その言葉に、琴美は一瞬あつけにとられたような顔になり、そのあと、あきれたように苦笑した。

「もう、すっかり女の子なんだから。こわいとかって、女の子のずるさだよね」

「だって、今日は、いろんなことがあったんだもん」

「……うん、ごめん」

「ううん、そうじゃなくて。今日は、うれしいことが、
いっぱいあったの」

拓也はそう言ってから、今日一日、思っていたこと
を話した。

「ホテルでのあのことも、そりやあちよつとびつくり
したけど、ちつともいやじゃなかった。それからもち
ろん、夜、助けてくれた時もすごくうれしかった。で

も、いちばんうれしかったのは、岡崎さんが受注したって電話受けたとき。なんか自分のことみたいにうれしかった……。の。岡崎さんがやってきたことがやつと報われたっていうか、これで、岡崎さんが元気を取り戻せるって思えたから。だって、僕は……。あたしは、そのためにこんなふうにしてきたんだもんね。だから、志村君が、そのことを馬鹿にするようなこと言ったとき、すごく腹が立ったの。それで、あたし、岡崎さん

のこと、けつきよく、知り合った頃からずっと好きだったんだって……。だから、こんなふう……。」「

そこまで言ったところで、拓也は、それ以上しゃべれなくなった。

琴美が、口をふさいだからだ。

琴美は、拓也の両肩に置いていた手を背中に回し、抱き寄せ、そしてキスしてきた。

一瞬、拓也は昼間そうされたときと同じように驚い

て、されるままになっていたが、すぐに自らも、腕を琴美の背中にまわし、そのキスに応えた。

そう、僕は：：あたしは、さつきからずっとこんなふう抱きしめられたかったんだ。この人のことが、好きだから。

拓也は、今しがた自分の口から出たことを、あらためて心の中で確認していた。

琴美は、長い間、そんなふう抱きし

めていたが、やがて唇を離すと、こう言った。

「だけど、けつきよく、さつきからずつと、そっちにリードされっぱなしだよ。男としては落第だな。：

：僕は」

「ううん、そんなこと、男とか女とか関係ないんじゃない。けつきよく、素直な方がリードするんだと思う」

拓也がそう言うと、琴美はまた苦笑し、拓也の肩を抱いたまま、ベッドへと導いた。

そこで二人でベッドに腰掛け、あらためて顔を見つめ合った。

拓也はふと思い出し、いたずらっぽいや顔で言った。

「そういえば、あたし、今日、もつとうれしいことがあつたんだよ」

「……ん？ なに？」

「さつきね、帰り道で、かわいって言ってもらえたの」

その言葉に、琴美はいとおしそうな笑顔を浮かべ、またキスしてきた。

そして、そのままの勢いで、拓也をベッドの上に押し倒した。

「僕、なんか……今すごく……欲しい」

琴美は、そういう言いながら、拓也の体に手を這わせ
てきた。

ちよつとくすぐったくて身もだえながら、拓也もそ

うした方がいいかと思い、おずおずと琴美の胸に手を伸ばした。

と、琴美は、ちよつと心外だという顔をしてみせた。

「こういう場面くらい、僕にリードさせてよ。だって、女の子なんだから……琴美は」

その時、拓也は、そう呼ばれたことが、今日最もうれしいことだと思えた。

こうして、この夜から、拓也と琴美は、私生活でもお互いの名前を取り替えて呼ぶようになった。

しかし、皮肉なことに……。

公私とも「拓也」になったはずの琴美の体内に、新たな生命が宿ったのは、たぶん、この夜だったのだらう。

- 「公開版」はここまでです。
- ◎ここまでを気に入っていただき、ラストまで読みたいという方は、下のボタンを押し有料の「完全版」をご購入ください。代金は**500円**です。
- ◎販売サイトとして [BOOTH] を利用しています。
- ◎ページが開いたら、**[PDF完全版(スマホ向け)]** をカートに入れ、支払いページに進んでください。
- ◎支払い完了時点で(オンライン決済の場合はすぐ)、ダウンロードが可能となります。

完全版を入手する

フューチャー・トレーディング

Future Trading

<公開版>

CopyRight 2001 by 前橋梨乃 (立石洋一)

あなたが個人で楽しむ目的以外での内容の無断コピー、および、ネット・印刷物への掲載、売買・譲渡を禁止します。

Share Text Fee ¥500